

茨城県教育財団文化財調査報告第400集

中道南遺跡

都市計画道路十王北通り線整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成27年3月

茨城県高萩工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第400集

なか みち みなみ
中 道 南 遺 跡

都市計画道路十王北通り線整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 27 年 3 月

茨城県高萩工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため、また県土の均衡ある発展を支える基盤として、その骨格となる一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を推進しているところ です。

その一環として整備される都市計画道路十王北通り線は、日立市北部に位置し、JR常磐線により東西に分断された旧十王町の市街地を結ぶだけでなく、現在の主要地方道十王里美線の起点として住宅・工業団地を経由し、国道6号まで結ぶことで、県北地域における東西方向の連携の強化を図るものです。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である中道南遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県高萩工事事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、中道南遺跡は平成25年7月から9月までの3か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、中道南遺跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県高萩工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに對し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、日立市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に對し、深く感謝申し上げます。

平成27年 3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は茨城県高萩工事事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成25年7月1日から9月30日まで発掘調査を実施した、茨城県日立市十王町伊師本郷字中道南958の一部他に所在する中道南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成25年7月1日～平成25年9月30日
整理 平成26年9月1日～平成27年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 綿引英樹
次席調査員 小川貴行
次席調査員 木村光輝
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、木村光輝が担当した。
- 5 第7号竪穴建物跡から出土した刀子、第9号竪穴建物跡から出土した刀飾金具、第10号竪穴建物跡から出土した鏃、第16号竪穴建物跡から出土した刀子、第18号竪穴建物跡から出土した火打金・刀子、第27号竪穴建物跡から出土した鏃の保存処理については、パリオ・サーヴェイ株式会社に委託した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = +75600\text{ m}$ 、 $Y = +76960\text{ m}$ の交点を基準点 (A1a) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。










遺構 P-ピット SB-掘立柱建物跡 SD-溝跡 SI-竪穴建物跡 SK-土坑
遺物 DP-土製品 M-金属製品 Q-石器 TP-拓本記録土器
土層 K-攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・施釉・被熱痕		炉・火床面
	竈部材・粘土範囲・黒色処理		柱あたり・煤
	石器		土製品
	石器		金属製品
			硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は()を、推定値は[]を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

- 7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SB 2 → SB 2A・SB 2B

欠番 SK 1 SK 8

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	11
1 奈良・平安時代の遺構と遺物	11
(1) 竪穴建物跡	11
(2) 掘立柱建物跡	93
(3) 溝跡	102
(4) 土坑	104
2 その他の遺構と遺物	106
(1) 溝跡	106
(2) 土坑	108
(3) 遺構外出土遺物	110
第4節 まとめ	112
写真図版	PL 1～PL12
抄 録	
付 図	

中道南遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

中道南遺跡は、日立市の北部に位置し、小石川右岸の標高約 25m の台地上に立地しています。

都市計画道路十王北通り線改良事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、3,309㎡を対象として平成 25 年度に発掘調査を行いました。



遺跡の内容

当遺跡は東西約 300 m、南北約 200 m の範囲で確認されており、調査区はその南端部にあたります。調査の結果、竪穴建物跡 36 棟、掘立柱建物跡 5 棟、溝跡 11 条、土坑 12 基を確認しました。主な出土遺物は、土師器（坏・椀・高台付坏・蓋・甕・甗）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・横瓶・甕）、墨書土器、鉄製品（刀子・鋸・鎌・火打金）、青銅製品（刀飾金具）です。



中道南遺跡調査区遠景（西側から）



凝灰岩の切石を使った竈のある竪穴建物跡



支脚が2か所並ぶ竈



掘立柱建物跡の柱穴から出土した須恵器



出土した墨書土器

調査の成果

当遺跡は奈良時代から平安時代にかけて、継続的に営まれた集落であることが分かりました。第2B号掘立柱建物跡は、9か所の柱穴が確認できました。この掘立柱建物跡は総柱そうばしらの構造で、高床倉庫たかゆかそうことして使用されていたと考えられます。その柱穴からは、「牧」と墨書された須恵器が見つかりました。他の遺構からも「小里」「本カ」「貞カ廣」の墨書土器が見つかり、当集落における識字者の存在がうかがえます。また、竪穴建物跡の中には、凝灰岩の切石を竈の袖部に使ったものや、支脚が2か所並んでいるなど特徴的な竈が確認されました。

当集落周辺には、北東約900mに古代官道に設置された藻島駅家めしおうまや推定地や、東約300mに古代官道の推定ルートがあります。東北地方の土師器や県央部・県南部で製作された須恵器が出土していることから、古代官道を利用して、他の地域との交流を行っていたことが考えられます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県高萩工事事務所は、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるために都市計画道路十王北通り線街路整備事業を進めている。

平成24年5月25日、茨城県高萩工事事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、都市計画道路十王北通り線街路整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成24年6月5日に現地踏査を、平成24年6月19日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成24年6月25日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県高萩工事事務所長あてに、事業地内に中道南遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成25年1月22日、茨城県高萩工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成25年2月14日、茨城県高萩工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成25年2月20日、茨城県高萩工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、都市計画道路十王北通り線街路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成25年2月25日、茨城県教育委員会教育長は茨城県高萩工事事務所長あてに、中道南遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県高萩工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成25年7月1日から9月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

中道南遺跡の調査は、平成25年7月1日から9月30日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	7月	8月	9月
調査準備 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 写真整理			
撤収			

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

中道南遺跡は、日立市十王町伊師本郷字中道南 958 の一部他に所在する。

日立市は、県の北東部、久慈川以北に位置し太平洋に面している。市域は、南北に連なる多賀山地を中心に、東側は海岸台地、西側は里川谷、南側は久慈川下流低地に区分される。市の大半を占めている多賀山地は、阿武隈高地の南端にあたり、古生代の花崗岩質岩石や変成岩で構成され、頂上部が比較的なだらかなドーム状の山地である。その周縁部には標高 70～150m の頂部平坦面をもつ丘陵が分布している。丘陵部から海岸部まで段丘状の地形が日立海岸台地であり、太平洋に沿って幅 1.5～2km の帯状に広がり、標高は多賀山地と接する西側で約 120m、東端は 20m 前後で崖となり太平洋に臨んでいる。当遺跡は、西側の多賀山地から東側の海岸低地へ下がっていく日立海岸台地の中間にあり、北側の小石川と南側の横川に挟まれた地形には浸食及び開折作用の結果、高低・広狭の平坦面あるいは大小の谷が形成されており、複雑な地形景観を呈している¹⁾。

海岸台地の地質は、多賀山地の日立変成岩類や花崗岩類で構成された基盤層の上部に厚さ約 5m の海成砂層や変成岩類の角礫からなる斜面堆積物が認められ、これに鹿沼軽石層を中位に挟む関東ローム層が覆っている²⁾。

当遺跡は、JR 常磐線十王駅から北東に 1.2km で太平洋岸まで東へ約 1.5km の地点に所在し、小石川右岸の標高 25m ほどの海岸台地上に立地している。この台地は馬の背状を呈している。今回の調査区域は、その台地上の緩斜面部にあたり、調査区の西から東にかけて緩やかに傾斜している。調査前の現況は畑地である。

第2節 歴史的環境

中道南遺跡が所在する海岸台地上には、旧石器時代から近世までの遺跡が数多く所在している。ここでは、当遺跡の盛衰にかかわる時期の歴史的環境について述べる。

古墳時代において、当遺跡のある市域内の海岸台地の縁辺部には、多数の古墳や横穴が分布している。大化の改新以前には、市域は北部が多珂国、南部が久慈国に属していた。久慈川流域に位置する久慈国造が水軍と結び付く物部氏一族で、水辺の経略に活躍した。それに対して、多珂国造には、「常陸国風土記」多珂条にある「峰險しく岳崇しと以為して、因りて多珂の国と名付けき」から、大和朝廷の経略が新治から多珂への山沿いの地を進み、いわゆる東山道経由の延長で多珂の山地に入ってきたことが推測されるように、内陸的な性格が見られる³⁾。当遺跡周辺の主な古墳は、十王台古墳群 (13)、藻島台古墳群 (75)、上台古墳群 (74)、赤見台古墳群 (41) 等が確認されている。十王台古墳群の第 15 号墳である前方後円墳からは、被葬者の権威を示すような金銅製の馬具飾り金具が出土している⁴⁾。藻島台古墳群から上台古墳群にかけて古墳 17 基が存在し、第 5 号墳が前方後円墳である以外は、円墳である。7 世紀に入り、横穴墓が造営され始める。横穴墓の被葬者は古墳の被葬者より低い階層であると考えられてきたが、市南部の赤羽横穴墓群 B 支丘 1 号墓からは、金銅製の冠金具や馬具などが出土している。赤羽横穴墓群のすぐ東に広がっていた「久慈の入り江」が港として機能していたと考えられ、それを掌握する人物が埋葬されている可能性が指摘されている⁵⁾。十王前横穴

墓群には、3基の装飾横穴墓があり、第11号墓では線刻された連続三角文の壁画がある⁶¹。旧十王町域から、15群110基以上の横穴墓が確認されている⁷。主な遺跡は、八幡平遺跡(96)、稲荷作遺跡(83)、陣の平遺跡(84)、岩本前遺跡、明神越遺跡等がある。岩本前遺跡では、2棟の竪穴建物跡から五領式土器片に交じって、十王台式土器片が出土している⁸¹。後期の明神越遺跡では52棟の竪穴建物跡が重複により3時期に分かれて集落を営んでいたことが確認されている⁹¹。

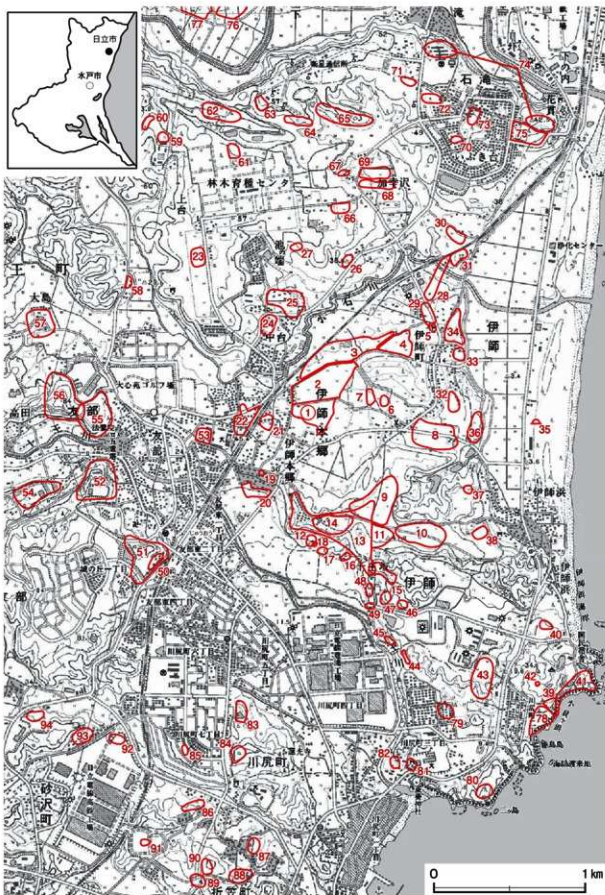
奈良・平安時代の日立市域は、常陸国の久慈郡(箕月郷・助川郷・高市郷)及び多珂郡(道口郷・伴部郷・藻島郷)に属していた。古代の官道である「東海道」は常陸国を通り、陸奥国に向けて延びており、9世紀初頭まで活発に行われた蝦夷討伐の交通路として重要な役割を担っていたと考えられる¹⁰¹。「和名類聚抄」によると、多珂郡に属する郷は、梁津、伴部、高野、多珂、藻島、新居、賀美、道口であり、当遺跡は多珂郡藻島郷に属していたと考えられる¹¹¹。律令制時代の行政組織からいえば、常陸国は東海道に属していた。多珂郡は東海道の最北端に位置していたことになる。しかし、多珂郡と久慈郡の境の助河をもって「道前」とし、陸奥国石城郡若麻村を「道後」とした。この「道」は東海道の「道」ではなく、「道奥」に結びつく「道」と考えられる。東海道は久慈郡の地までで、多珂郡は陸奥の地と考えられていた時期があったと推測される。陸奥国は律令制時代の行政組織では東山道に属するので、常陸国多珂郡も東山道の歴史的性格を残していた可能性がある。このことから、多珂郡は、古代の東北地方との国境の郡として、重要な位置であったと考えられる¹²¹。常陸国府以北の駅家として多珂郡には、助川駅家、藻島駅家、棚島駅家がある。養老3年(719)に、「岩城国に初めて馬家十カ所」¹³¹が設置され、国府以北のこれらの駅家は陸奥国の海道10駅に連絡していた。奈良・平安時代の遺跡は、当遺跡のほか、風早遺跡(54)、折笠赤坂遺跡(85)、上台遺跡(91)、遠下遺跡(92)、八幡平遺跡等がある。風早遺跡では、平安時代の竪穴建物跡1棟だけが確認されており、「離群住居跡」の可能性が指摘されている¹⁴¹。上台遺跡からは「笠寺」、遠下遺跡から「笠」と墨書された土師器環が出土しており、周辺の地名を示すと考えられている。また、折笠赤坂遺跡では、鉄鎌が竪穴建物跡のピット内に突き刺さった状態で出土し、地鎮具の可能性が指摘されている¹⁵¹。当遺跡の北東約1kmの長者山遺跡(5)は、「常陸国風土記」に記載された「藻島駅家」の比定地である。長者山遺跡では、遺跡中央部を南北に貫く官道跡、それに隣接する8～10世紀の掘立柱建物跡群や礎石建物跡群が確認されている¹⁶¹。長者山遺跡から十王台遺跡群につながる古代官道の推定ルートは、当遺跡から東約300mに位置している。このことから、当遺跡は駅家もしくは官道に関連する集落の可能性が考えられる。当遺跡から北西約2.1kmにある上台北遺跡(60)は、多珂郡の最初の郡家である北茨城市大津町の大津廃寺付近から移転後の地と考えられている¹⁷¹。多珂郡の郡衙については諸説あり、高萩市下手綱大高台とする説が古くからある¹⁸¹。平成13年度から始まった長者山遺跡の発掘調査により同地が「藻島駅家」に比定でき、「常陸国風土記」によると「郡衙から南廿里(約16km)に駅家があった」ことから、奈良時代の瓦の出土や金堂の基壇が確認された北茨城市大津町の大津廃寺が多珂郡衙と考えられる。さらに、同地が多珂郡の最北端に位置するのは、653年石城郡を多珂国から分置して陸奥国の所屬とする以前に、旧多珂国からの地域中心であったためと推測できる¹⁹¹。

平安時代末期から戦国時代にかけて常陸国北部に多大な影響を及ぼした家族が佐竹氏である。佐竹郷天神林の馬坂城を本拠に、奥七郡(多珂、久慈西、久慈東、佐都西、佐都東、那珂西、那珂東)の郡司職あるいはそれに相当する職務を担当して佐竹氏は、事実上の領主となった。しかし、佐竹氏は源朝綱の挙兵に呼応しなかったことにより、源朝方から攻略を受け、失地した。その後、当地域は北条得宗の勢力下におかれたと考えられる²⁰¹。室町時代、足利尊氏に忠勤を尽くした第9代佐竹貞義は、室町幕府より常陸守護を任せられた。初代佐竹氏からの重臣であった小野崎氏は、通風の代で、佐都郷から多珂荘の友部城に本拠地を移した。子の通

春は正平3年(1348)、山尾城に居城を移して山城守と称し、以後常陸東北部の守りを固めた²¹⁾。中世以降の主な城跡や遺跡は、八反遺跡(55)、友部城跡(51)、山尾城跡(52)、櫛形城跡(56)等である。八反遺跡では、櫛形城築城の際の土木事業による痕跡が確認されている²²⁾。

註

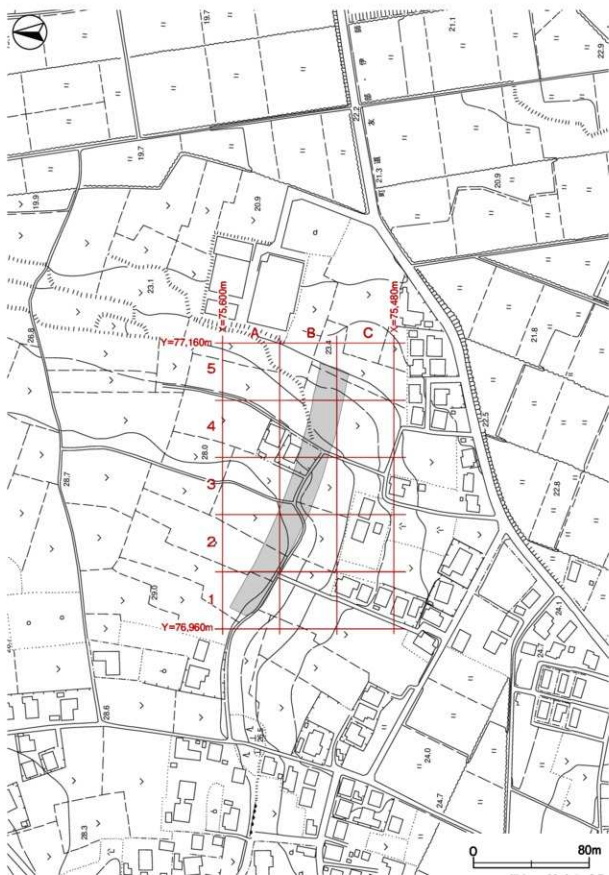
- 1) a 志田諱一 阿久津久 鈴木裕芳『新修 日上市史 上巻』日上市 1994年9月
b 志田諱一 阿久津久 片平雅俊 関周一『国説 十王町史』十王町 2004年9月
c 志田諱一 阿久津久 綿引逸雄 芳賀友博 関周一『十王町史 通史編』日上市 2011年3月
- 2) a 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 高萩・大津』茨城県 1994年3月
b 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 日立』茨城県 1995年3月
- 3) 註1 aと同じ
- 4) 註1 bと同じ
- 5) 註1 aと同じ
- 6) 註1 cと同じ
- 7) 註1 cと同じ
- 8) 福山俊彰「岩本前遺跡発掘調査報告書」『日上市文化財調査報告』第35集 日上市教育委員会 1995年3月
- 9) 湯原勝美 松田政基「山中遺跡・明神越遺跡発掘調査報告書」『日上市文化財調査報告』第40集 日上市教育委員会 1997年3月
- 10) 註1 bと同じ
- 11) 註1 cと同じ
- 12) 註1 aと同じ
- 13) 宇治谷猛『続日本紀』(上) 講談社学術文庫1030 講談社 1992年10月
- 14) 註3 bと同じ
遺跡範囲と考える区域を全面調査して確認できたのが第1号竪穴建物跡1棟である。他に建物跡が存在する可能性が薄いこと、丘陵地に構築されていることから、第1号竪穴建物跡は「離群住居跡」と指摘している。
- 15) 大平達雄「折笠赤坂遺跡発掘調査報告書」『日上市文化財調査報告』第37集 日上市教育委員会 1996年3月
- 16) 猪狩俊哉「長者山遺跡 平成20～24年度発掘調査報告書」『日上市文化財調査報告』第96集 日上市教育委員会 2013年3月
- 17) a 木下良「常陸の古代交通路に関する二、三の問題」『常陸の歴史』第16号 叢書房 1995年11月
b 川井正一「常陸国」『日本古代道路事典』八木書店 2004年5月
c 木下良「事典 日本古代の道と駅」吉川弘文館 2009年3月
- 18) 中山信名『新編常陸国誌』叢書房 1974年
- 19) 註17 a・bと同じ
- 20) 註1 bと同じ
- 21) 荒井英樹「要害城跡 バス停留帯の設置及び歩道の拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」『日上市文化財調査報告』第34集 日上市教育委員会 1994年12月
- 22) 片平雅俊「十王町八反遺跡発掘調査報告書」『茨城県多賀郡十王町文化財調査報告書』第5集 十王町教育委員会 1997年3月



第1図 中道南遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院 25,000分の1「高萩」[日立])

表1 中道南遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	中道南遺跡					○		48	十王台南A横穴墓群					○		
2	中道北遺跡		○			○		49	十王台南B横穴墓群					○		
3	庚塚遺跡					○		50	古館遺跡		○					
4	愛宕脇遺跡					○		51	友部城跡						○	
5	長者山遺跡					○		52	山尾城跡						○	
6	南網内B遺跡					○		53	友部海防陣屋跡							○
7	南網内A遺跡					○		54	風早遺跡	○	○			○	○	○
8	中丸遺跡					○		55	八反遺跡		○		○	○	○	
9	藤ヶ作台遺跡		○	○	○	○		56	柳形城跡						○	
10	西上台遺跡	○		○	○	○		57	大鳥遺跡		○				○	
11	十文字遺跡		○	○		○		58	五反田遺跡		○					
12	十王堂遺跡							59	上台庵寺					○		
13	十王台古墳群			○	○	○	○	60	上台北遺跡				○	○		
14	十王台中遺跡			○	○	○	○	61	愛宕原火葬墓					○		
15	十王台遺跡			○				62	加幸沢西遺跡		○					
16	十王台南C横穴墓群				○			63	加幸沢火葬墓					○		
17	十王台南D横穴墓群				○			64	加幸沢B横穴墓群				○			
18	十王台南E横穴墓群				○			65	加幸沢A横穴墓群				○			
19	西本町遺跡					○		66	愛宕原B遺跡		○					
20	コキヤ遺跡					○		67	愛宕原A遺跡		○	○				
21	向井町下遺跡					○		68	加幸沢C遺跡		○	○		○		
22	向井町遺跡					○	○	69	加幸沢B遺跡		○	○		○		
23	上台遺跡		○			○		70	長久保遺跡		○	○				
24	中台南遺跡		○		○	○		71	加幸沢A遺跡							
25	中台遺跡		○		○	○		72	十郎地A遺跡						○	
26	鼠内A横穴墓群				○			73	十郎地B遺跡					○		
27	鼠内B横穴墓群				○			74	上台古墳群					○		
28	深鳥駅路跡					○		75	深鳥台古墳群					○		
29	長者山古墳群					○		76	甚四郎内遺跡		○					
30	南関平遺跡						○	77	宮の脇遺跡		○					
31	関平遺跡					○		78	牛浦遺跡		○	○	○			
32	町尻遺跡					○	○	79	赤坂遺跡		○					
33	伊師東A遺跡							80	二林遺跡				○			
34	伊師東B遺跡				○			81	館山神社遺跡							○
35	谷地ノ口塚							82	宮の前遺跡					○		
36	志のから遺跡		○		○	○		83	稲荷作遺跡		○	○		○		
37	井戸ノ上遺跡		○					84	陣の平遺跡		○	○		○		
38	森ノ上遺跡		○	○				85	折笠赤坂遺跡					○		
39	赤見台遺跡					○		86	上新旗遺跡					○		
40	舟揚遺跡			○				87	花貫遺跡		○					
41	赤見台古墳群				○			88	富士山遺跡				○	○		
42	牛浦横穴墓				○			89	大近平遺跡		○			○		
43	外記屋敷跡遺跡		○			○	○	90	八幡平遺跡					○		
44	十王前古墳群				○			91	上台遺跡					○		
45	金宝淵横穴墓群				○			92	遠下遺跡		○			○		
46	人水田横穴墓群				○			93	住の平遺跡		○			○		
47	十王台横穴墓群							94	ツキノキ作遺跡		○			○		



第2図 中道南遺跡調査区設定図(日立市都市計画図2,500分の1より作成)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

中道南遺跡は、日立市の北部に位置し、日立市十町伊師本郷字中道南958の一部地に所在し、小石川右岸の標高25mほどの台地上に立地している。調査区域は西から東へ緩やかに傾斜している。調査面積は3,309㎡で、調査前の現況は畑地である。

調査の結果、奈良・平安時代の堅穴建物跡36棟、掘立柱建物跡5棟、溝跡2条、土坑1基、時期不明の溝跡9条、土坑11基を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に40箱出土している。主な出土遺物は、土師器(坏・碗・高台付坏・蓋・高台付皿・鉢・甕・小形甕・甕・手捏)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・短頸壺・壺・甕)、土製品(支脚)、石器(砥石・紡錘車)、鉄製品(刀子・鍬・釘・鎌・火打金)、青銅製品(刀飾金具)である。

第2節 基本層序

調査区のB3c8区にテストピットを設定し、基本土層(第3図)の堆積状況の観察を行った。テストピットの観察結果は、以下のとおりである。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土・表土層である。ロームブロックを少量含み、粘性・締まりは弱く、層厚20cmである。

第2層は、黒褐色を呈する旧耕作土層である。ロームブロックを多量含み、粘性・締まりは弱く、層厚は32～46cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層である。締まりは弱く、層厚は20～42cmである。

第4層は、褐色を呈するハードローム層である。層厚は10～32cmである。

第5層は、褐色を呈するハードローム層である。鹿沼バミスを多量含み、締まりは強く、層厚は12cmである。

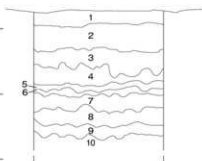
第6層は、褐色を呈するハードローム層である。鹿沼バミスを少量含み、締まりは強く、層厚は6～12cmである。

28.0m A

27.0m

26.0m

25.0m



第3図 基本土層図

A'

第7層は、褐色を呈するハードローム層である。白色粒子や細礫を少量含み、締まりが強く、層厚は16～28cmである。

第8層は、褐色を呈するハードローム層である。白色粒子を中量含み、締まりが強く、層厚は20～30cmである。

第9層は、褐色を呈するハードローム層である。白色粒子を少量含み、粘性・締まりが強く、層厚は12～20cmである。

第10層は、褐色を呈するハードローム層である。細礫を少量含み、粘性・締まりが強く、層厚は下層が未掘のため不明である。

遺構は第3層上面で確認している。

第3節 遺構と遺物

1 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡36棟、掘立柱建物跡5棟、溝跡2条、土坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

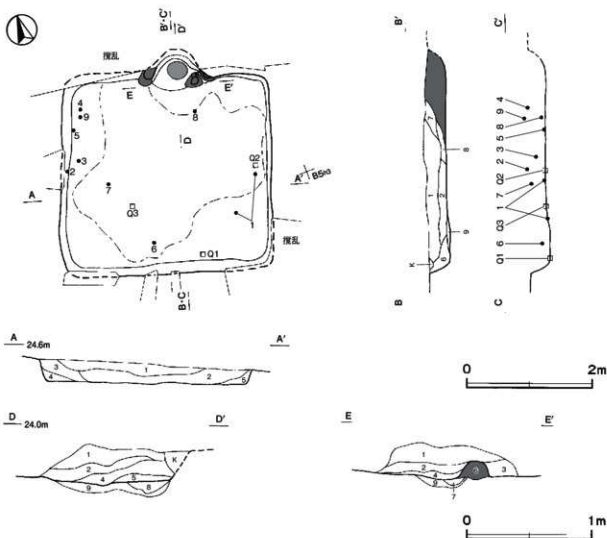
第1号竪穴建物跡 (第4・5図)

位置 調査区東部のB5g2区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

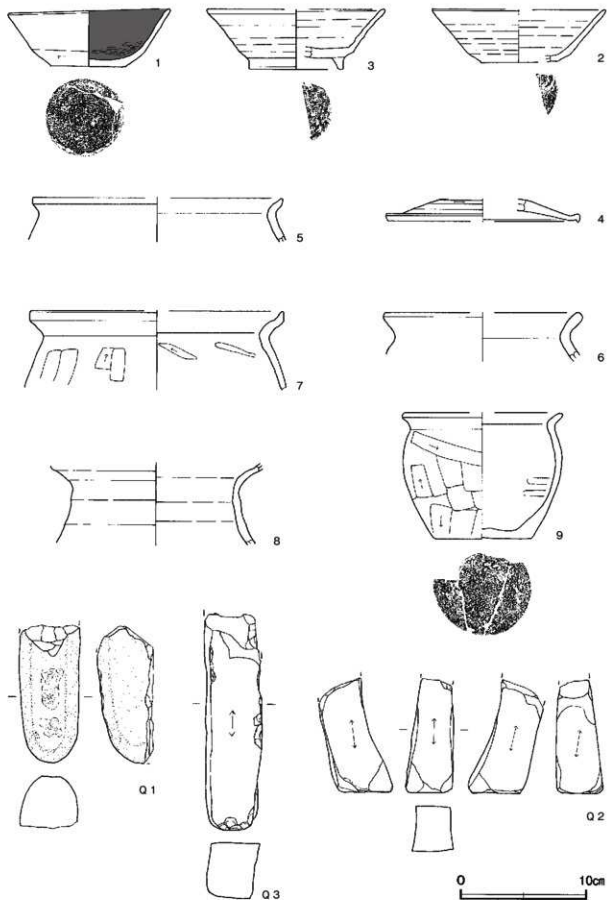
規模と形状 長軸3.40m、短軸3.26mの方形で、主軸方向はN-20°-Eである。壁は高さ24-35cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで60cmで、燃焼部幅は50cmである。袖部は



第4図 第1号竪穴建物跡実測図



第5图 第1号竖穴建物跡出土遺物実測図

床面とほぼ同じ高さの地山の上に、ロームブロックと粘土粒子を含むふい褐色土の第6層を積み上げて構築されている。右袖の内部には、凝灰岩の切石が芯材として使用されている。火床部は床面を深さ13cm掘り込み、ロームブロックを含む第7～9層を埋土して構築されている。火床面は北壁ライン上に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。攪乱を受けているが、燃焼部及び煙道部は、壁外へ28cm掘り込んでいることを確認し、火床部から外傾していると推定できる。

■ 土層解説

1 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量	6 ぶい褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	7 暗褐色	ロームブロック少量
3 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	8 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量
4 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	9 褐色	ロームブロック中量
5 暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量		

■ 覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

■ 土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	7 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 褐色	ロームブロック中量
5 暗褐色	ローム粒子少量		

■ 遺物出土状況 土師器片265点(坏59、甕205、小形甕1)、須恵器片66点(坏32、高台付坏4、蓋2、甕28)、石器2点(砥石)のほか、縄文時代の石器1点(敲石)が、全域の覆土下層から床面にかけて出土している。Q3は中央部、1・Q2は東部、Q1は南部の床面からそれぞれ出土している。1は正位で出土した破片が接合したもので、破砕後に廃棄されたものと考えられる。Q1～Q3は、廃絶時に遺棄されたものである。

■ 所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	128	4.6	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	ぶい赤褐色	普通	体部外面横ナデ、下縁回転へう割り、内面へう割り、底部回転へう割り	床面	70% PL.5
2	須恵器	坏	138	4.2	6.2	長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ	覆土上層	5%
3	須恵器	高台付坏	142	4.8	7.4	長石・石英・黒色粒子・白色粒子	褐色	普通	体部下縁ナデ、底部回転へう割り、後高台貼付	覆土下層	30%
4	須恵器	蓋	152	1.8	-	長石・石英	暗灰黄	普通	天井部回転へう割り	覆土上層	10%
5	土師器	甕	197	3.5	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	床面	5%
6	土師器	甕	152	3.9	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土下層	5%
7	土師器	甕	200	6.1	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ、体部外面上部段位のへう割り、内面横ナデ後へう割り、輪襷	覆土中層	10%
8	須恵器	甕	-	6.6	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	胴部ロクロナデ	覆土下層	5%
9	土師器	小形甕	125	10.0	7.6	長石・石英・雲母・針状物質	ぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ、体部外面へう割り、内面ナデ	覆土上層	60% PL.9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	敲石	109	4.8	4.6	3432	安山岩	1面に縦痕状の敲打痕	床面	PL.12
Q2	砥石	9.1	3.9	5.9	2337	砂岩	断面台形 一部欠損 砥面4面	床面	PL.11
Q3	砥石	17.2	4.6	4.5	5893	粘板岩	欠損 砥面1面	床面	PL.11

第2号竪穴建物跡(第6・7図)

■ 位置 調査区東部のB5g4区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

■ 規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西軸は4.58mで、南北軸は1.98mしか確認できなかった。

平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-18°-Eと推定できる。壁は高さ18~20cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には幅14cm、深さ12~18cmの壁溝が巡っている。

ピット 4か所。P1は深さ60cmで、規模と配置から主柱穴である。P2は深さ26cmで、南壁側の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P3は深さ8cmで、壁柱穴である。P4は深さ77cmで、配置状況から、P4からP1へ柱の立て替えが考えられる。第1~3層は柱抜き取り後の覆土、第4・5層は掘方への埋土である。

ピット土層解説

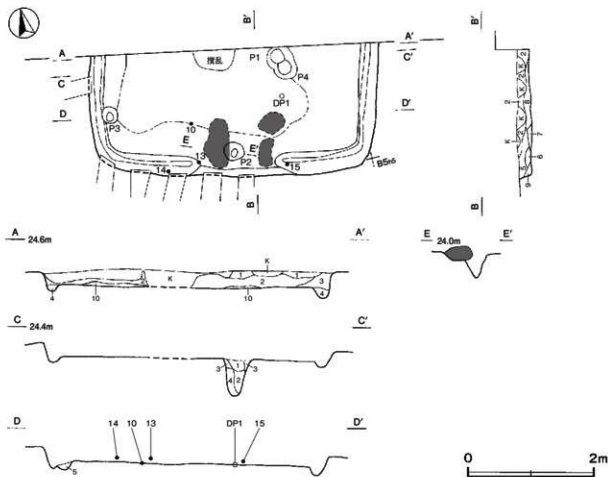
- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック微量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック微量 | |

覆土 10層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|---------------------------|-------------------------------|
| 1 極暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック微量 | 7 極暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック少量 | 8 極暗褐色 ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量 | 9 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック微量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック中量 | 10 褐色 ロームブロック中量 |

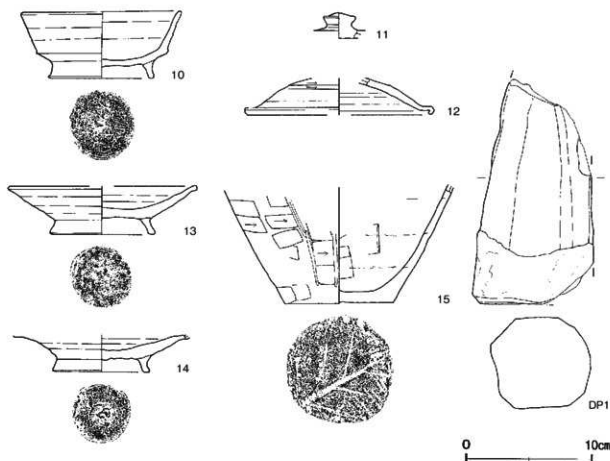
遺物出土状況 土器片200点(坏22、高台付坏1、甕177)、須恵器片39点(坏24、高台付坏2、蓋11、高台付皿1、盤1)、土製品1点(支脚)、鉄製品1点(不明)が、南西側の覆土下層から床面にかけて出土し



第6図 第2号竪穴建物跡実測図

ている。10は床面から正位で出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。13は逆位で、14は横位で、それぞれ南壁際の覆土下層から出土したことから、埋め戻しの際に廃棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第7図 第2号竖穴建物跡出土遺物実測図

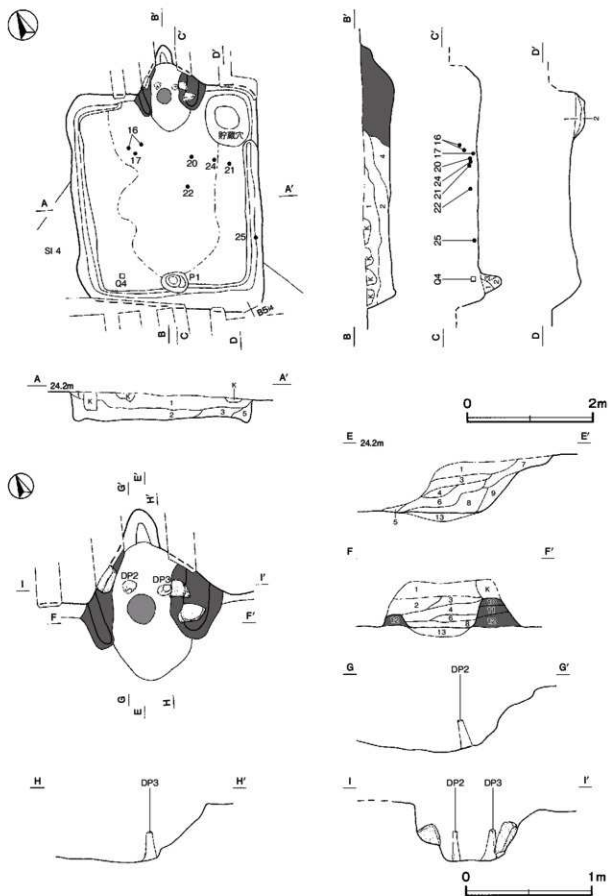
第2号竖穴建物跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	須恵器	高台付皿	126	5.4	8.2	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	底部へら削り後高台貼付	床面	80% PL 8
11	須恵器	蓋	-	(2.0)	-	長石・石英	灰黄褐色	普通	つまみ部ナデ	覆土中	5%
12	須恵器	蓋 [147]	(2.9)	-	-	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	天井部回転へら削り	覆土中	10%
13	須恵器	高台付皿 [148]	3.9	8.1	-	長石・石英	黄灰	普通	底部へら削り後高台貼付	覆土下層	50% PL 8
14	須恵器	盤	-	(2.9)	7.8	長石・石英	灰黄	普通	底部回転へら削り後高台貼付	覆土下層	60%
15	土師器	甕	-	(9.3)	8.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	体部外面横位のへら削り後縦位のへら磨き 内面へらナデ 底面に木炭痕	覆土下層	40%

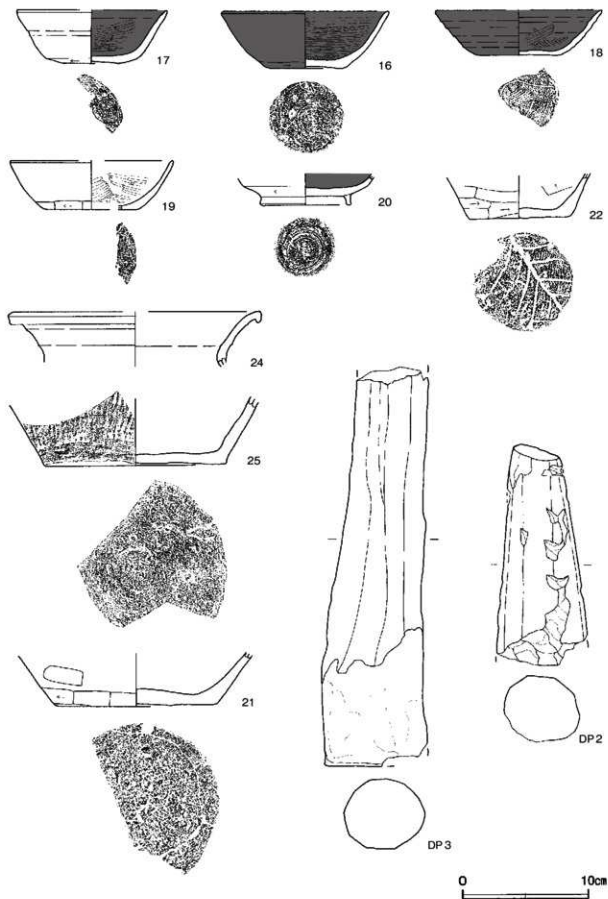
番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	支脚	(17.7)	-	[9.2]	(7.85)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	断面多角形 上・下部欠損 へらナデ	床面	

第3号竖穴建物跡（第8～10図）

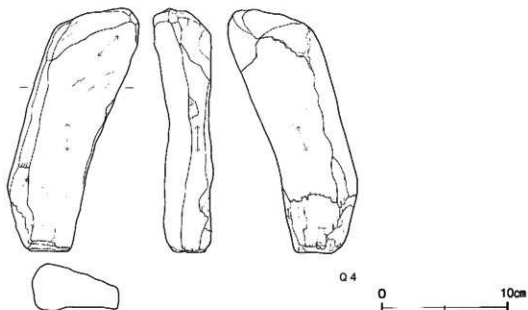
位置 調査区東部のB 5h3区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。



第8图 第3号竖穴建物跡实测图



第9図 第3号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第10図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

重複関係 第4号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸354m, 短軸300mの長方形で, 主軸方向はN-22°-Eである。壁は高さ30~40cmで, 外傾している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。壁下には幅8~10cm, 深さ4~8cmの壁溝がほぼ全周している。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで135cmで, 燃烧部幅は45cmである。袖部は床面と同じ高さの地山の上に, 粘土粒子を含む暗褐色土の第10~12層を積み上げて構築されている。両袖の内部には, 凝灰岩の切片が芯材として使用されている。火床部は床面を深さ12cm掘り込み, 第13層を埋土して構築されている。火床面は北壁ライン上に位置し, 火熱を受けて赤変硬化している。燃烧部及び煙道部は, 壁外へ70cm掘り込み, 奥壁で段を有しながら, 外傾している。火床部の煙道寄りには, 支脚(DP2・DP3)が18cmの間隔で横並びに2か所据え付けられている。

竈土層解説

1 暗褐色 焼土粒子中量, 粘土粒子少量, ロームブロック微量	8 暗褐色 炭化粒子中量, 粘土粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色 粘土粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量	9 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子微量
3 暗褐色 粘土粒子多量, ローム粒子微量	10 暗褐色 粘土粒子中量, 凝灰岩少量, ローム粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量	11 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
5 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土粒子少量, 焼土ブロック微量	12 暗褐色 粘土粒子多量, ロームブロック・焼土ブロック少量
6 暗褐色 凝灰岩多量, ロームブロック少量, 粘土粒子微量	13 赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子微量
7 暗褐色 粘土粒子少量, 焼土ブロック・ローム粒子微量	

ピット P1は深さ30cmで, 南壁際の中央部に位置していることから, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1~3層は柱抜き取り後の覆土である。

ピット土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量	3 暗褐色 ロームブロック中量
2 極暗褐色 ロームブロック少量	

貯蔵穴 東コーナー部に位置し, 長軸80cm, 短軸70cmの隅丸長方形で, 深さは16cmである。底面はやや凹凸で, 壁は緩やかに傾斜している。各層にロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 2 暗褐色 ロームブロック微量

覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量 4 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 343点（坏57、高台付坏1、甕285）、須恵器片58点（坏25、高台付坏2、甕31）、土製品3点（支脚）、石器3点（砥石1、不明2）、鉄製品1点（刀子）が、東部を中心に覆土下層から出土している。17・20～22・24・25は覆土下層から出土していることから、埋め戻しの際に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第3号竪穴建物跡出土遺物観察表（第9・10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
16	土師器	坏	132	4.6	5.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面横ナデ 下縁回転へう割り 内面へう磨き 底部回転糸切り後ナデ	覆土中層	70% PL.5
17	土師器	坏	[120]	4.2	4.4	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部内・内面横ナデ 体部外面横ナデ 下縁手持ちへう割り 内面へう磨き	覆土下層	40%
18	土師器	坏	[130]	3.6	[6.3]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ナデ 内面へう磨き 底部糸切り後ナデ	覆土中	20%
19	土師器	坏	[128]	3.9	[7.3]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ナデ 下縁手持ちへう割り 内面へう磨き 底部へう割り後ナデ	覆土中	10%
20	土師器	高台付	-	(2.5)	6.9	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面下部横位へう割り 底部回転へう割り 後高台転付	覆土下層	30%
21	土師器	甕	-	(4.2)	[12.7]	長石・石英・雲母	赤褐	普通	体部外面下部横位のへう割り 内面磨耗	覆土下層	10%
22	土師器	甕	-	(3.4)	8.0	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部外面下部横位のへう割り 内面へうナデ 底部に木葉痕	覆土下層	10%
24	須恵器	甕	[196]	(4.3)	-	長石・石英	黄灰	普通	頸部ロコロナデ	覆土下層	5%
25	須恵器	甕	-	(5.3)	[14.2]	長石・石英	灰	普通	体部外面下部横位の平行叩き	覆土下層	20%

番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP.2	支脚	(17.4)	3.7	(7.2)	(306)	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	断面多角形 下部欠損 へうナデ	火床面	
DP.3	支脚	(31.7)	(5.7)	(8.3)	(992)	長石・石英・雲母・赤色粘土	橙	断面多角形 欠損 へうナデ	火床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q.4	砥石	19.3	10.4	5.0	701.2	砂岩	砥面3面	覆土下層	PL.12

第4号竪穴建物跡（第11・12図）

位置 調査区東部のB 5h3区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.52m、短軸5.42mの方形で、主軸方向はN-28°-Wである。壁は高さ18cmで、外傾している。

床 平坦である。掘乱を受けており、硬化面は確認できなかった。壁下には幅8～12cm、深さ16cmの壁溝が通っている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。遺存状態が悪く、規模は焚口部から煙道部まで90cm、燃焼部幅は50cmしか確認できなかった。左袖の内部には、凝灰岩の切石が芯材として使用されている。火床部は掘乱を受け

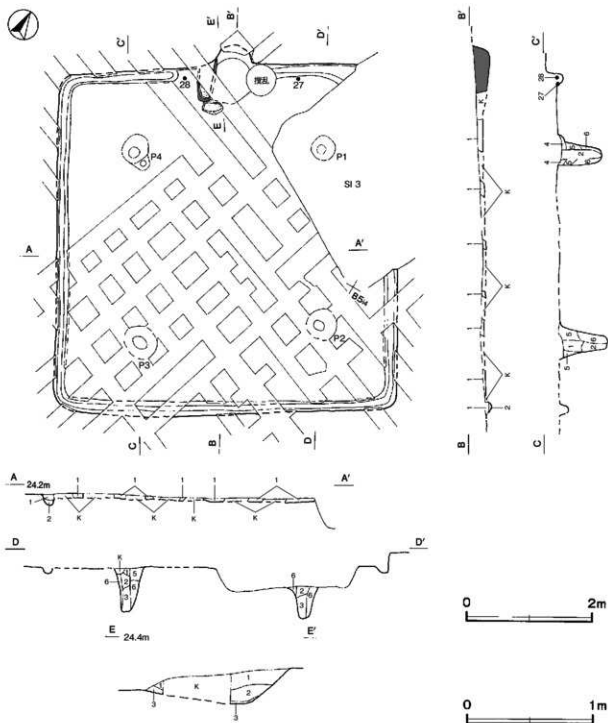
ており、火床面は遺存していない。燃焼部及び煙道部は、壁外へ30cm掘り込み、火床部から外傾していると推定できる。

瓦土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ロームブロック微量

ピット 4か所。P1～P4は深さ68～86cmで、規模と配置から支柱穴である。第1～3層は、柱抜き取り後の覆土、第4～6層は掘方への埋土である。



第11図 第4号堅穴建物跡実測図

ビット土層解説

1 黒暗褐色	ローム粒子微量	4 褐色	ロームブロック少量
2 黒暗褐色	ロームブロック少量	5 褐色	ロームブロック中量
3 黒暗褐色	ロームブロック微量	6 褐色	ロームブロック多量

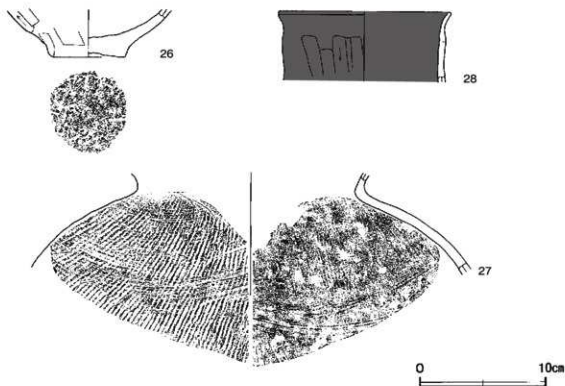
覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	2 褐色	ロームブロック微量
-------	---------------	------	-----------

遺物出土状況 土師器片 85点(坏4, 甕80, 小形甕1), 須恵器片 25点(坏9, 高台付坏1, 蓋1, 甕14)のほか, 陶器片1点(不明)が中央部から竈寄りの覆土下層から床面にかけて出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀代と考えられる。第24号竪穴建物跡と主軸方向が類似しており, 同時期に存在していたと考えられる。



第12図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図

第4号竪穴建物跡出土遺物観察表(第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
26	土師器	甕	-	(3.7)	6.0	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	体部外面下部縦位のへら削り 内面磨耗	P1覆土中	10%
27	須恵器	甕	-	(8.0)	-	長石・石英	黄白	普通	体部外面斜位の平行叩き後横位のカキ目	床面	10% PL11
28	土師器	小形甕 [138]	(3.5)	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のへら削り 内面ナデ	床面	10%

第5号竪穴建物跡(第13・14図)

位置 調査区東部のB4j6区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため, 東西軸は3.97mで, 南北軸は2.35mしか確認できなかった。

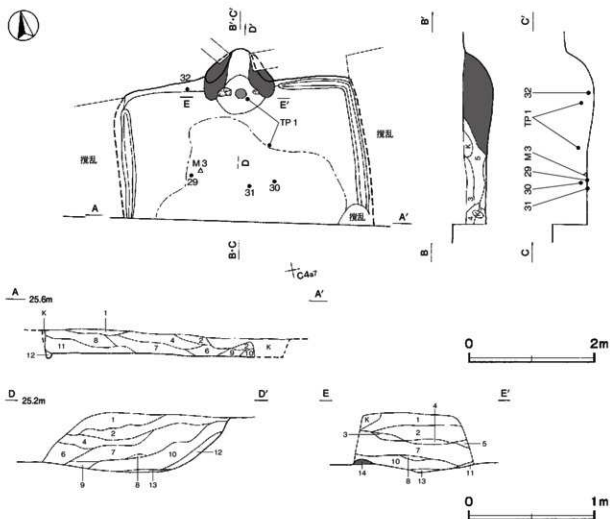
平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN - 11° - Eである。壁は高さ35cmで、外傾していると推定できる。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。北壁の西側を除いた壁下には幅8cm、深さ10cmの壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで104cmで、燃焼部幅は70cmである。軸部は床面とはほぼ同じ高さの地山の上に、粘土粒子を含む灰褐色土の第14層を積み上げて構築されている。両軸の先端には、凝灰岩の切石が使用され、焚口部の補強を意図したものと考えられる。火床部は床面とはほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ40cm掘り込み、火床部から外傾している。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------------|-----------|-----------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子微量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 にいり黄褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量 | 10 黒暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量 | 11 にいり黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 | 12 灰褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック・粘土粒子微量 | 13 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物少量 |
| 7 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・粘土粒子微量 | 14 灰褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子少量 |



第13図 第5号竈穴建物跡実測図

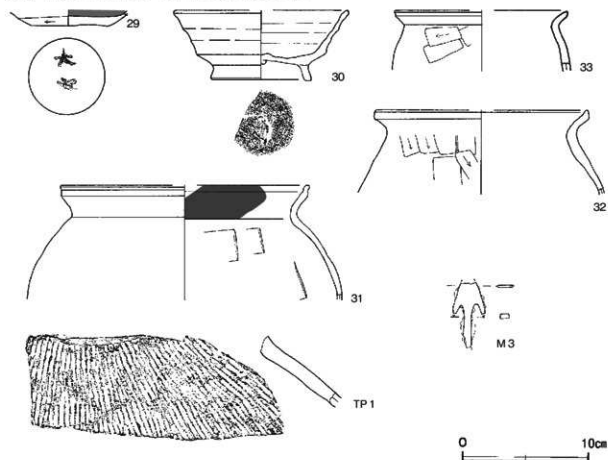
覆土 12層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|---------|------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 5 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 10 暗褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック微量 |
| | | 11 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| | | 12 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 245点 (坏18, 甕227), 須恵器片 39点 (坏18, 高台付坏2, 蓋1, 盤1, 短頸壺1, 甕16), 粘土塊1点 (7.71g), 鉄製品3点 (鐵1, 不明2) が, 全域の覆土中層から床面にかけて出土している。29・31・M3は床面から出土していることから, 廃絶時に遺棄されたものである。TP1は竈覆土中層と覆土中層で出土した破片が接合したもので, 埋め戻す過程で廃棄されたものである。

所見 時期は, 出土器から9世紀中葉に比定できる。



第14図 第5号竈穴建物跡出土遺物実測図

第5号竈穴建物跡出土遺物観察表 (第14図)

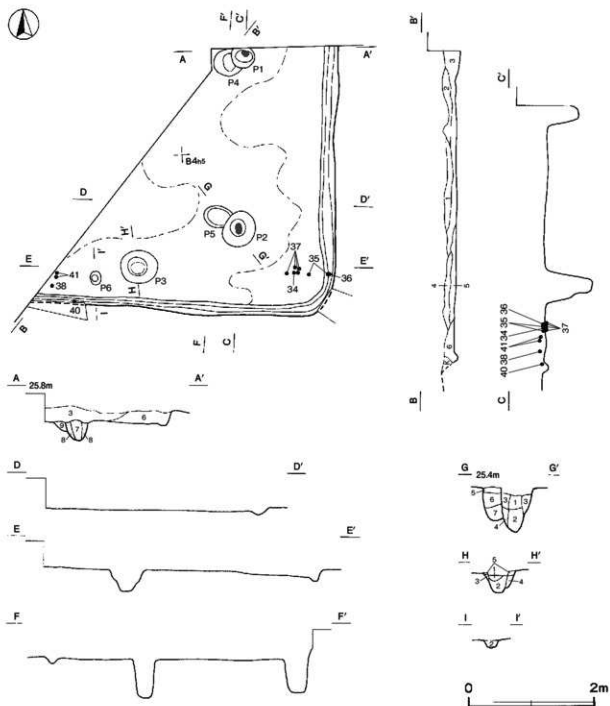
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
29	土師器	坏	-	(1.3)	6.2	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部下縁凹縁へう削り・内面へう削き 底部凹縁へう削り 蓋書(大)	床面	10% PL11
30	須恵器	高台付	[138]	5.5	8.0	長石・石英	灰白	普通	体部下縁凹縁へう削り後ナデ 底部凹縁へう削り 高台堅付	覆土下層	40% 木葉下葉産
31	土師器	甕	[196]	9.1	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横減 内面へうナデ 横付書	床面	5%
32	土師器	甕	[168]	6.6	-	長石・石英・雲母・針状物質	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のへう削り 横付ナデ	覆土下層	5%
33	土師器	甕	[138]	4.8	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のへう削り 内面横ナデ	覆土中	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	須恵器	甕	長石・石美	にぶい黄橙	輪積痕 体部外面縦位の平行印き	甕貫土中層 覆土平層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	甕	(5.2)	2.5	0.2	(8.4)	鉄	甕身部三角形 先端部欠損	床面	

第6号竪穴建物跡 (第15・16図)

位置 調査区東部のB 4h5区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

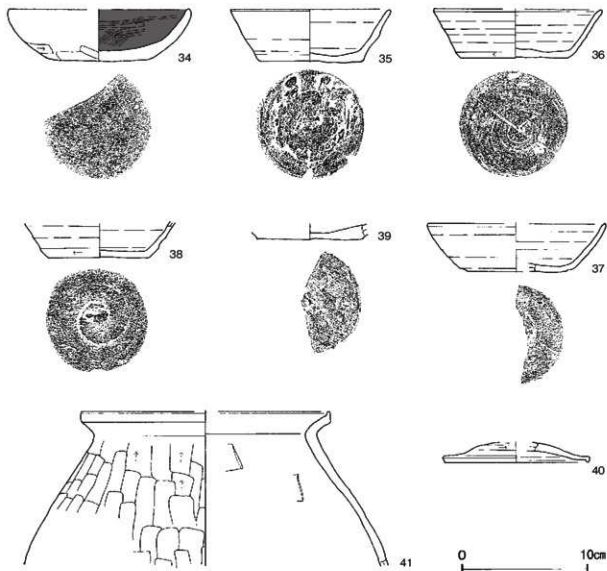


第15図 第6号竪穴建物跡実測図

規模と形状 北西部が調査区域外へ延びているため、東西軸は4.45m、南北軸は4.27mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-8°-Eと推定できる。壁は高さ5~15cmで、外傾している。
床 平坦で、中央部が踏み固められている。確認できた壁下には幅12~16cm、深さ6cmの壁溝が巡っている。
ピット 6か所。P1・P2は深さ52cm・73cmで、規模と配置から主柱穴である。P3は深さ34cmで、南壁際の中央部に位置していると推定できることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P4・P5は深さ52cm・63cmで、土層及び配置状況から、P4からP1へ、P5からP2への柱の立て替えが行われたと考えられる。P6は深さ11cmで、性格は不明である。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3・4層は掘方への埋土、第5層は貼床の構築土、第6・7層はP5からP2へ柱の立て替えの際の埋土と考えられる。P1・P2の底面に、柱の当たりが確認できた。P1~P4の土層から、貼床が構築される前に、柱は立てられている。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量 | 5 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量 | 6 黄褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 灰褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |



第16図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

覆土 6層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第7層はP1の柱抜き取り後の覆土、第8層はP1の掘方への埋土、第9層はP4からP1へ柱の立て替えの際の埋土と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 極暗褐色	ローム粒子中量
3 黒褐色	ロームブロック少量	8 暗褐色	ローム粒子少量
4 黒褐色	ローム粒子少量	9 黄褐色	ロームブロック中量、焼沼バミスブロック微量
5 暗褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片27点(坏13、甕14)、須恵器片15点(坏6、高台付坏1、蓋3、甕5)が南東コーナー部の床面を中心に出土している。35は床面から正位で出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。38・40・41は南壁際の覆土下層から出土していることから、埋め戻す過程で廃棄されたものである。
所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。

第6号竪穴建物跡出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	土師器	坏	[144]	4.1	8.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面上部ナデ 下部横位のヘラ削り 内面ヘラ磨き	床面	50%
35	須恵器	坏	126	4.2	8.6	長石・石英・針状物質	灰	普通	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り	床面	80% PL.7
36	須恵器	坏	[133]	3.9	8.6	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	50%
37	須恵器	坏	[142]	3.8	[7.8]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	30%
38	須恵器	坏	-	(2.8)	8.0	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土下層	30%
39	須恵器	坏	-	(1.3)	[8.4]	長石・石英・雲母	灰	普通	底部ヘラ削り	覆土中	10%
40	須恵器	蓋	11.4	(1.6)	-	長石・石英	灰オリーブ	普通	大舟部回転ヘラ削り	覆土下層	50%
41	土師器	甕	[198]	[12.3]	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	30%

第7号竪穴建物跡(第17・18図)

位置 調査区東部のC5a2区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第8号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸は4.60mで、南北軸は1.44mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-15°-Eと推定できる。壁は高さ8~80cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竪 北壁のやや東寄りに付設されている。掘削を受けており、規模は焚口部から煙道部まで96cmと推定でき、燃焼部幅は56cmである。袖部は床面とほぼ同じ高さの地山の上に、ロームブロックや粘土粒子を含む暗赤褐色土の第12層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用し、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ30cm掘り込み、火床部から外傾している。

覆土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	7 灰赤色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	8 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
3 にぶい褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	9 にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
4 にぶい褐色	粘土粒子中量、焼土粒子微量	10 にぶい褐色	ローム粒子多量
5 暗褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・ローム粒子少量	11 極暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量	12 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子微量

ピット 2か所。P1・P2は深さ54cm・64cmで、規模と配置から主柱穴である。第1層は柱抜き取り後の覆土、第2・3層は掘方への埋土である。

ピット土層解説

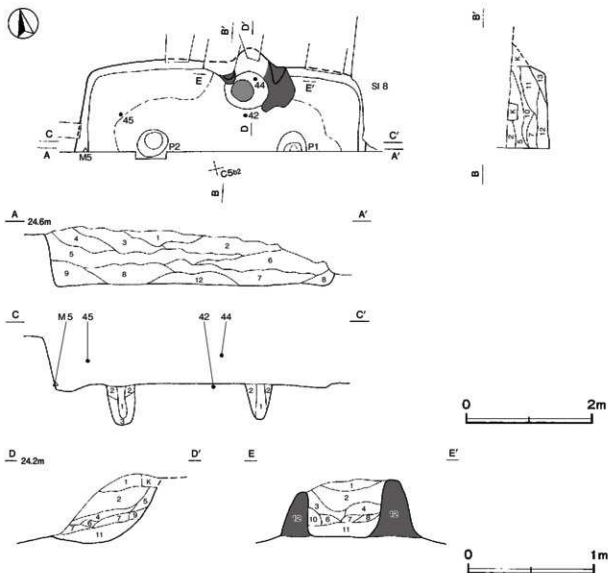
- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量 | |

覆土 13層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|--------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 8 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子微量 | 9 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック微量 | 10 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック中量 |
| 4 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 11 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック多量、粘土粒子中量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック多量 | 12 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子中量、粘土粒子少量 |
| 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 13 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | |

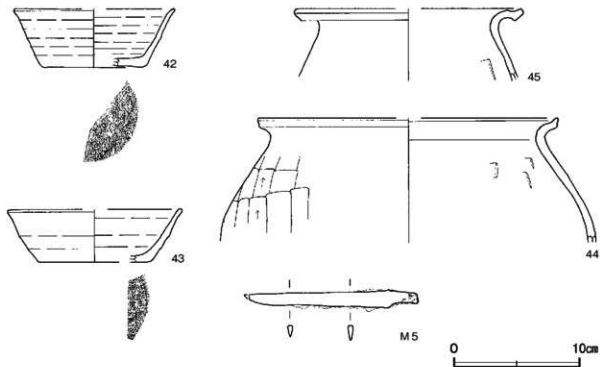
遺物出土状況 土師器片 276点(坏2, 甕274), 須恵器片 37点(坏28, 高台付坏2, 蓋2, 甕5), 粘土塊 16点(58.69g), 石器1点(不明), 鉄製品2点(刀子, 釘)のほか, 縄文土器片4点(深鉢), 陶器片1点(不



第17図 第7号竪穴建物跡実測図

明)が、東コーナー部の覆土中層から床面にかけて出土している。42は床面から出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第18図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
42	炊煮器	坏	[128]	4.7	[78]	長石・石英	灰	普通	底部ナテ	床面	30%	
43	炊煮器	坏	[136]	4.2	[90]	長石・石英	灰オリブ	普通	底部ナテ	覆土中	10%	
44	土師器	甕	[138]	(9.7)	-	長石・石英・雲母	にじみ肌	普通	口縁部外・内面横ナテ 内面ヘラナテ	体部外面縦位のヘラ削	覆土中層	10%
45	土師器	甕	[178]	(5.7)	-	長石・石英・雲母	灰肌	普通	口縁部外・内面横ナテ 内面ヘラナテ	体部外面磨耗 内面ヘ	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	刀子	(13.5)	(1.8)	0.3	(16.34)	鉄	刀身部9.3cm 基部に木部付着	覆土下層	PL12

第8号竪穴建物跡 (第19・20図)

位置 調査区東部のC5a3区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第7・9・15号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

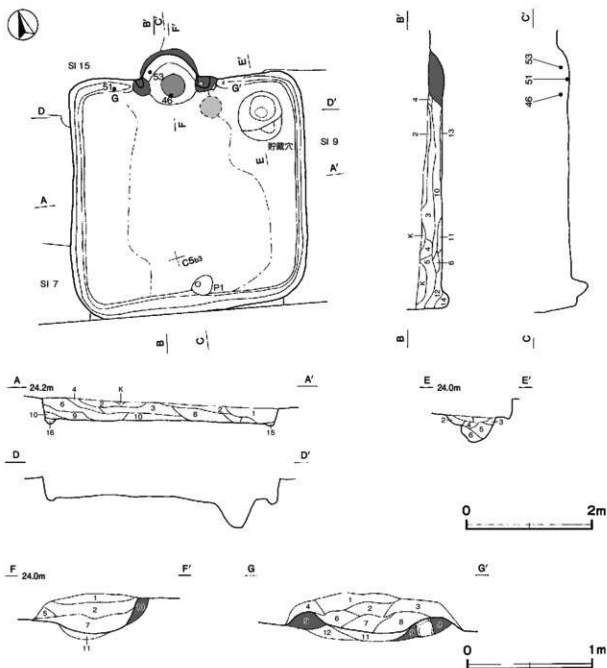
規模と形状 長軸3.85m、短軸3.75mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁は高さ24~38cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には幅6~10cm、深さ6cmの壁溝が全周している。竈右袖部手前の床面で焼土範囲が確認できた。

竈 北壁のはほぼ中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで88cmで、燃焼部幅は70cmである。袖部は、床面から深さ6cmの皿状に掘り込み、第12層を埋土し、粘土粒子を含むオリブ褐色土の第9層を積み上げて構築されている。右袖の内部には、凝灰岩の切石が芯材として使用されている。火床部はロームブロックを含む第11層を埋土して構築されている。火床面は北壁ライン上に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ44cm掘り込み、第10層を充填して構築し、火床部から外傾している。

埋土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 8 暗褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 9 オリーブ褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子少量 |
| 4 黄褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子微量 | 11 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 | 12 オリーブ褐色 | ロームブロック少量 |



第19図 第8号竈穴建物跡実測図

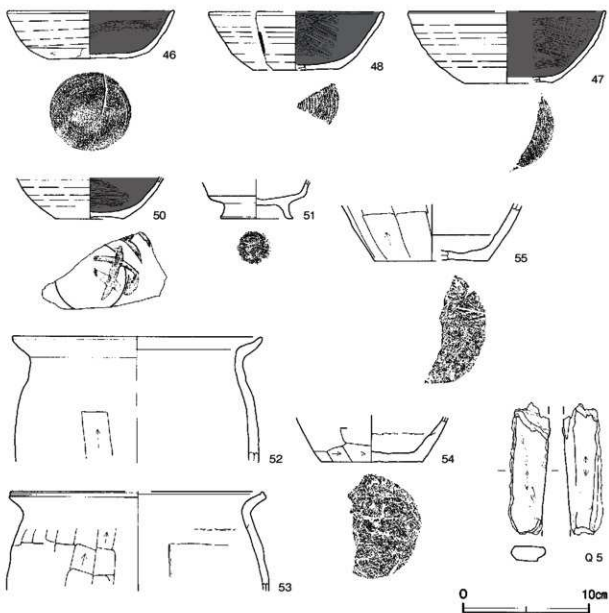
ピット P1は深さ28cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、長径76cm、短径58cmの楕円形で、深さは42cmである。底面は皿状で、壁は外傾している。南部はテラス状の段を有している。各層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |

覆土 16層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況から、埋め戻されている。



第20図 第8号堅穴建物跡出土遺物実測図

土層解説

1	にぶい褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9	にぶい褐色	ロームブロック少量
2	褐色	ローム粒子少量	10	明褐色	ロームブロック中量
3	明褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量	11	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
4	暗褐色	ローム粒子少量	12	にぶい褐色	ローム粒子中量
5	明褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	13	にぶい褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量
6	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量	14	暗褐色	ロームブロック中量
7	暗褐色	ローム粒子少量	15	明褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
8	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量	16	褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 221 点 (坏 54, 甕 167)、須恵器片 37 点 (坏 24, 高台付坏 6, 蓋 1, 盤 2, 甕 4), 粘土塊 9 点 (62.81 g), 石器 2 点 (砥石, 不明), 礫 5 点が, 全域の覆土中層から床面にかけて出土している。46 は覆土下層から出土していることから, 埋め戻す過程で廃棄されたものである。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。

第 8 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 20 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
46	土師器	坏	134	3.9	6.6	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部外面ロクロナデ 下部回転へう割り 内面ナデ 底部回転未切り後へう割り	覆土下層	90% PL.5
47	土師器	坏	[156]	5.8	[7.0]	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面へう割り 底部ナデ	覆土中	20%
48	土師器	坏	[136]	4.7	[6.6]	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部外面ロクロナデ 内面へう割り 底部未切り 墨書「□」	覆土中	20%
50	土師器	坏	-	(3.3)	5.4	長石・石英	にぶい褐色	普通	内面へう割り 墨書「□□」	覆土中	20% PL.5
51	須恵器	高台付坏	-	(3.1)	5.8	長石・石英	灰	普通	底部回転へう割り後高台付	床面	10%
52	土師器	甕	197	(10.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 肩部外面横ナデ 体部外面縦位のへう割り 内面ナデ	覆土中	30%
53	土師器	甕	[200]	(7.8)	-	長石・石英・雲母・針状物質	褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のへう割り 内面ナデ	竈輪部	20%
54	土師器	甕	-	(3.6)	8.1	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面下端へう割り 内面ナデ	覆土中	10%
55	土師器	甕	-	(4.5)	[9.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	体部外面下部縦位のへう割り 内面ナデ	竈覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	砥石	(10.5)	(3.1)	1.1	(55.9)	粘板岩	欠損 縦面 2面	覆土中	PL.11

第 9 号竪穴建物跡 (第 21 ~ 23 図)

位置 調査区東部の C 5 a4 区, 標高 24m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 8・21 号竪穴建物に掘り込まれている

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため, 東西軸は 4.68m で, 南北軸は 3.74m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形で, 主軸方向は N - 12° - E である。壁は高さ 38 ~ 54cm で, 外傾している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。確認できた壁下には幅 8 ~ 12cm, 深さ 4 ~ 8cm の壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 100cm で, 燃焼部幅は 56cm である。竈全体を床面から深さ 20cm の風状に掘り込み, ロームブロックを含む第 7・8 層を埋土して構築されている。袖部の先端には, 柱状の凝灰岩の切石が直立しており, 焚口部の補強を意図したものと考えられる。火床面は北壁ライン上に位置し, 第 7 層上面で, 火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は, 壁外へ 50cm 掘り込み, 火床部から外傾している。竈の構築材と考えられる凝灰岩の切石が, 北壁側の床面で 8 点出土している。

遺土層解説

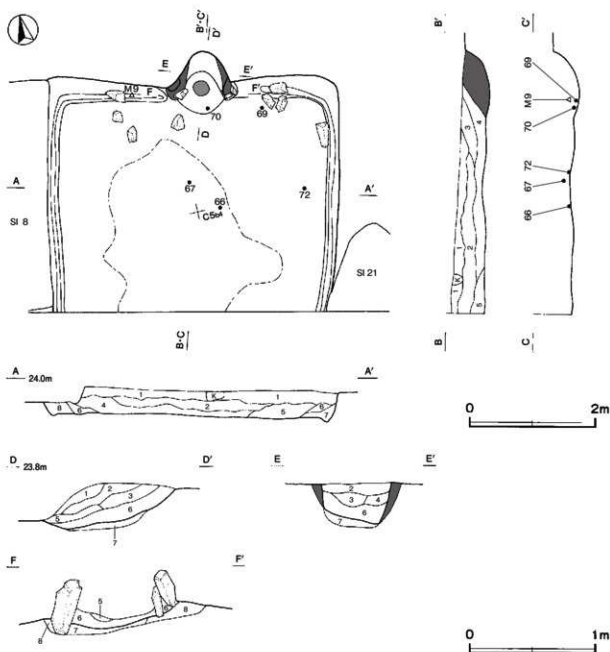
- | | |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量 | 5 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 | 6 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 3 灰褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量 | 7 に近い赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子微量 |
| 4 褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 褐色 ロームブロック少量 |

覆土 8層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

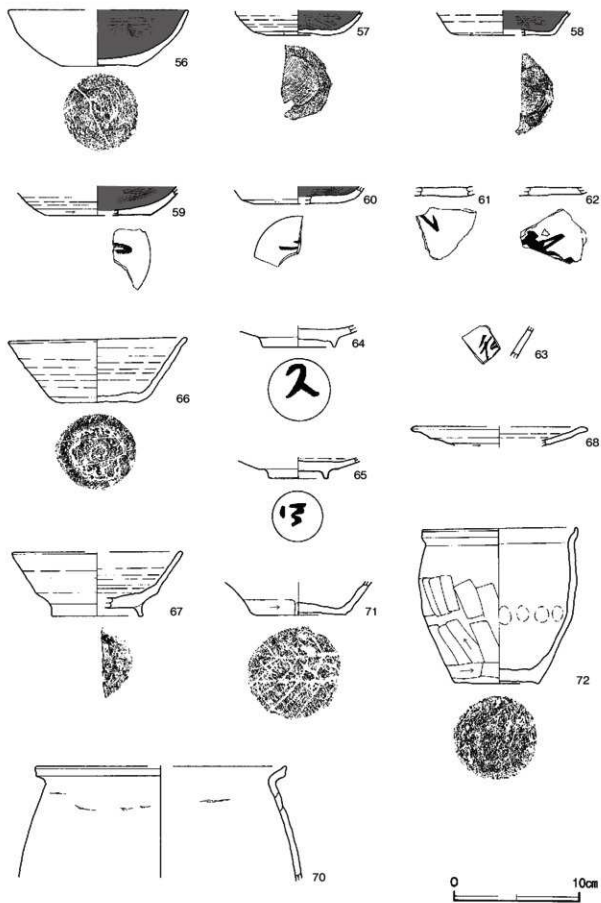
土層解説

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 | 5 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 6 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 7 暗褐色 ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量 | 8 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量 |

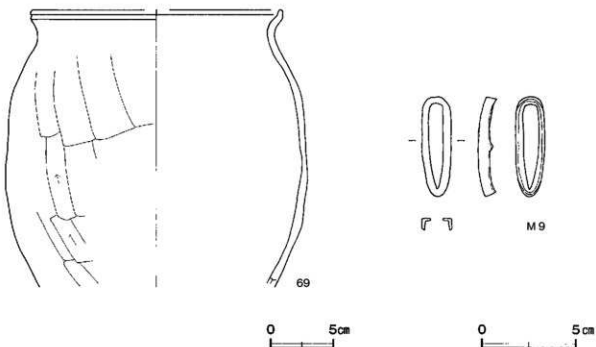
遺物出土状況 土師器片 726点 (坏148, 高台付坏2, 甕574, 小形甕2), 須惠器片 86点 (坏56, 高台付坏



第21図 第9号竪穴建物跡実測図



第22图 第9号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第23図 第9号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

11. 蓋4, 皿1, 壺1, 甕13, 粘土塊1点(94.32g), 鉄製品3点(刀子, 1, 不明2), 青銅製品1点(刀飾金具)が, 全域の覆土中層から床面にかけて出土している。66・72は床面から正位で出土しており, 廃絶時に遺棄されたと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第9号竪穴建物跡出土遺物観察表(第22・23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
56	土師器	坏	[14.1]	4.5	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後ナデ	覆土中	50%
57	土師器	坏	-	(21)	[5.2]	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	体部口タロナデ 体部下端ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部北切り後ヘラ削り	覆土中	20%
58	土師器	坏	-	(20)	[8.2]	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	体部口タロナデ 体部下端ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部ヘラ削り	覆土中	10%
59	土師器	坏	-	(2.3)	[8.4]	長石・石英	明黄緑	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 墨書「□」	覆土中	5%
60	土師器	坏	-	(1.4)	[7.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 墨書「□」	覆土中	10%
61	土師器	坏	-	(4.7)	-	長石・雲母	にぶい黄緑	普通	底部回転ヘラ削り 墨書「□」	覆土中	5%
62	土師器	坏	-	-	(5.1)	長石・石英	にぶい橙	普通	墨書「□」	覆土中	5%
63	土師器	坏	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	墨書「□」	覆土中	5% PL.11
66	灰土器	坏	138	5.2	6.2	長石・石英・針状物質	灰	普通	底部回転ヘラ切り 底部にヘラ記号「□」	床面	90% PL.6 木葉下葉面
64	土師器	高台付坏	-	(1.7)	5.8	長石・石英・雲母	橙	普通	底部一方のヘラ削り後高台貼付 墨書「入。」	覆土中	20%
67	灰土器	高台付坏	[13.4]	5.1	[7.2]	長石・石英・赤色粒子・白色粒子	褐	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	覆土下層	40%
65	土師器	高台付甕	-	(1.6)	4.7	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	口タロナデ 底部一方のヘラ削り後高台貼付 墨書「得。」	覆土中	20%
68	灰土器	甕	[13.4]	(1.5)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中	20%
69	土師器	甕	[19.7]	(22.0)	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部縦位のヘラ削り	床面	20%
70	土師器	甕	[19.8]	(9.0)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面上部横ナデ	火床面	5%
71	土師器	小形甕	-	(2.6)	7.4	長石・石英・雲母	明褐	普通	体部外面下端横位のヘラ削り 底部に木葉痕	覆土中	10%
72	土師器	小形甕	121	12.3	6.6	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 下端横位のヘラ削り 内面ナデ・指頭圧痕	床面	100% PL.9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 9	刀剣金具	5.3	1.6	0.9	5.27	青銅	金付着	覆土下層	PL12

第10号竪穴建物跡（第24・25図）

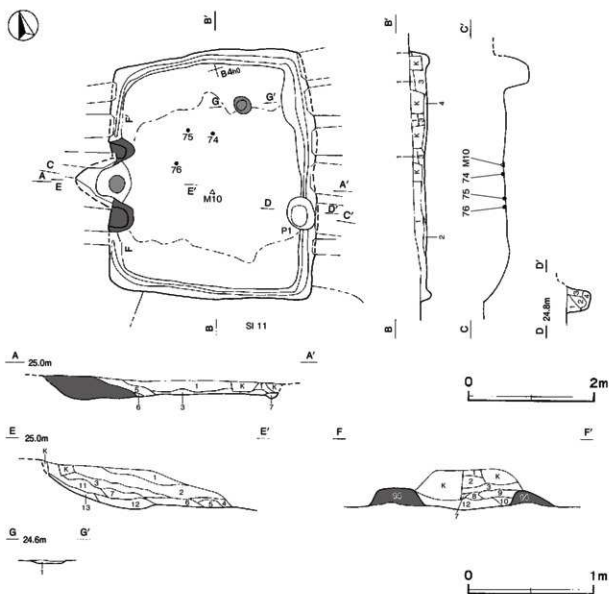
位置 調査区東部のB 4h9区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第11号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.98m、短軸3.25mの長方形で、主軸方向はN-73°-Wである。壁は高さ10~27cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には幅6~10cm、深さ6cmの壁溝が全周している。

竈 西壁のほぼ中央部に付設されている。攪乱を受けており、規模は焚口部から煙道部まで86cm、燃焼部幅



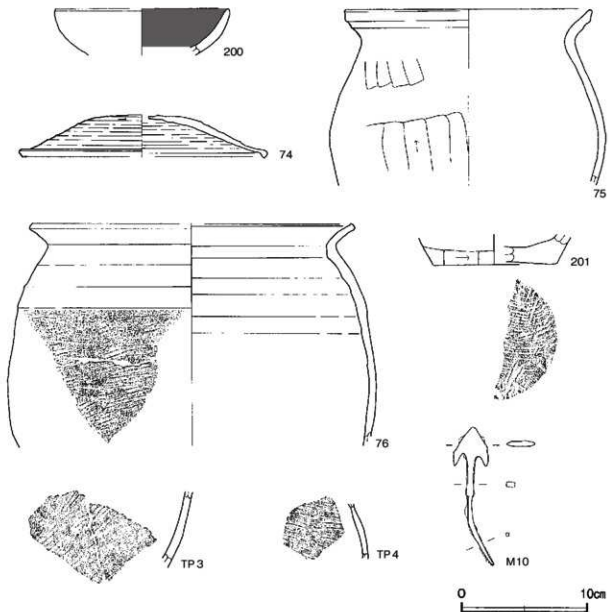
第24図 第10号竪穴建物跡実測図

は60cmと推定できる。袖部は床面と同じ高さの地山の上に、第14層を積み上げて構築されている。火床部は床面とはほぼ同じ高さを使用しており、火床面は西壁ライン上に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ60cm掘り込み、火床部から緩やかに傾斜していると推定できる。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------------|----------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 | 8 オリーブ褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 | 9 明黄褐色 | 粘土粒子多量 |
| 3 灰黄褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子・粘土粒子微量 | 10 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 | 11 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子微量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 12 極暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子微量 |
| 6 オリーブ色 | 粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 7 暗オリーブ色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 14 暗褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック少量 |

炉 北東部に位置している。径26cmの円形で、深さ6cmの地床炉である。皿状に掘りくぼめられ、炉床面は



第25図 第10号竈穴建物跡出土遺物実測図

火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量

ピット P1は深さ40cmで、東壁際のやや南寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1・2層は柱抜き取り後の覆土。第3・4層は掘方への埋土である。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック微量
3 灰褐色 ロームブロック少量
4 褐色 ロームブロック少量

覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック中量
3 暗赤褐色 ロームブロック少量
4 褐色 ロームブロック少量
5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
6 にみい黄褐色 粘土ブロック少量
7 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片236点(坏31, 高台付坏2, 甕203), 須恵器片30点(坏15, 高台付坏1, 蓋7, 盤1, 甕6), 粘土塊8点(53.47g), 鉄製品1点(鏝)のほか, 陶器片1点(不明)が, 全城の覆土中層から床面にかけて出土している。74~76・M10は床面から出土していることから, 廃絶時に遺棄されたものである。

所見 時期は, 出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第10号竪穴建物跡出土遺物観察表(第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
200	土師器	坏	[128]	(3.7)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外・内面ナデ	掘方埋土中	10%	
74	須恵器	蓋	[192]	3.4	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	20%	
75	土師器	甕	19.5	(14.0)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ	体部外面横位のヘラ削り	床面	30%
76	土師器	甕	[25.4]	(17.6)	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	体部外面に平行叩き	床面	20%	
201	土師器	甕	-	(2.2)	[100]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面横位のヘラ削り	底部静止糸切り	覆土中	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP3	土師器	甕	長石・石英・雲母・ 針状物質	橙	斜位の平行叩き	覆土中	
TP4	土師器	甕	長石・石英・雲母・ 針状物質	橙	横位の平行叩き	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M10	鏝	109	28	0.3	10.52	鉄	鎌身部三角形 基部断面方形	床面	PL12

第11号竪穴建物跡(第26図)

位置 調査区東部のB419区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第10号竪穴建物, 第5号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.71m, 短軸3.68mの方形で, 主軸方向はN-43°-Eである。壁は高さ8~25cmで, 外傾している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。南東壁の一部を除いた壁下には幅6~8cm, 深さ4cmの壁溝が巡っている。

ピット 2か所。P1は深さ28cmで, 南西壁側の中央部に位置していることから, 出入り口施設に伴うピット

トと考えられる。P 2は深さ20cmで、性格は不明である。

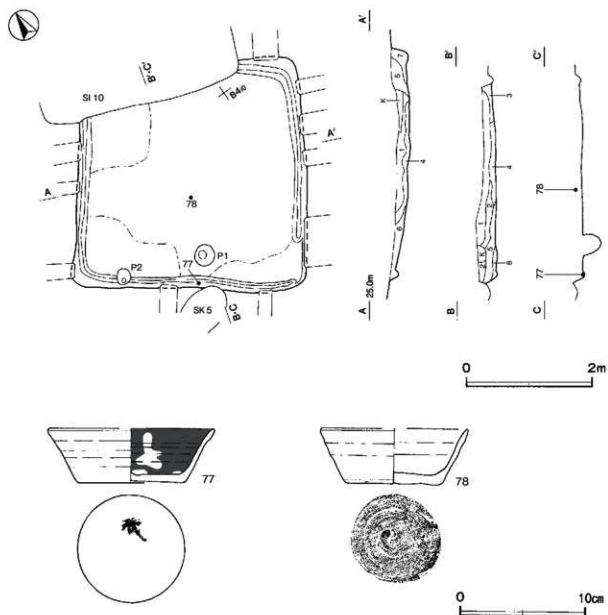
覆土 8層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物中量	5 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
2 褐色	ロームブロック中量	6 褐色	炭化物中量、焼土ブロック・ローム粒子少量
3 褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ロームブロック少量
4 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	8 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片26点(坏3, 甕23)、須恵器片11点(坏9, 高台付坏1, 蓋1)、石器1点(不明)が、全域の覆土中から出土している。77は南西壁際の床面から出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第26図 第11号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第11号竪穴建物跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
77	須恵器	坏	[130]	4.3	8.4	長石・石英	細灰	普通	内面環付着 底部ナゲ 墨書「□」	床面	70% PL 7
78	須恵器	坏	[116]	4.4	7.4	長石・石英・ 柱状物質	灰	普通	底部下縁斜転へう削り 底部斜転へう切り	覆土下層	50% PL 7 木蓋下遺物

第12号竪穴建物跡（第27・28図）

位置 調査区東部のB5j5区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第13号竪穴建物、第2号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.89m、短軸4.85mの方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁は高さ30～50cmで、外傾している。

床 平坦である。硬化面は確認できなかった。東壁から南壁下には幅5～10cm、深さ4～8cmの壁溝が通っている。

竪 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで118cmで、燃焼部幅は60cmである。遺存している右袖部は地山を掘り残して基部とし、粘土ブロックを含む暗褐色土の第11層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面の赤変及び硬化ともに不鮮明である。燃焼部及び煙道部は、壁外へ54cm掘り込み、奥壁で段を有しながら、外傾している。煙道部の右側面は火熱を受けて赤変している。

覆土層解説

1 濃い黄褐色	ロームブロック少量	7 濃い黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量	8 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量	9 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子微量
4 灰黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量	10 褐灰色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック微量
5 灰褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	11 暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子中量
6 明赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量		

ビット 5か所。P1～P4は深さ41～60cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ16cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うビットと考えられる。第1～7層は柱抜き取り後の覆土。第8～12層は掘方への埋土である。

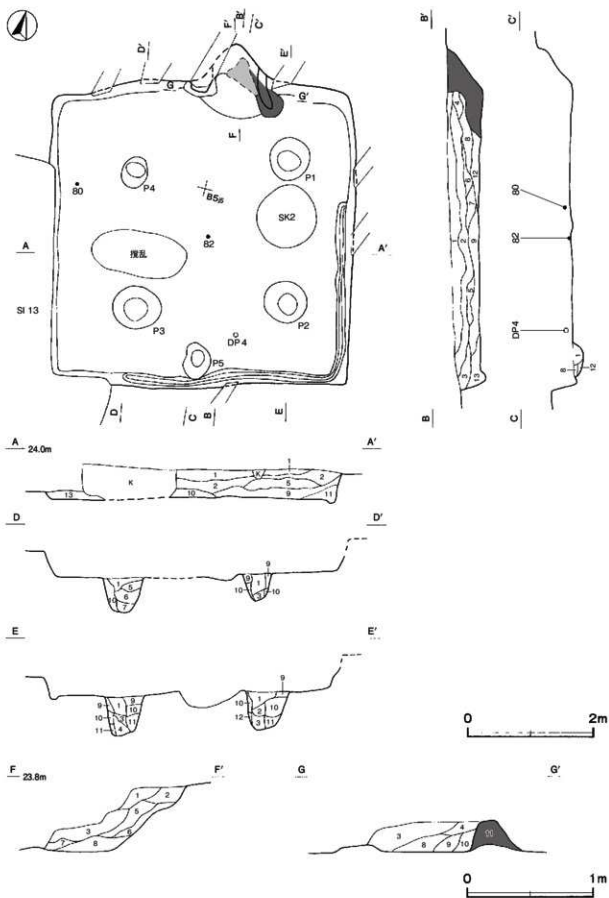
ビット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	7 暗褐色	ローム粒子中量
2 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック多量	9 黄褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック少量	10 黄褐色	ロームブロック多量
5 褐色	ロームブロック中量	11 黄褐色	ローム粒子多量
6 暗褐色	ロームブロック中量	12 黒褐色	ロームブロック微量

覆土 13層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

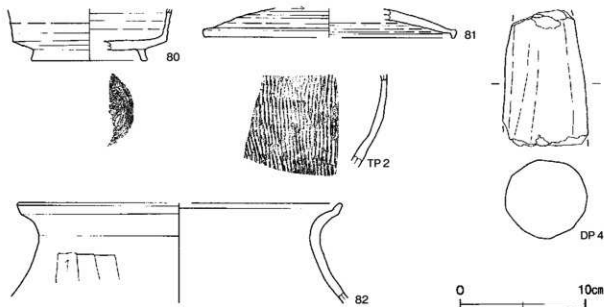
1 暗褐色	ロームブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量	9 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
3 極暗褐色	ロームブロック少量	10 暗褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量	11 褐色	ロームブロック中量
5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	12 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
6 暗褐色	ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック中量
7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量		



第 27 图 第 12 号竖穴建物跡実測图

遺物出土状況 土師器片 148 点 (坏 16, 甕 132), 須恵器片 26 点 (坏 8, 高台付坏 2, 蓋 4, 甕 12), 土製品 2 点 (支脚, 不明), 粘土塊 7 点 (31.66g), 石器 2 点 (不明), 鉄製品 2 点 (不明) が, 全域の覆土中から出土している。82 は中央部の床面から出土していることから, 廃絶時に遺棄されたものである。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 28 図 第 12 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 12 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 28 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
80	須恵器	高台付坏	-	(4.1)	(9.1)	長石・石美	灰白	普通	底部回転ヘラ削り後高台付	覆土下層	30%
81	須恵器	蓋	[196]	(2.3)	-	長石・石美	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	5%
82	土師器	甕	[256]	(7.8)	-	長石・石美・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面種子ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 内面ナデ	床面	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 2	須恵器	甕	長石・石美	黄灰	縦位の平行引き	覆土中	

番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 4	支脚	(108)	(4.8)	(6.7)	(267)	長石・雲母	にぶい橙	断面多角形 上・下部欠損 ヘラナデ	覆土下層	

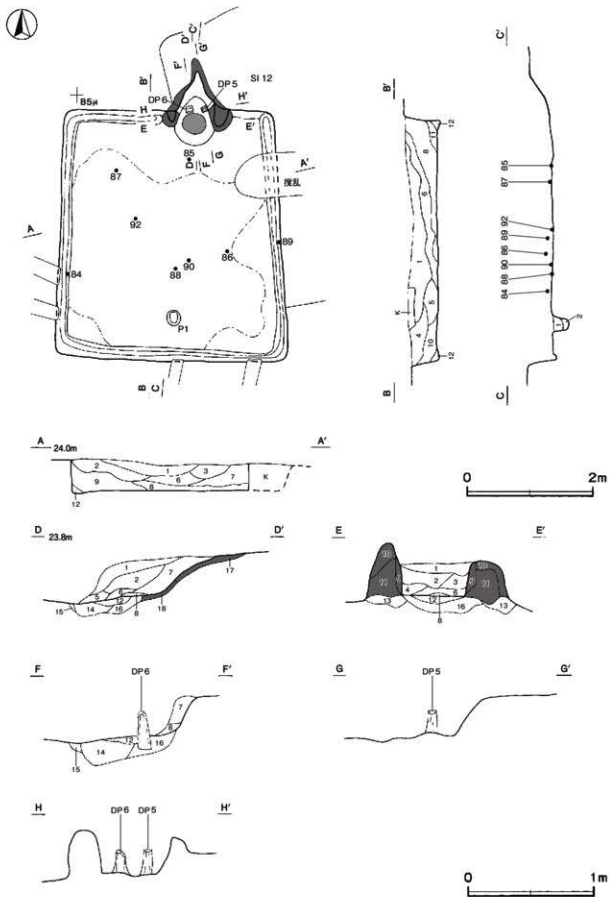
第 13 号竪穴建物跡 (第 29・30 図)

位置 調査区東部の B 5j4 区, 標高 24m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 12 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.97m, 短軸 3.70m の方形で, 主軸方向は N - 6° - E である。壁は高さ 35 ~ 53cm で, ほは直立している。

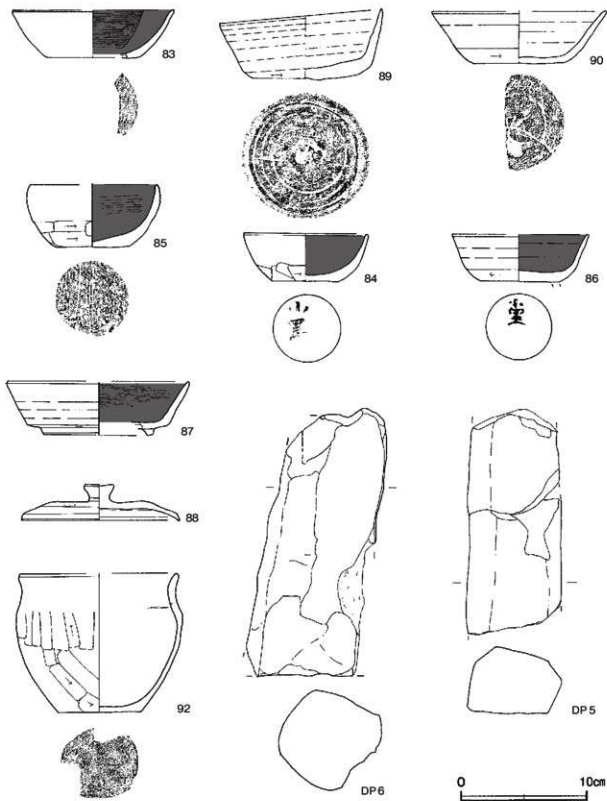
床 平坦で, 中央部から西壁際及び南壁際までが踏み固められている。壁下には幅 4 ~ 12cm, 深さ 3 ~ 4cm



第 29 图 第 13 号竖穴建物迹实测图

の壁溝がほぼ全周している。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで118cmで、燃焼部幅は52cmである。竈全体を床面から深さ18cmの凹凸状に掘り込み、第12～16層を埋土して構築されている。袖部は第9～11層



第30図 第13号竪穴建物跡出土遺物実測図

を積み上げて構築されている。火床面は第12層上面であり、火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ60cm掘り込み、第17・18層を充填して構築し、火床部から外傾している。火床部の煙道寄りには、支脚（DP5・DP6）が12cmの間隔で横並びに2か所据え付けられている。

電土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	10 浅黄褐色	黒色土ブロック少量、焼土ブロック微量
2 暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量	11 黄褐色	焼土粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック微量	12 明赤褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	焼土ブロック多量、粘土ブロック・ローム粒子微量	13 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	14 黒色	ロームブロック中量
6 暗褐色	焼土粒子中量、粘土ブロック少量、ローム粒子微量	15 黄褐色	ロームブロック中量
7 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量	16 黒色	ロームブロック微量
8 暗褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック・粘土ブロック微量	17 暗褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土粒子中量
9 明赤褐色	焼土ブロック少量	18 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量

ピット P1 は深さ24cmで、南壁側の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1・2層は柱抜き取り後の覆土である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量	2 暗褐色	ロームブロック少量
-------	-----------	-------	-----------

覆土 12層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック多量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	7 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物・粘土粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック多量	9 褐色	ロームブロック多量
5 暗褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック中量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック少量
		11 暗褐色	粘土粒子多量、ロームブロック中量
		12 暗褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片241点（坏30、碗2、高台付坏2、蓋1、甕205、小形甕1）、須恵器片49点（坏28、高台付坏2、蓋8、高甕2、甕9）、土製品2点（支脚）、粘土塊14点（68.67g）、石器2点（不明）、鉄製品3点（不明）のほか、陶器片4点（不明）が、北西部の覆土中層から床面にかけて出土している。85・87・88・90・92はそれぞれ床面から出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。「小里」と墨書された84・86は、それぞれ西壁際と東部の覆土下層から、横位・逆位で出土したことから、埋め戻す過程で廃棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第13号堅穴建物跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
83	土師器	坏	[128]	3.8	[7.4]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ナデ 内面ヘラ磨き 底部ナデ	甕覆土中	30%
89	須恵器	坏	128	5.6	10.2	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下層	80% PL 6 土器下層葉
90	須恵器	坏	[138]	4.2	7.5	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後一方向へのヘラ削り	床面	30% 新在産
84	土師器	碗	9.8	3.8	5.4	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面上部横ナデ 下端ヘラ削り 内面ナデ 底部ヘラ削り 墨書「小里」	覆土下層	100% PL 6
85	土師器	碗	[100]	5.0	5.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面上部横ナデ 下端ヘラ削り 内面ナデヘラ磨き 底部ヘラ削り	床面	80% PL 5
86	土師器	高台付坏	[108]	3.8	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外・内面横ナデ 下端回転ヘラ削り 高台穴部 墨書「小里」	覆土下層	60% PL 6
87	土師器	高台付坏	[144]	4.3	8.4	長石・石英	橙	普通	体部外面回転ナデ 下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き	床面	20%
88	土師器	蓋	12.6	2.8	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	90% PL 8
92	土師器	小形甕	[124]	11.0	[6.4]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 内面ナデ	床面	50% PL 9

番号	形 種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
DP 5	支脚	(17.8)	(6.7)	(7.5)	(4942)	長石・石英・雲母	にぶい橙	断面多角形・上・下部欠損 ヘラナデ	火床面	
DP 6	支脚	(21.2)	(5.3)	(9.0)	(10296)	長石・石英・雲母	にぶい橙	欠損 ヘラナデ	火床面	

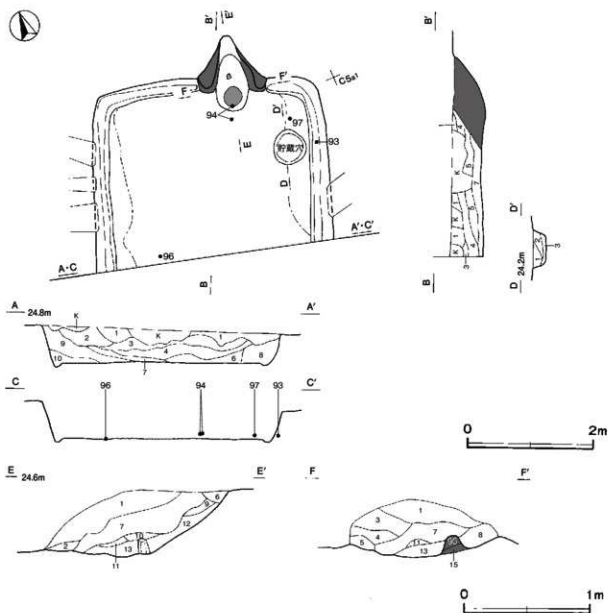
第 14 号竪穴建物跡 (第 31・32 図)

位置 調査区東部の C 4 a0 区、標高 24m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸は 3.78m で、南北軸は 2.90m しか確認できなかった。方形または長方形で、主軸方向は N - 20° - E である。壁は高さ 48 ~ 55cm で、外傾している。

床 平坦で、ほぼ全域が踏み固められている。確認できた壁下には幅 8 ~ 18cm、深さ 4 cm の壁溝が巡っている。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 117cm で、燃烧部幅は 48cm である。袖



第 31 図 第 14 号竪穴建物跡実測図

部は床面とはほぼ同じ高さの地山の上に、粘土粒子を含む第14・15層を積み上げて構築されている。火床部は床面とはほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ70cm掘り込み、火床部から緩やかに傾斜している。火床部の煙道寄りには、柱状の凝灰岩の支脚が据え付けられている。

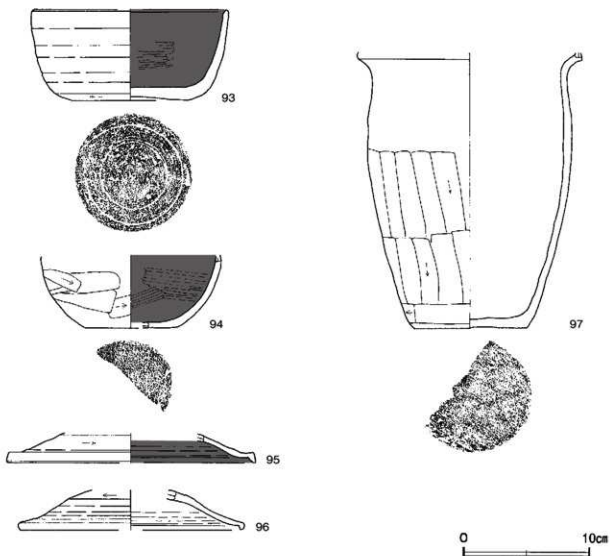
竈土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------------|-----------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量 | 8 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック・粘土粒子微量 |
| 2 明黄褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 9 にんい黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 | 10 褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子微量 | 11 暗褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子微量 |
| 5 にんい黄褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量 | 13 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量 |
| 7 灰黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 14 黄褐色 | 粘土粒子多量 |
| | | 15 オリーブ褐色 | 粘土粒子中量 |

貯蔵穴 東コーナー部に位置し、長径56cm、短径52cmの円形で、深さは22cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|--------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 3 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック少量 | | |



第32図 第14号竪穴建物跡出土遺物実測図

覆土 10層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック中量	7 極暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック多量	8 暗褐色	ロームブロック微量
4 極暗褐色	ロームブロック中量	9 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	10 暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 111点（坏21、蓋2、甕88）、須恵器片 37（坏15、高台付坏3、蓋2、甕17）、粘土塊2点（7.35g）、石器2点（不明）、鉄製品1点（不明）、礫1点（凝灰岩）のほか、石器1点（磨石）が、全城の覆土中層から下層にかけて出土している。93は床面から正位で出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第14号竪穴建物跡出土遺物観察表（第32図）

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
93	土師器	坏	[155]	7.2	9.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底面回転ヘラ削り	床面	40% PL 5
94	土師器	坏	-	(58)	[7.1]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底面ヘラ削り	覆土下層	30%
95	土師器	蓋	[196]	(22)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロ成形 天井部回転ヘラ削り	覆土中	10%
96	須恵器	蓋	[177]	(32)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	10%
97	土師器	甕	-	21.9	9.0	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上部横ナデ 下半部ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	50%

第15号竪穴建物跡（第33・34図）

位置 調査区東部のB5J2区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第8号竪穴建物、第6号土坑、第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.07m、短軸4.20mの長方形で、主軸方向はN-20°-Eである。壁は高さ30cmで、ほぼ直立している。

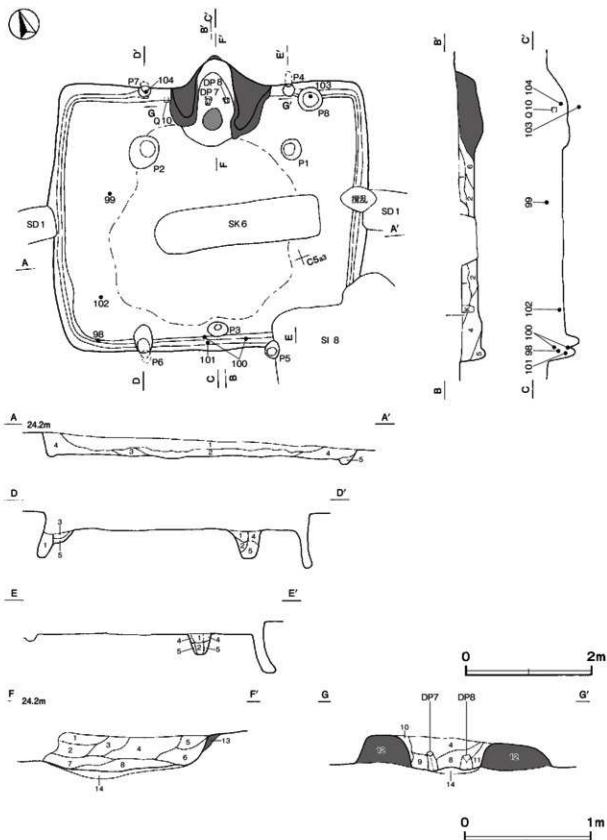
床 平坦で、中央部が踏み固められている。確認できた壁下には幅6～8cm、深さ6～10cmの壁溝が巡っている。

竪 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで138cmで、燃焼部幅は52cmである。袖部は床面とほぼ同じ高さの地山の上に、粘土粒子を含む暗褐色土の第12層を積み上げて構築されている。火床部は床面を8cm掘り込み、ロームブロックを含む暗オリーブ色土の第14層を埋土して構築されている。火床面は第14層上面であり、火熱を受けて赤硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ42cm掘り込み、粘土粒子を含む褐色土の第13層を充填して構築し、火床部から外傾している。火床部の煙道寄りには、支脚（DP7・DP8）が19cmの間隔で横並びに2か所据え付けられている。

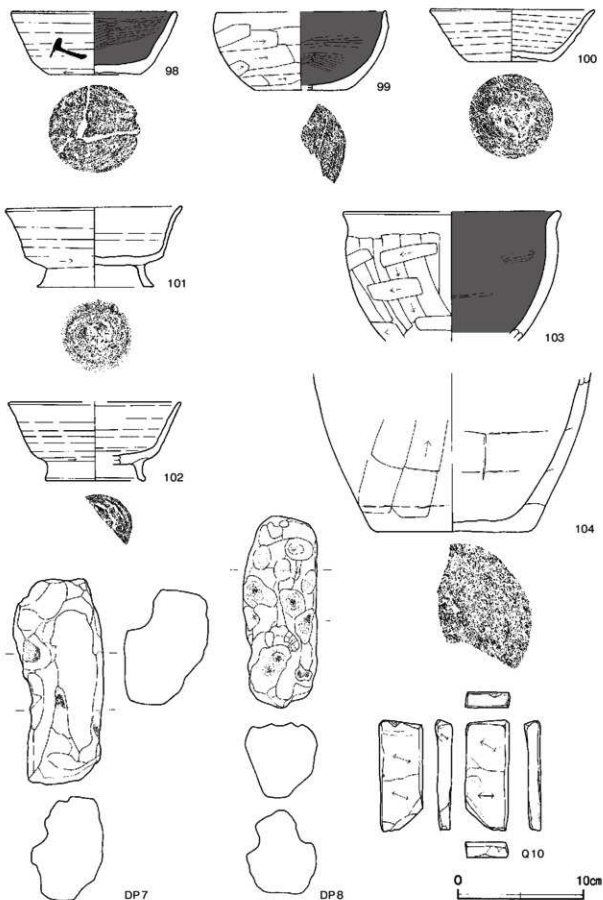
土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土粒子微量	8 極暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量
2 暗オリーブ	粘土ブロック中量	9 暗褐色	焼土ブロック中量
3 暗褐色	粘土ブロック少量	10 明赤褐色	焼土粒子多量
4 暗褐色	粘土ブロック中量	11 暗褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子微量
5 暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ロームブロック微量	12 暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック少量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	13 褐色	粘土粒子中量
7 極暗褐色	粘土ブロック少量、焼土粒子微量	14 暗オリーブ	ロームブロック中量

ビット 8か所。P1・P2は深さ36cm・42cmで、規模と配置から支柱穴である。P3は深さ24cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うビットと考えられる。P4～P7は深さ5～62cmで、



第33図 第15号堅穴建物跡実測図



第34图 第15号竖穴建物跡出土物実測图

P4・P5はP1と、P6・P7とP2と直線状に並ぶ配置から、これらも主柱穴と考えられる。P8は深さ50cmで、性格は不明である。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3～5層は掘方への埋土である。

ビット土層解説

1 極暗褐色	ロームブロック少量	4 褐色	ロームブロック少量
2 極暗褐色	ロームブロック中量	5 褐色	ロームブロック中量
3 極暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

覆土 6層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	4 極暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	5 極暗褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・ローム粒子微量
3 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 333 点 (坏 14, 高台付坏 2, 蓋 1, 鉢 4, 甕 312), 須恵器片 53 点 (坏 31, 高台付坏 7, 蓋 5, 甕 5, 土製品 2 点 (支脚), 粘土塊 1 点 (13.79g), 石器 1 点 (砥石) のほか、縄文土器片 2 点 (深鉢) が、全域の覆土中層から床面に掛けて出土している。100 は床面から正位で出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。101・102 は覆土下層から出土していることから、埋め戻す過程で廃棄されたものである。所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。

第 15 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 34 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
98	土師器	坏	132	5.0	7.2	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい濃褐色	普通	体部外面クワロナデ 下部回転ヘラ削り 内面ヘラ削り 底部回転ネジ取り 底ナデ 墨書「入」	覆土中層	80% PL 6
99	土師器	坏	[132]	6.2	[7.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 内面ヘラ削り 底部ヘラ削り	覆土上層	30%
100	須恵器	坏	129	4.2	6.6	長石・石英	灰	普通	底部ナデ	床面	100% PL 7
101	土師器	高台付坏	14.0	6.4	9.2	長石・石英・針状物質	灰	普通	体部下部回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 後高台付底ナデ	覆土下層	90% PL 8
102	須恵器	高台付坏	[134]	6.2	[7.8]	長石・石英	灰	普通	体部下部回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 後高台付底ナデ	覆土下層	20%
103	土師器	鉢	[170]	[10.2]	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 後高台付のヘラ削り 内面ヘラ削り	P 8 覆土下層	20%
104	土師器	甕	-	(12.6)	[12.8]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面下部縦位のヘラ削り 内面ヘラナデ 輪縁直	覆土下層	20%

番号	器種	高さ	最小径(幅)	最大径(厚さ)	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 7	支脚	16.2	7.2	9.0	(550.6)	長石・石英・雲母	明赤褐色	欠損 ヘラナデ 縦熱痕	火床面	
DP 8	支脚	15.3	5.8	6.6	(300.1)	長石・石英・雲母	にぶい褐色	欠損 密閉圧痕	火床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 10	砥石	8.8	3.5	1.3	69.26	角閃石片岩	紙面 3 面	覆土中層	PL11

第 16 号竪穴建物跡 (第 35・36 図)

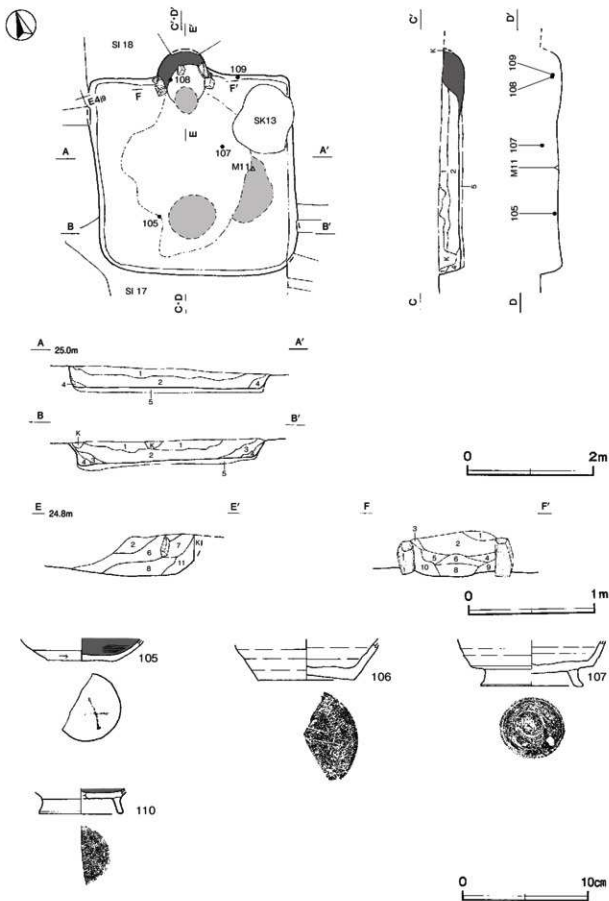
位置 調査区東部の B 4j9 区、標高 25m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 17・18 号竪穴建物跡を掘り込み、第 13 号土坑に掘り込まれている。

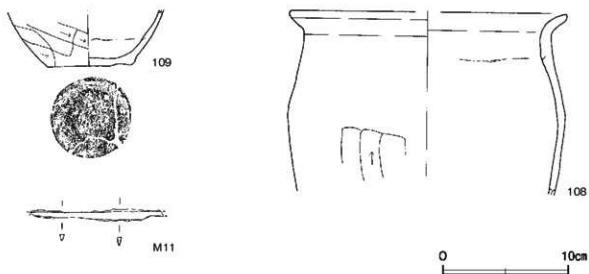
規模と形状 長軸 3.22m、短軸 3.20m の方形で、主軸方向は N - 16° - E である。壁は高さ 20 ~ 36cm で、外傾している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第 17・18 号竪穴建物跡の床面に、第 5 層を埋土して構築されている。竈燃焼部手前、中央部の南側・南東側の床面で焼土範囲が確認できた。

竈 北壁の中央部に付設されている。煙道部の一部が攪乱を受けていることから、規模は焚口部から煙道部



第35图 第16号竖穴建物跡・出土物実測図



第36図 第16号竪穴建物跡出土遺物実測図

まで90cmと推定でき、燃焼部幅は60cmである。両袖の内部には、凝灰岩の切石が芯材として使用されている。火床部は床面とはほぼ同じ高さを使用しており、火床面の赤変及び硬化ともに不鮮明である。燃焼部及び煙道部は、壁外へ40cm掘り込み、火床部から外傾していると推定できる。

覆土層解説

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物・凝灰岩・ローム粒子微量 | 7 濃い褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 8 灰褐色 焼土ブロック少量、炭化物・粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・凝灰岩・ローム粒子微量 | 9 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子微量 | 10 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量 | 11 極暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子・炭化物微量 |
| 6 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量 | |

覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第5層は、貼床の構築土である。

土層解説

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 極暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量 | |

遺物出土状況 土師器片599点(坏70, 高台付坏2, 鉢1, 甕525, 小形甕。1), 須恵器片70点(坏44, 高台付坏3, 蓋3, 甕20), 粘土塊11点(32.02g), 石器2点(不明), 鉄製品1点(刀子)が、全域の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられ、土層から第18号竪穴建物跡より新しい。

第16号竪穴建物跡出土遺物観察表(第35・36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
105	土師器	坏	-	(1.8)	5.4	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端回転へう閉り 内面へう磨き 底部回転へう閉り 黒書「X」	覆土下層	10%
106	須恵器	坏	-	(3.2)	7.6	長石・石英	黄灰	普通	底部へう閉り へう磨き	覆土中	10%
110	土師器	高台付坏	-	(2.0)	[6.6]	長石・石英	橙	普通	底部ナテ後高台輪付	覆土中	10%
107	須恵器	高台付坏	-	(3.7)	8.1	長石・石英	灰	普通	底部高台輪付後ナテ	覆土上層	20%
108	土師器	甕	[21.7]	(14.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面上部ナテ 下部縦位のへう閉り 内面ナテ	覆土下層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
109	土師器	小形甕	-	(4.4)	6.6	長石・石灰・雲母	にぶい肌	普通	体部外面下部斜位のヘラ削り	内面ナデ	覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	刀子	(105)	0.7	0.3	(8.26)	鉄	基部欠損	床面	PL12

第17号竪穴建物跡（第37図）

位置 調査区東部のB49区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

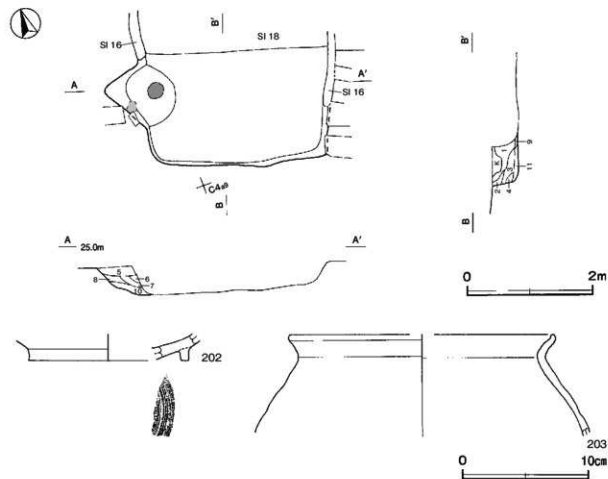
重複関係 第16・18号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸は2.88mで、南北軸は1.84mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定できる。主軸方向はN-71°-Wである。壁は高さ36cmで、外傾している。

床 平坦である。硬化面は確認できなかった。

竈 西壁の南寄りに付設されている。遺存状態は悪く、規模は焚部から煙道部まで110cm、燃焼部幅は94cmと推定できる。袖部は遺存していない。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ60cm掘り込み、奥壁で段を有しながら、火床部から外傾している。

覆土 11層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。



第37図 第17号竪穴建物跡・出土遺物実測図

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7	暗褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	8	暗褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック中量
4	暗褐色	ロームブロック少量	10	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量	11	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
6	暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・粘土粒子微量			

遺物出土状況 土師器片 91 点（坏 6、高台付坏 1、甕 84）、須惠器片 18 点（高台付坏 8、蓋 3、盤 1、甕 6）、鉄製品 1 点（釘）が、全域の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器及び第 16・18 号竪穴建物跡との重複関係から、8 世紀後葉と考えられる。

第 17 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 37 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
302	須惠器	甕	—	[21]	[128]	長石・石英	灰褐色	普通	丸底 底部割乾ヘラ削り後高台貼付	覆土中	10%
303	土師器	甕	[21.1]	(80)	—	長石・石英・雲母・柱状物質	赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	甕覆土中	10%

第 18 号竪穴建物跡（第 38・39 図）

位置 調査区東部の B 49 区、標高 25m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 17 号竪穴建物跡を掘り込み、第 16 号竪穴建物、第 13 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.98m、短軸 3.45m の長方形で、主軸方向は N-75°-E である。壁は高さ 32cm で、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 東壁の南寄りに付設されている。煙道部の一部が攪乱を受けており、規模は焚口部から煙道部まで 98cm と推定でき、燃焼部幅は 44cm である。竈全体を床面から深さ 30～40cm の凹凸状に掘り込み、ロームブロックを含む第 15～17 層を埋土して構築されている。袖部は第 10～14 層を積み上げて構築されている。両袖部の先端には、凝灰岩の切石が使用され、焚口部の補強を意図したものと考えられる。火床面は第 15 層上面であり、火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ 70cm 掘り込み、火床部から外傾していると推定できる。火床部の煙道寄りには、柱状の凝灰岩の切石が確認でき、火熱を受けた痕跡から、支脚と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	暗褐色	焼土ブロック中量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子中量	11	褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
3	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	12	暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック微量
4	暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量	13	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量
5	暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック微量	14	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
6	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	15	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
7	暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量	16	褐色	ロームブロック多量
8	暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量	17	暗褐色	ロームブロック中量
9	褐色	ロームブロック中量			

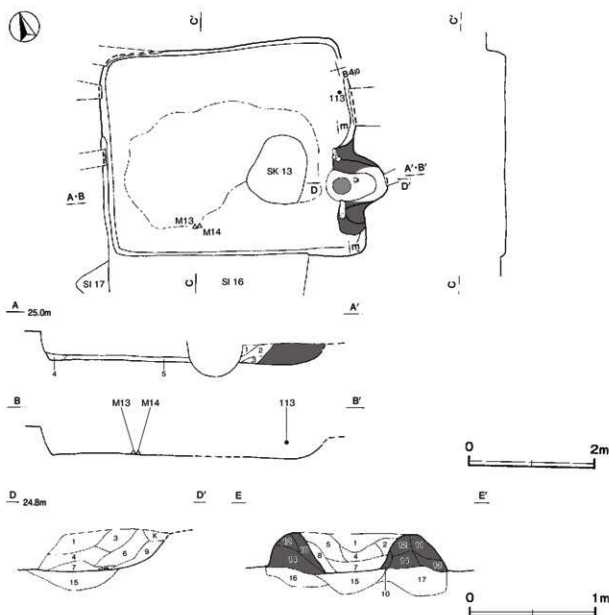
覆土 5 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

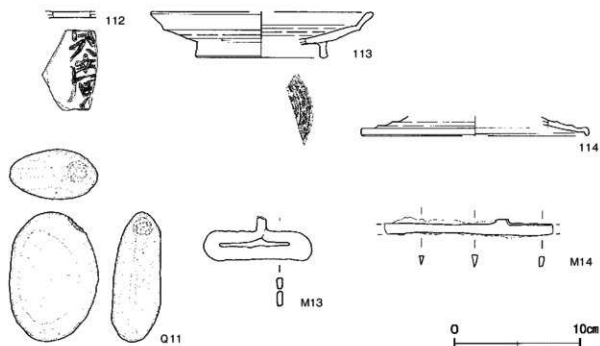
- | | | | |
|--------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 黒暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 黒暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 | 5 黒暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 黒暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 116点 (坏9, 高台付皿1, 甕106), 須恵器片 12点 (坏6, 高台付坏1, 蓋2, 甕3), 石器1点 (敲石), 鉄製品1点 (火打金) が, 覆土中から出土している。M13・M14は床面から出土していることから, 廃絶時に遺棄されたものである。113は覆土上層から出土していることから, 埋め戻す過程で混入したものである。

所見 時期は, 出土土器及び第16・17号竪穴建物跡との重複関係から, 9世紀前葉と考えられ, 土層から第16号竪穴建物跡より古い。



第38図 第18号竪穴建物跡実測図



第39図 第18号竪穴建物跡出土遺物実測図

第18号竪穴建物跡出土遺物観察表(第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
112	土師器	坏	-	-	(4.1)	長石・石英	にぶい橙	普通	墨書「貞・異」	覆土中	5% PL11
114	須恵器	蓋	[180]	(1.5)	-	長石・石英	黄灰	普通	ロクロ成形	甕割方埋土中	5%
113	土師器	高台付皿	[174]	3.6	[104]	長石・石英	にぶい黄緑	普通	ロクロ成形 底部回転へう割り後高台貼付	覆土上層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 11	磁石	10.3	2.0	3.9	371.7	砂岩	上端部に応痕状の敲打痕	甕割土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 14	刀子	(13.4)	1.2	0.3	(146)	鉄	先端部欠損 刀身断面三角形 基部断面長方形	床面	
M 13	火打金	8.6	3.5	0.5	247.3	鉄	断面長方形 端部重ね合わせ	床面	PL12

第19号竪穴建物跡(第40・41図)

位置 調査区東部のC 5a5区、標高23mほどの平坦な台地上に位置している。

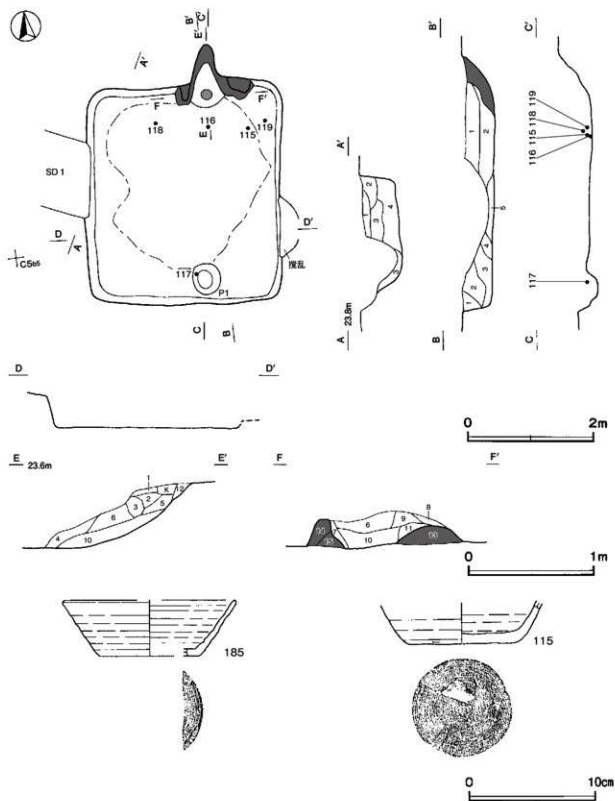
重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.50m、短軸3.10mの長方形で、主軸方向はN-7°-Eである。壁は高さ46cmで、外傾している。

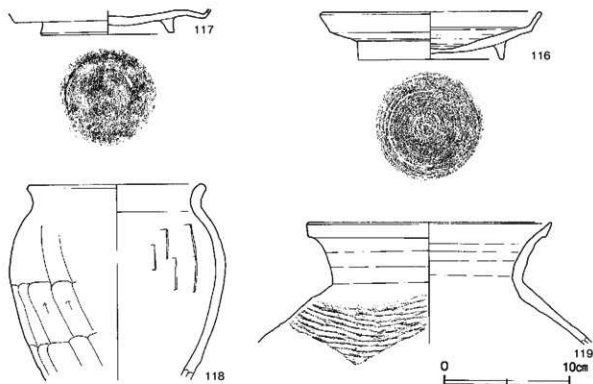
床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで100cmで、燃焼部幅は46cmである。袖

部は床面とほぼ同じ高さの地山の上に、粘土ブロックを含む第13～15層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ60cm掘り込み、火床部から緩やかに傾斜している。第3層は天井部の崩落土である。



第40図 第19号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第41図 第19号建物跡出土土物実測図

甕土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | 10 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 11 暗褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量 |
| 4 極暗褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 | 12 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 | 13 黄褐色 | 粘土ブロック中量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 14 暗褐色 | 粘土ブロック中量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量 | 15 暗褐色 | 粘土ブロック中量、焼土粒子少量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

ピット P1は深さ13cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|---------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 4 濃い黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片50点(坏5、甕45)、須恵器片19点(坏13、蓋2、盤2、甕2)、土製品1点(不明)、粘土塊3点(9.29g)のほか、陶器片1点(不明)が、全域の覆土中層から下層にかけて出土している。

116は甕手前の床面から正位で出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。

第19号竪穴建物跡出土土物観察表(第40・41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
115	須恵器	坏	—	[33]	8.1	長石・石英	灰	普通	体部下端回転へう削り 底部回転へう削り	覆土下層	30%
185	須恵器	坏	[136]	4.4	[80]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端へう削り 底部回転へう削り	覆土中	20%

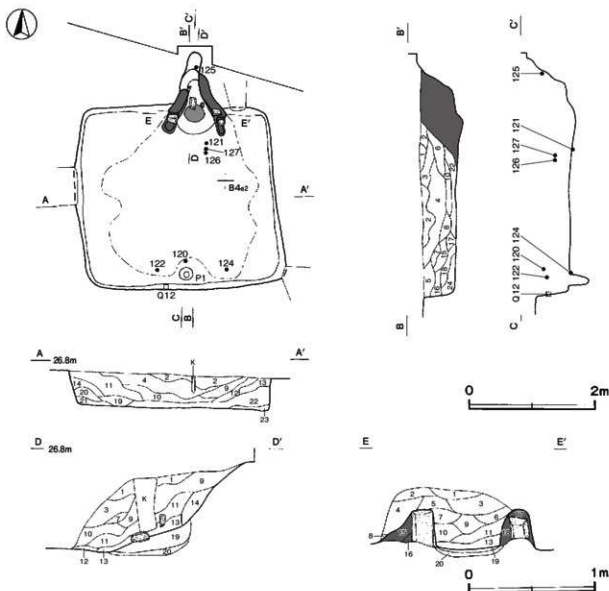
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
116	須恵器	壺	172	3.8	116	長石・石英・雲母	褐色	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	床面	80% PL S
117	須恵器	壺	-	(1.9)	104	長石・石英・雲母・黒色粒子	褐色黄	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	F1覆土上層	70%
118	土師器	甕	136	(15.5)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部外・内面磨ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	50%
119	土師器	甕	193	(9.6)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁・面部外・内面ロクロナデ 体部外面横位の平行刃き	覆土下層	20%

第 20 号竪穴建物跡 (第 42 ~ 44 図)

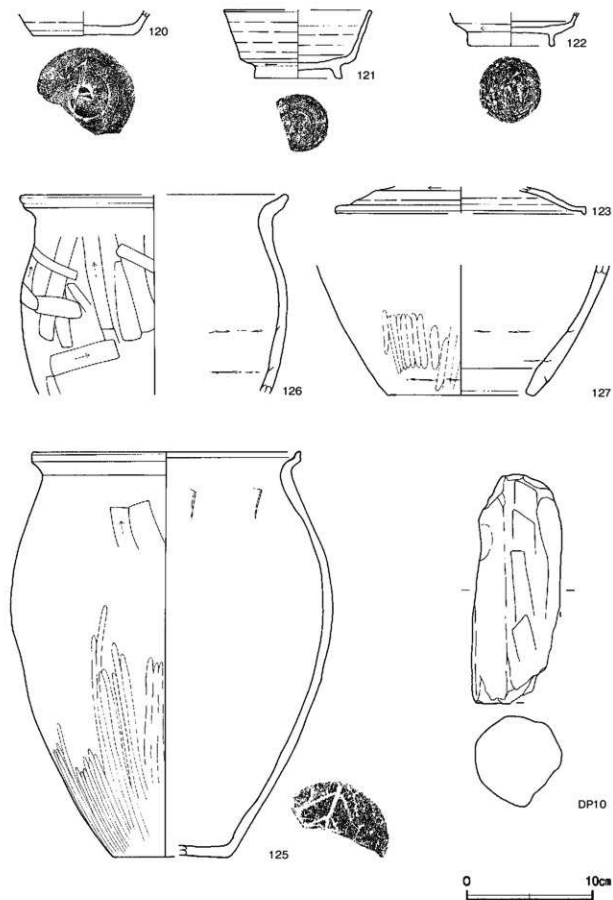
位置 調査区中央部の B 4 d1 区、標高 26m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 3.14m、短軸 2.92m の方形で、主軸方向は N - 2° - E である。壁は高さ 50 ~ 54cm で、ほぼ直立している。

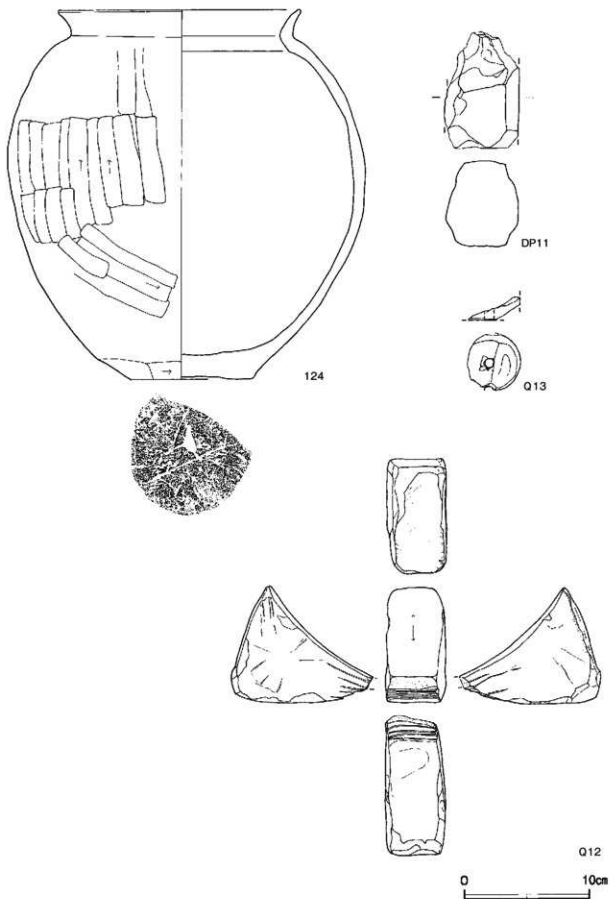
床 平坦で、中央部が踏み固められている。



第 42 図 第 20 号竪穴建物跡実測図



第43图 第20号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第44图 第20号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで130cmで、燃焼部幅は60cmである。袖部は地山を掘り残して基部とし、ロームブロックを含む第15～18層を積み上げて構築されている。両袖部の先端には、柱状の凝灰岩の切石が直立しており、焚口部の補強を意図したものと考えられる。火床部は床面を深さ30～60cmの皿状に掘り込み、粘土粒子を含む第19・20層を埋土して構築されている。火床面は北壁ライン上に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ80cm掘り込み、火床部から外傾している。火床部の右側には、柱状の凝灰岩の切石が直立しており、支脚と考えられる。また煙道部の左側には、芯材と考えられる凝灰岩の切石が1点出土している。

竈土層解説

1 褐 色	ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量	11 褐 色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック微量
2 にふい褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	12 暗 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量
3 にふい黄褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	13 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子微量
4 にふい黄褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	14 暗 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
5 灰黄褐色	ロームブロック・粘土粒子少量	15 にふい黄褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
6 黒 褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	16 黒 褐色	ロームブロック微量
7 黒 褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	17 黄 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子微量
8 黒 褐色	ロームブロック微量	18 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量
9 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	19 暗 褐色	粘土粒子多量
10 暗 褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量	20 暗 褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、黒色土ブロック少量

ピット P1は深さ30cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 24層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

1 極暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	13 暗 褐色	ロームブロック多量
2 極暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	14 暗 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 極暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	15 黒 褐色	ロームブロック少量
4 暗 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量	16 極暗褐色	ロームブロック少量
5 極暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	17 極暗褐色	ロームブロック多量
6 極暗褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック少量	18 黒 褐色	ロームブロック多量
7 極暗褐色	ロームブロック多量、黒色土ブロック少量	19 暗 褐色	ロームブロック中量
8 極暗褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量	20 暗 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
9 暗 褐色	黒色土ブロック多量、ロームブロック中量	21 黒 褐色	ロームブロック中量
10 暗 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	22 暗 褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量
11 暗 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子少量	23 黒 褐色	ロームブロック微量
12 暗 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	24 極暗褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片51点(坏6、蓋1、甕44)、須恵器片22点(坏16、高台付坏3、蓋2、甕1)、土製品3点(支脚2、不明1)、石器2点(砥石、紡錘車)が東側の覆土中から出土している。121は竈手前の床面から出土したことから、廃絶時に遺棄されたものである。124は南壁際の床面から底部が破損した状態で出土している。埋め戻しの土圧によって、変形したものである。125は煙道部の煙出しから出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第20号竈穴建物跡出土遺物観察表(第43・44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
120	須恵器	坏	-	(19)	80	長石・石英	黄灰	普通	体部下端回転へう閉り 底部ナゲへう記号	覆土上層	10%
121	須恵器	高台付坏	[116]	5.4	7.0	長石・石英	灰オリーブ	普通	体部下端回転へう閉り 底部回転へう閉り残高が短	床面	40% PL 8
122	須恵器	高台付坏	-	(27)	6.8	長石・石英	灰白	普通	体部下端回転へう閉り 底部回転へう閉り残高が短	覆土中層	10%

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
123	土師器	差	[198]	(2.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	天井部割取へう割り	覆土中	10%	
124	土師器	差	190	294	9.5	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ 底部に木葉痕	体部外面へう割り 内 床面	100% PL10	
125	土師器	差	220	320	[109]	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 下半部へう割き 内部へうナデ 底部に木葉痕	体部外面上部へう割り 下半部へう割き 内部へうナデ	継体部	70%
126	土師器	差	[210]	(15.8)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 横位のへう割り 内面ナデ	体部縦位のへう割り後 横位のへう割り 内面ナデ	覆土中層	20%
127	土師器	瓶	-	(10.3)	11.6	長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面下部へう割き	内面ナデ 輪縁痕	覆土中層	30%

番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP10	支脚	18.1	5.3	(7.3)	(476.9)	長石・石英	にぶい橙	断面多角形 欠損 へうナデ 指頭圧痕	覆土中	
DP11	支脚	(9.3)	-	(5.9)	(196.5)	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	断面長方形 欠損 へうナデ	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 12	砥石	9.2	(11.3)	5.8	(545.0)	凝灰岩	紙面1面	覆土中層	PL11
Q 13	紡錘車	(4.4)	(1.8)	(0.8)	(12.4)	粘板岩	欠損 一方向からの穿孔	覆土中	

第 21 号 竪穴建物跡 (第 45 図)

位置 調査区東部の C 5 b4 区、標高 24m ほどの平坦な台地上に位置している。

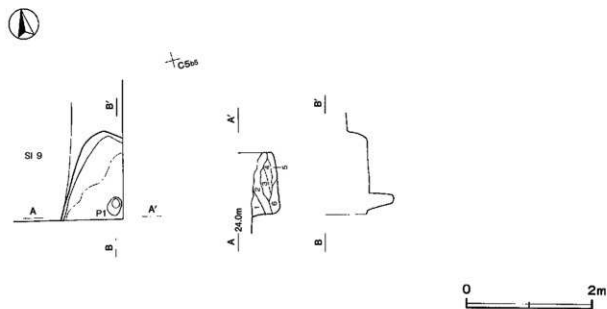
重複関係 第 9 号 竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東側から南側にかけて調査区域外へ延びているため、北東・南西軸は 1.42m、北西・南東軸は 0.98m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向は N - 27° - E と推定できる。壁は高さ 36 ~ 44cm で、外傾している。

床 平坦で、北コーナー部から西壁際を除いて、踏み固められている。

ピット P 1 は深さ 40cm で、性格は不明である。

覆土 6 層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。



第 45 図 第 21 号 竪穴建物跡実測図

土層解説

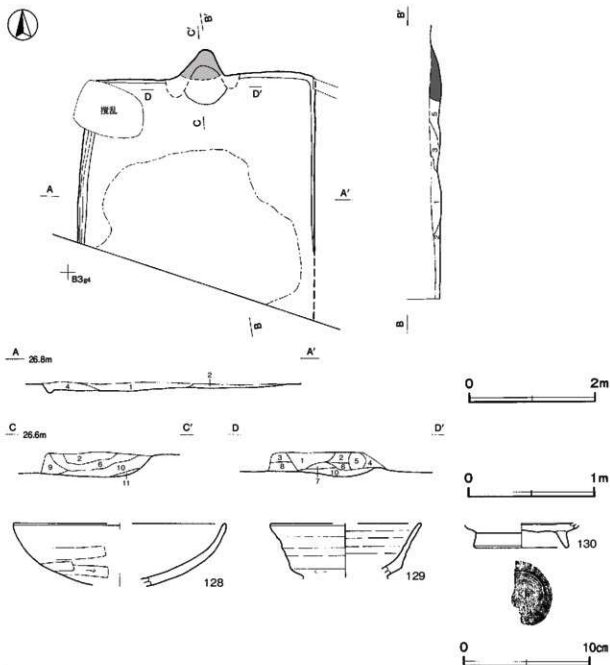
- | | | | |
|-------|-----------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 灰褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片4点(亮)が、覆土中から出土している。土器は細片の為、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器及び第9号竪穴建物跡との重複関係から、平安時代と考えられる。

第22号竪穴建物跡(第46図)

位置 調査区中央部のB3f4区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第46図 第22号竪穴建物跡・出土遺物実測図

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸は3.77mで、南北軸は3.85mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-5°-Eである。確認できた壁は高さ7~17cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。西壁下には幅5cm、深さ2cmの壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cmで、燃焼部幅は66cmである。袖部は地山を掘り残したと推定できる基部のみが残存している。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面の赤変及び硬化ともに不鮮明である。燃焼部及び煙道部は、壁外へ44cm掘り込み、火床部から外傾している。火床部から煙道部にかけて火熱を受けて赤変硬化している範囲が確認できた。第5・6層は、天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|-----------------------------|----|-------|-------------------------------|
| 1 | オリーブ褐色 | 粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量 | 7 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 | 黒褐色 | 粘土粒子少量、焼土ブロック微量 | 8 | にぶ黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 | 9 | 灰褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・粘土粒子微量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・粘土粒子微量 | 10 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 |
| 5 | 黄褐色 | 粘土粒子多量、焼土ブロック・炭化物微量 | 11 | 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量 |
| 6 | 灰黄褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量 | | | |

覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|--------------------------|---|-----|--------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量 | 4 | 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック少量、炭化物微量 | 5 | 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 | | | |

遺物出土状況 土師器片71点(坏12、高台付坏1、甕58)、須恵器片11点(坏9、高台付坏1、甕1)が、北部の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第22号竪穴建物跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
128	土師器	坏	[168]	(5.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい焼	普通	口縁部外・内面ナデ	体部外面横位のヘラ削り	甕覆土中	20%
130	土師器	高台付坏	-	(2.0)	[7.4]	長石・石英	にぶい焼	普通	内面黒色処理	底部回転ヘラ削り後高台貼付	甕覆土中	10%
129	須恵器	高台付坏	[118]	(4.3)	-	長石・石英	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り		甕覆土中	10%

第23号竪穴建物跡(第47図)

位置 調査区中央部のB3g6区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第35号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸は3.21mで、南北軸は2.30mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-3°-Eである。壁は高さ3~8cmで、外傾している。

床 平坦で、竈焚口部から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで76cmで、燃焼部幅は40cmである。袖部は確認できなかった。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面の赤変及び硬化ともに不鮮明である。燃焼部及び煙道部は、壁外へ40cm掘り込み、火床部から外傾している。火床部の煙道寄りに支脚が据え付け

られている。

遺土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
 2 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量
 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

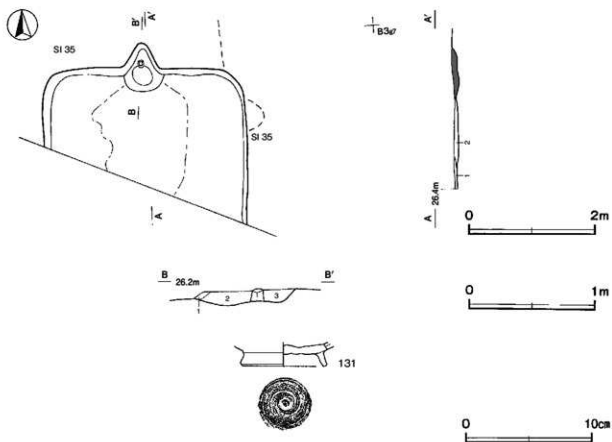
覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
 2 極暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片7点(甕)、須恵器片5点(坏4、高台付坏1)、土製品1点(支脚)が、全城の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第47図 第23号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第23号竪穴建物跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
131	須恵器	高台付坏	-	(19)	64	長石・石英・雲母	灰黄緑	普通	底部回転へラ削り段高台貼付	覆土中	20%

第 24 号竪穴建物跡 (第 48 図)

位置 調査区中央部の B 3b5 区、標高 26m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているが、長軸 3.60m、短軸 3.40 m の方形で、主軸方向は N - 35° - W である。確認できた壁は高さ 2 ~ 6 cm で、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北西壁のやや北寄りに付設されている。遺存状態が悪く、赤変した火床面と凝灰岩 3 点しか確認できなかった。凝灰岩 2 点は、両袖部と推定できる付近から出土しており、袖部の芯材または補強材と考えられる。

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深 30 ~ 60 cm で、規模と配置から支柱穴である。P 5 は深さ 16 cm で、南東壁側の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。第 1 ~ 3 層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 褐色 ロームブロック少量 | 3 極暗褐色 ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | |

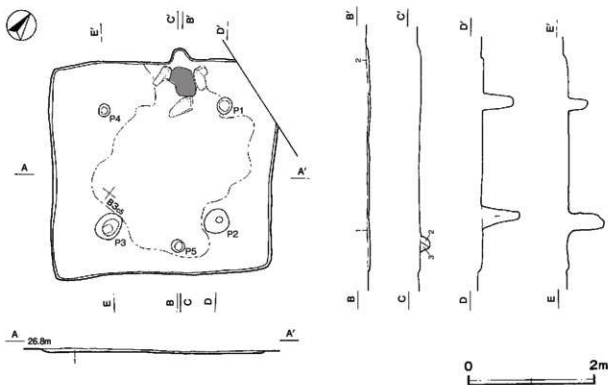
覆土 単層である。層厚が薄いため、堆積状況は不明である。第 2 層は、竈の覆土である。

土層解説

- | | |
|-----------------|-------------------------------|
| 1 灰褐色 ロームブロック微量 | 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 |
|-----------------|-------------------------------|

遺物出土状況 土師器片 3 点(甕)、須恵器片 1 点(高台付杯)が、覆土中から出土している。土器は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀代と考えられる。第 4 号竪穴建物跡と主軸方向が類似しており、同時期に存在していたと考えられる。

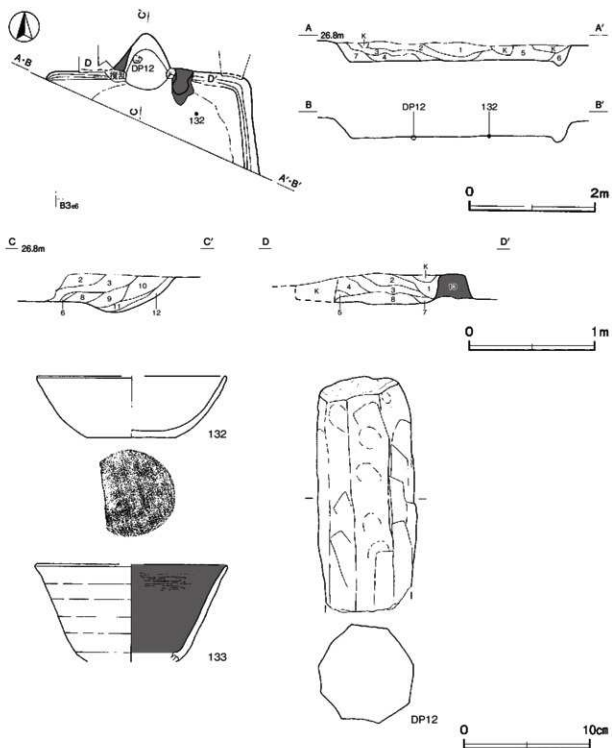


第 48 図 第 24 号竪穴建物跡実測図

第25号竪穴建物跡 (第49図)

位置 調査区中央部のB3d6区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南部の大半が調査区域外へ延びているため、東西軸は3.26m、南北軸は1.48mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-3°-Eである。壁は高さ23~29cmで、外傾している。



第49図 第25号竪穴建物跡・出土遺物実測図

床 平坦で、中央部が踏み固められている。確認できた壁下には幅8cm、深さ4cmの壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで86cmで、左袖が攪乱を受けているが、燃焼部幅は66cmと推定できる。袖部は床面とほぼ同じ高さの地山の上に、粘土を含む第13層を積み上げて構築されている。右袖部の内側には、凝灰岩の切石が芯材として使用されている。火床部は床面とほぼ同じ高さから煙道部へ向かって掘り込んでおり、火床面は確認できなかった。燃焼部及び煙道部は、壁外へ52cm掘り込み、火床部から外傾している。火床部の煙道寄りには、支脚（DP12）が据え付けられている。

竈土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	7 濃い黄褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 濃い黄褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	8 濃い赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量
3 濃い黄褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	9 濃い赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物微量	10 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
5 黄褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物微量	11 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
6 濃い黄褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	12 暗褐色	ロームブロック少量
		13 暗褐色	粘土粒子中量、ロームブロック少量

覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 灰褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	5 暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土ブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	7 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量		

遺物出土状況 土師器片 89点（坏19、甕70）、須恵器片 4点（坏2、高台付坏1、蓋1）、土製品 1点（支脚）、粘土塊 3点（33.89g）、鉄製品 1点（不明）が、覆土中から出土している。132は右袖付近の床面から出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。

第25号竪穴建物跡出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
132	土師器	坏	[150]	4.9	7.0	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外・内面ナデ 底部ナデ	床面	40% PL 5
133	土師器	坏	[153]	(7.7)	-	長石・石英	濃い黄褐色	普通	体部外面ロクロナゲ 内面へう磨き	覆土中	10%

番号	部種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP12	支脚	(18.7)	6.1	(8.0)	(826)	長石・石英	濃い橙	断面八角形 ヘラナゲ 衝面圧痕	火床部底面	

第26号竪穴建物跡（第50・51図）

位置 調査区西部のB 2c0区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.78m、短軸3.66mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁は高さ38～47cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで96cmで、燃焼部幅は62cmである。袖

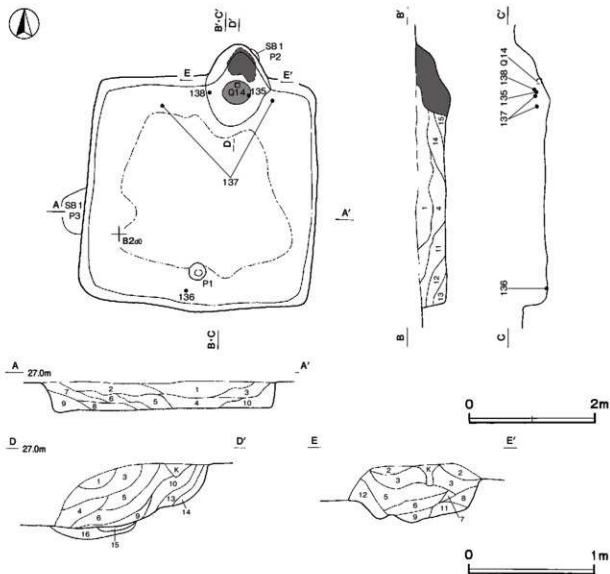
部は確認できなかった。火床部は床面を深さ8cmの皿状に掘り込み、第15・16層を埋土して構築されている。火床面は第15層上面であり、火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ25cm掘り込み、火床部から奥壁で段を有しながら、外傾している。

埋土層解説

- | | |
|----------------------------|----------------------------------|
| 1 黄褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 | 10 暗灰黄色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量 |
| 2 に近い褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 | 11 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 黄褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子少量 | 12 暗褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子少量 |
| 4 オリーブ褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量 | 13 暗灰黄色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 5 オリーブ褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 | 14 黄褐色 ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 6 オリーブ褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック少量 | 15 に近い褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 16 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 8 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 | |
| 9 赤褐色 焼土ブロック中量 | |

ピット P1は深さ14cmで、南壁側の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 15層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。



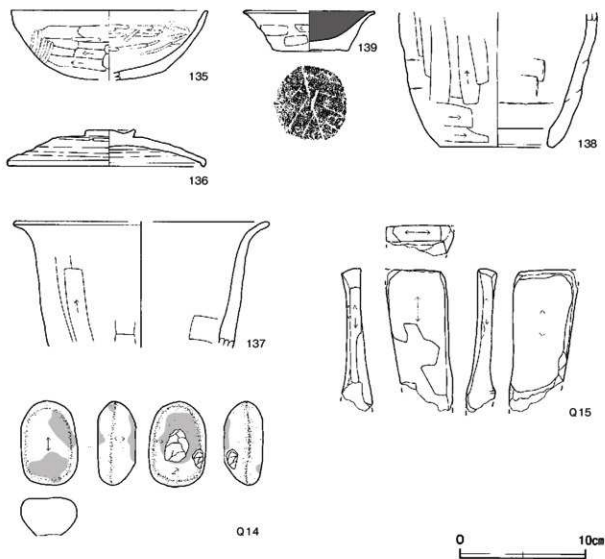
第50図 第26号竪穴建物跡実測図

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	9 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量	10 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	11 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘土ブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	12 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
5 暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量	13 暗褐色	ロームブロック少量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量、粘土ブロック微量
7 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	15 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
8 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片 235 点 (杯 24, 甕 205, 瓶 6), 須恵器片 25 点 (杯 11, 蓋 3, 甕 11), 粘土塊 10 点 (155.52g), 石器 2 点 (砥石), 石製品 1 点 (不明), 礫 9 点, 鉄製品 1 点 (釘), 鉄滓 1 点 (18.70g) が, 全域の覆土下層から床面にかけて出土している。136 は南壁側の床面から逆位で出土したことから, 廃絶時に遺棄されたものである。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 51 図 第 26 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第26号竪穴建物跡出土遺物観察表（第51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
135	土師器	杯	15.6	(5.5)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 口縁へう磨き・内面へう磨き	覆土下層	90% PL 5
139	土師器	杯	[10.2]	3.2	5.6	長石・石英・雲母	明焼	普通	口縁部外・内面横ナテ 底部に木葉痕	覆土中	80% PL 5
136	須恵器	蓋	15.5	2.9	-	長石・石英	灰青	普通	天弁部回転へう磨り	床面	100% PL 8
137	土師器	瓶	[20.0]	(10.0)	-	長石・石英・ 赤色粒子・針状物質	灰焼	普通	口縁部外・内面横ナテ 内面へうナテ	覆土下層	10%
138	土師器	瓶	-	(10.7)	9.0	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 内面へうナテ 体部外面縦位のへう磨り 下層横位のへう磨り	覆土下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q14	砥石	6.7	4.5	3.1	143.0	安山岩	砥面3面 被熱痕	覆土下層	PL12
Q15	砥石	(11.3)	(5.4)	2.5	(130.3)	凝灰岩	欠損 砥面5面	覆土中	PL11

第27号竪穴建物跡（第52～54図）

位置 調査区西部のA 28区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第28号竪穴建物跡を掘り込み、第3・4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているが、東西軸5.60m、南北軸5.15mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁は高さ54～62cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、北壁際から中央部にかけて踏み固められている。南壁の一部を除く壁下には幅8～12cm、深さ10～14cmの壁溝が巡っている。中央部の床面で焼土範囲が確認できた。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで80cmしか確認できず、燃焼部幅は68cmである。両袖部には、柱状の凝灰岩の切石が直立しており、粘土粒子を含む褐色土の第12層を充填して構築され、焚口部の補強を意図したものと考えられる。火床部は床面を深さ14cmの皿状に掘り込み、第13層を埋土して構築されている。火床面は第13層上面であり、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は調査区域外に延びているため、確認できなかった。竈の構築材として使用されたと考えられる凝灰岩の切石が竈の周辺で9点出土している。

竈土層解説

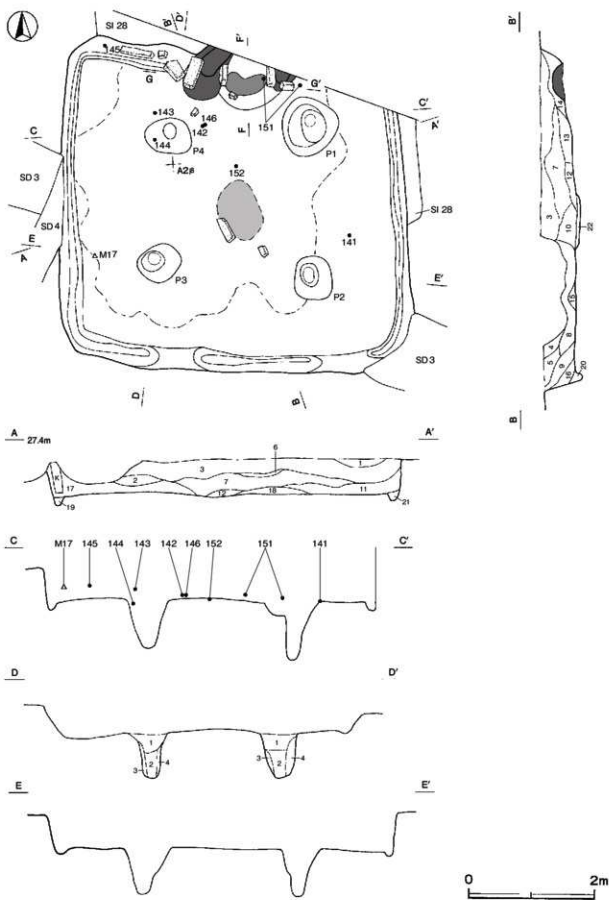
1 灰黄褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量	8	にぶい黄褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子微量
2 灰黄褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	9	にぶい黄褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	10	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量	11	にぶい赤褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量
5 黒褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量	12	褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量
6 暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	13	赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
7 にぶい赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量			

ピット 4か所。P1～P4は深さ68～100cmで、規模と配置から主柱穴である。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3・4層は掘方への埋土である。

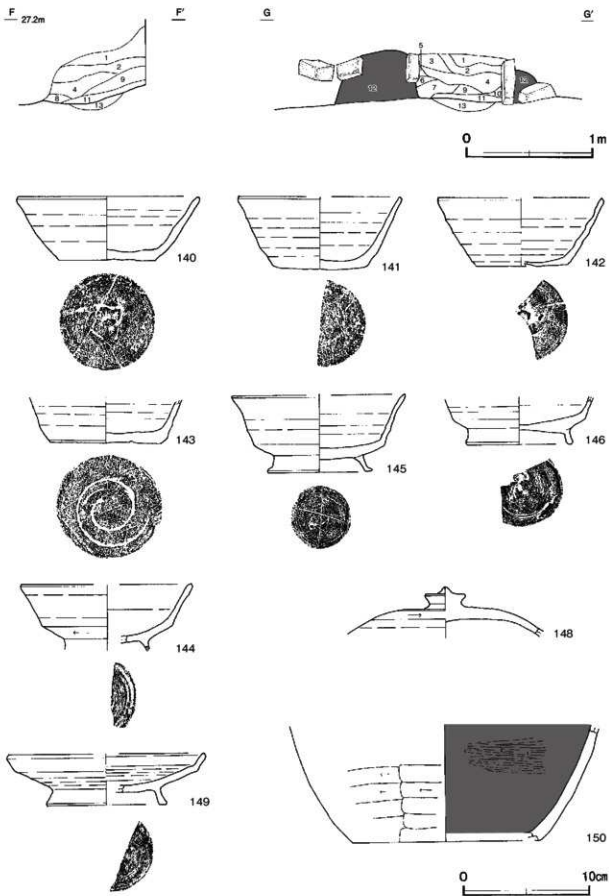
ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	3 灰褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量	4 褐色	ロームブロック中量

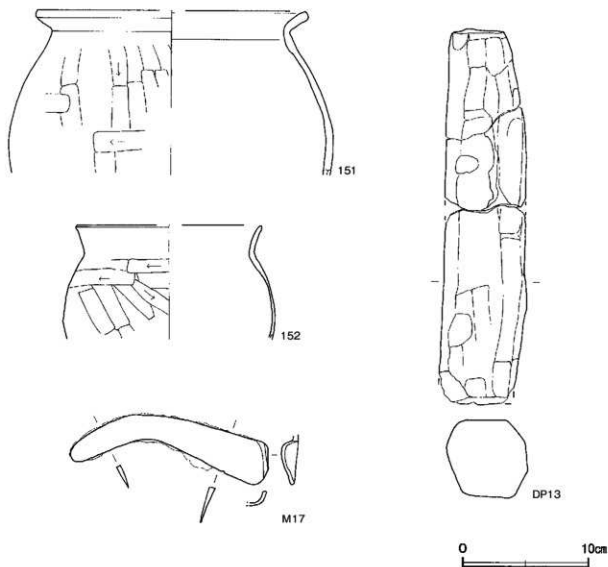
覆土 21層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第22層は、焼土範囲の堆積土である。



第 52 图 第 27 号竖穴建物跡实测图



第 53 图 第 27 号竖穴建物跡・出土物実測図



第54図 第27号竪穴建物跡出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|-----------|---------------------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック少量 | 12 にごい赤褐色 | 焼土粒子多量, ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 13 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 14 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 15 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 16 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 暗褐色 | 炭化粒子中量, ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量 | 17 にごい褐色 | ロームブロック中量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 18 灰褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック少量 | 19 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 9 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 20 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 10 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 21 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 11 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 22 赤褐色 | 焼土粒子多量, 炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片 572点(坏59, 高台付坏3, 蓋1, 鉢2, 甕505, 小形甕1, 不明1), 須恵器片 267点(坏131, 高台付坏51, 蓋38, 盤1, 高盤1, 甕45), 土製品1点(支脚), 鉄製品3点(鎌1, 不明2)のほか, 土師質土器1点(播鉢。)が, 全域の覆土中から出土している。144はP4の覆土上層から出土していることから, 柱抜き取り後の埋め戻しの際に混入したものである。145は北西コーナー部の覆土中層から出土したことから,

埋め戻す過程で廃棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第27号竪穴建物跡出土遺物観察表(第53・54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
140	須恵器	坏	14.3	5.1	7.6	長石・石英・ 黒色粒子	灰白	普通	体部下端ナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中	80% PL. 6
141	須恵器	坏	[128]	5.7	[7.5]	長石・石英・ 針状物質	灰	普通	底部ヘラナデ	床面	30% 木蓋下底産
142	須恵器	坏	[130]	5.4	[7.2]	長石・石英・ 針状物質	灰白	普通	底部ヘラナデ	覆土下層	20%
143	須恵器	坏	-	(3.6)	8.6	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部下端ナデ 底部回転ヘラ切り後一方のヘラ削り	覆土中層	20%
144	土師器	高台付坏	[134]	(5.2)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り	P4覆土層	20%
145	須恵器	高台付坏	[136]	6.1	7.9	長石・石英	灰黄	普通	体部下端ナデ 底部にヘラ記号「×」	覆土中層	60% PL. 8
146	須恵器	高台付坏	-	(3.8)	[8.4]	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部高台貼付後ナデ	覆土下層	10%
148	須恵器	蓋	-	(4.0)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	天昇部回転ヘラ削り	覆土中	30%
149	須恵器	蓋	[156]	(4.1)	[9.4]	長石・石英	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	覆土中	20%
150	土師器	鉢	-	(9.1)	[15.0]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	褐	普通	体部外面横位のヘラ削り 内面ヘラ削き	掘方埋土中	10%
151	土師器	甕	[21.4]	(13.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り後横位のヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	20%
152	土師器	小形甕	[14.6]	(9.0)	-	長石・石英・ 角閃石	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上部横位のヘラ削り 中部横位のヘラ削り 内面ナデ	床面	10%

番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP13	支脚	(29.9)	4.1	(7.0)	860.3	長石・石英	にぶい赤褐	断面七角形 欠損 ヘラナデ 指頭圧痕	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M17	鎌	16.0	3.4	0.4	64.80	鉄	基部は全体を折り返す	覆土中層	PL12

第28号竪穴建物跡(第55図)

位置 調査区西部のA 28区。標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第27号竪穴建物、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が調査区域外へ延びているため、東西軸は5.00m、南北軸は3.80mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定できる。壁は高さ54cmで、外傾している。

床 平坦である。硬化面は確認できなかった。

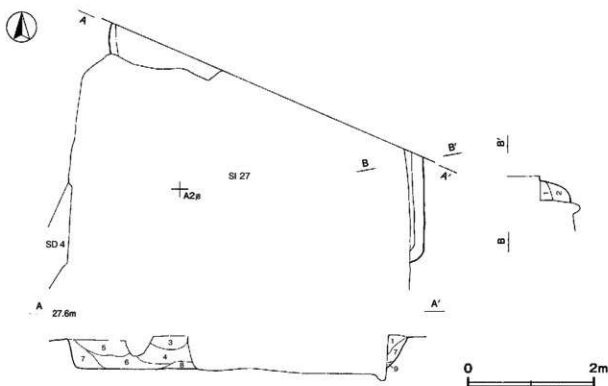
覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解読

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | 8 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック多量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック多量、黒色土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片5点(甕)、須恵器片1点(坏)が、覆土中から出土している。土器は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器及び第27号竪穴建物跡との重複関係、第29号竪穴建物跡と近接しており、同時に並び建てるのが困難であることから、8世紀後葉と考えられる。



第 55 図 第 28 号竪穴建物跡実測図

第 29 号竪穴建物跡 (第 56 図)

位置 調査区西部の A 2 i7 区、標高 27m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 3 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外へ延びているため、南北軸は 4.00m で、東西軸は 1.75m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向は $N - 10^{\circ} - E$ と推定できる。壁は高さ 45 ~ 47cm で、外傾している。

床 平坦で、確認できた壁際を除き、踏み固められている。

ピット 2 か所。P 1 は深さ 46cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 2 は深さ 36cm で、土層及び配置状況から、P 2 から P 1 への柱の立て替えが行われたと考えられる。

ピット土層解説

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 2 黒褐色 ローム粒子少量 |
|-----------------|---------------|

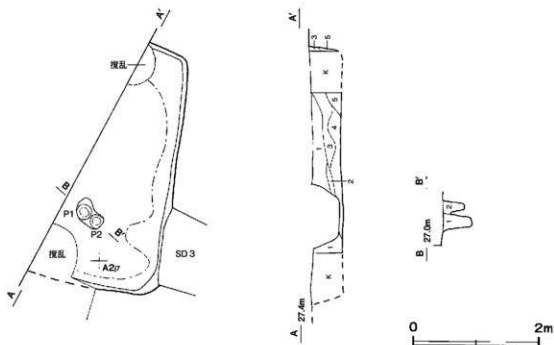
覆土 5 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量 | 5 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片 14 点 (坏 1、甕 13)、須恵器片 3 点 (坏 2、高台付坏 1) が、全城の覆土中から出土している。土器は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器及び主軸方向、第 27・28 号竪穴建物跡と近接しており、同時期に並び建てるのが困難であることから、8 世紀中葉と考えられる。



第56図 第29号竪穴建物跡実測図

第30号竪穴建物跡（第57～59図）

位置 調査区西部のA24区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸4.77m、短軸4.60mの方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁は高さ45～60cmで、ほぼ直立している。

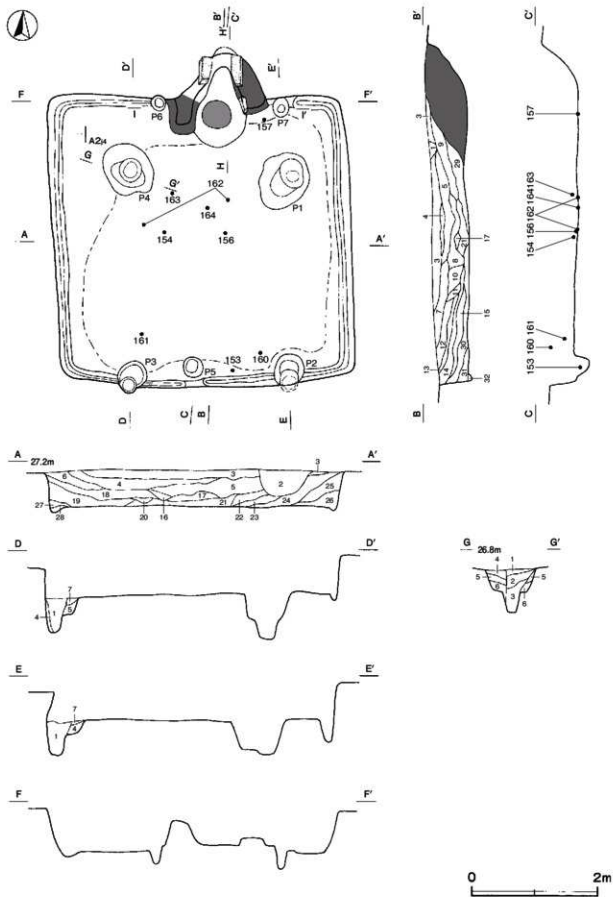
床 平坦で、燼際を除き、踏み固められている。壁下には幅6～8cm、深さ8cmの壁溝がほぼ全周している。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで160cmで、燃焼部幅は74cmである。袖部は床面とほぼ同じ高さの地山の上に、第23層を積み上げて構築されている。両袖部には、凝灰岩の切石が補強材として使用されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火熱を受けて亦硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ80cm掘り込み、第24・25層を充填して構築し、火床部から外傾している。

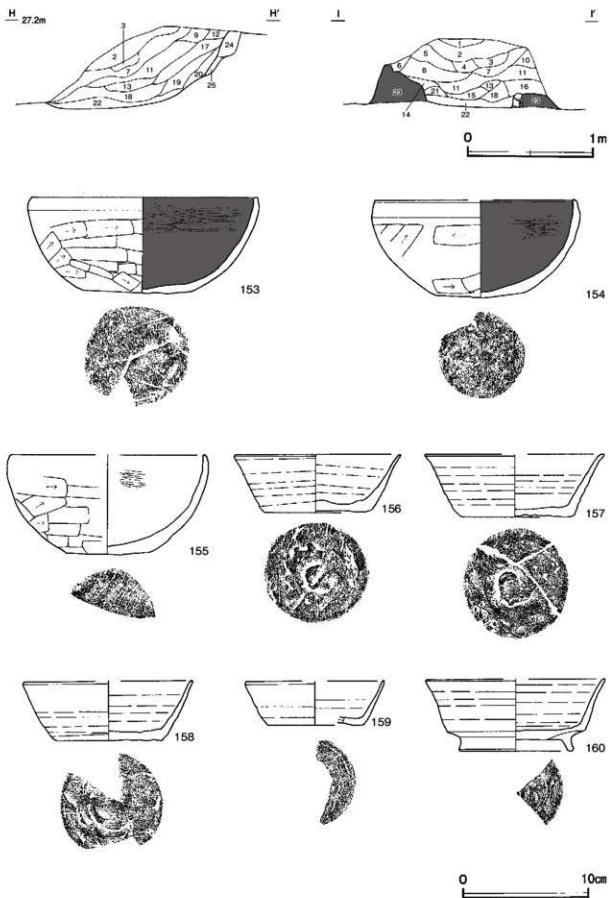
竈土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------------|----------|--------------------------|
| 1 濃い黄褐色 | ロームブロック少量 | 14 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック微量 | 15 暗褐色 | 焼土粒子少量 |
| 3 黄褐色 | 粘土ブロック中量、ローム粒子少量 | 16 灰褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 4 灰黄褐色 | ローム粒子中量 | 17 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量 | 18 濃い赤褐色 | 焼土ブロック少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 19 灰黄褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子少量 |
| 7 灰黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量 | 20 灰黄褐色 | 粘土粒子中量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック少量 | 21 赤褐色 | 焼土粒子中量 |
| 9 濃い黄褐色 | 粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 22 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 10 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 23 濃い黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 11 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 24 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 12 黒褐色 | ローム粒子少量 | 25 黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 13 黄褐色 | 粘土ブロック中量 | | |

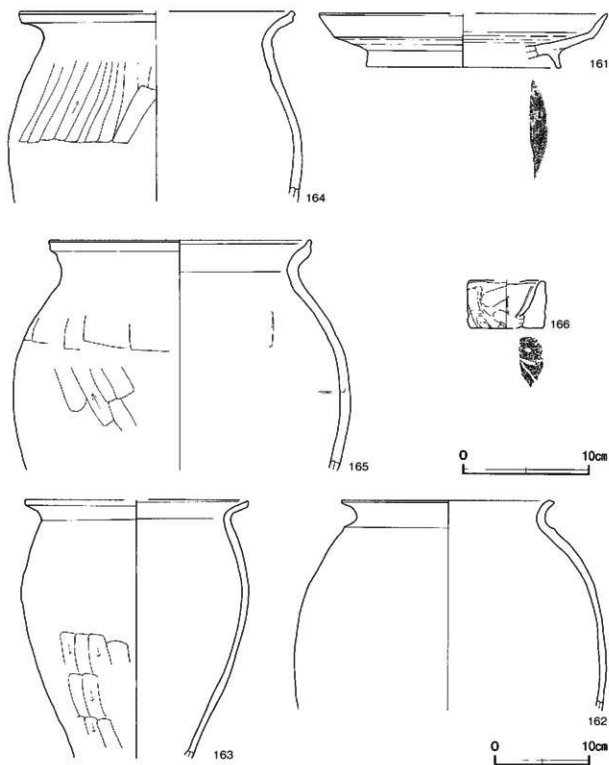
ピット 7か所。P1～P4は深さ58～74cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ20cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ30cm・32cmで、



第 57 图 第 30 号竖穴建物跡実測图



第 58 图 第 30 号竖穴建物跡・出土遺物実測図



第59図 第30号竪穴建物跡出土遺物実測図

補助柱穴と考えられる。第1～3層は柱抜き取り後の覆土。第4～7層は掘方への埋土である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 灰褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | | |

覆土 32層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	焼土粒子少量	17	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量
2	黒褐色	ロームブロック少量	18	暗褐色	炭化粒子中量、ロームブロック少量
3	黒褐色	ローム粒子少量	19	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量	20	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、粘土ブロック微量	21	極暗赤褐色	焼土ブロック中量
6	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	22	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
7	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	23	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
8	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	24	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
9	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土ブロック微量	25	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
10	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量	26	暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量
11	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量	27	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量
12	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	28	褐色	ローム粒子中量
13	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	29	黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
14	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	30	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
15	黒褐色	炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量	31	黒褐色	炭化粒子中量、ロームブロック微量
16	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	32	暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 368点(坏47, 鉢3, 甕316, 瓶1, 手捏1), 須恵器片 66点(坏36, 高台付坏2, 蓋6, 甕7, 高甕5, 甕10), 粘土塊2点(16.49g), 石製品1点(碁石₉)のほか、縄文土器片1点(深鉢)、弥生土器片2点(甕)が、全域の覆土中から出土している。156・157は床面から出土していることから、廃絶時に遺棄されたものである。153・162は床面から出土した破片が接合したもので、破砕後に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。

第30号竪穴建物跡出土遺物観察表(第58・59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
153	土師器	坏	178	7.7	8.4	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう割り 内面へう割き 底部へう割き 粘土ナデ	床面 覆土中	90% PL. 5
154	土師器	坏	[160]	7.8	7.0	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面へう割り 内面へう割き 底部へう割き 粘土ナデ	覆土下層	40%
155	土師器	坏	[154]	7.9	6.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面へう割り 内面へう割き 底部一方のへう割り後ナデ	覆土中	20%
156	須恵器	坏	131	4.6	8.0	長石・石英・粘土物質	にぶい黄褐色	普通	体部下端ナデ 底部一方のへう割り	床面	90% PL. 7 木蓋下遺棄
157	須恵器	坏	[142]	5.0	8.6	長石・石英	灰黄	普通	底部一方のへう割り	床面	60% PL. 6
158	須恵器	坏	[134]	4.7	8.4	長石・石英	黄灰	普通	体部下端ナデ 底部ナデ	覆土中	50%
159	須恵器	坏	[110]	3.5	[7.6]	長石・石英	褐色	普通	底部手持ちへう割り	覆土中	20%
160	須恵器	高台付坏	[142]	5.7	[9.0]	長石・石英	灰	普通	底部回転へう割り後高台貼付	覆土上層	20%
161	須恵器	甕	[228]	4.3	15.4	長石・石英	黄灰	普通	底部へう回転後高台貼付	覆土中層	20% 木蓋下遺棄
162	土師器	甕	220	(21.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 肩部外面横位のナデ 体部外面摩耗 内面ナデ	床面 覆土中	50%
163	土師器	甕	[237]	(27.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横 内面ナデ	覆土下層	60% PL10
164	土師器	甕	21.8	(15.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のへう割り 内面ナデ	床面 覆土中	30%
165	土師器	甕	20.6	(18.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面土長へうナデ 外周中位のへう割り 内面へうナデ	覆土中 覆土中	30% PL10
166	土師器	手捏土器	[58]	3.8	[5.6]	長石・石英	明赤褐色	普通	体部外・内面ナデ 底部に木蓋痕	覆土中	10%

第31号竪穴建物跡(第60図)

位置 調査区西部のB3d1区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南東部が調査区域外へ延びているため、東西軸は3.05mで、南北軸は2.52mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-88°-Eと推定できる。壁は高さ30~38cmで、外傾し

ている。

床 平坦で、西壁際から中央部にかけて踏み固められている。

ピット P1は深さ38cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。

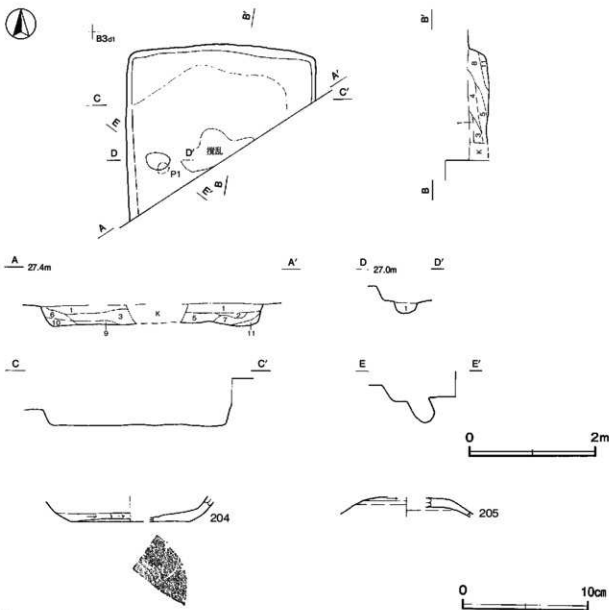
ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

覆土 11層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |



第60図 第31号竪穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 27 点（坏 3、甕 24）、須恵器片 5 点（坏 3、蓋 2）が、全域の覆土中から出土している。
所見 時期は、出土土器から 8 世紀代と考えられる。

第 31 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 60 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
204	土師器	坏	-	(20)	[94]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	P 1 覆土中	5%
205	須恵器	蓋	-	(1.5)	-	長石・石英	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	25%

第 32 号竪穴建物跡（第 61～63 図）

位置 調査区西部の B 2a3 区、標高 27m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南西コーナー部が調査区域外へ延びているが、長軸 3.70m、短軸 3.56m の方形で、主軸方向は N-7°-W である。壁は高さ 36～45cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 100cm で、燃焼部幅は 48cm である。袖部は地山を掘り残して基部とし、第 11～16 層を積み上げて構築されている。両袖の先端には、凝灰岩の切石が使用され、焚口部の補強を意図したものと考えられる。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面の赤変及び硬化とも不鮮明である。煙道部は、壁外へ 30cm 掘り込み、第 17・18 層を充填して構築し、火床部から奥壁で段を有しながら、外傾している。火床部の煙道寄りには、支脚（DP14）が据え付けられている。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、凝灰岩微量	11 暗褐色	凝灰岩・ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	12 黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	13 暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量
4 灰褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	14 灰黄褐色	ロームブロック少量
5 黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	15 褐色	ロームブロック少量
6 にいり褐色	焼土ブロック少量	16 灰オリーブ色	粘土粒子中量、ロームブロック少量
7 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
8 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	18 灰褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
9 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量		
10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量		

ピット P 1 は深さ 16cm で、南壁側の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
-------	-----------------------

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、径 70cm の円形で、深さは 25cm である。底面は皿状で、壁は外傾している。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
-------	-------------------------

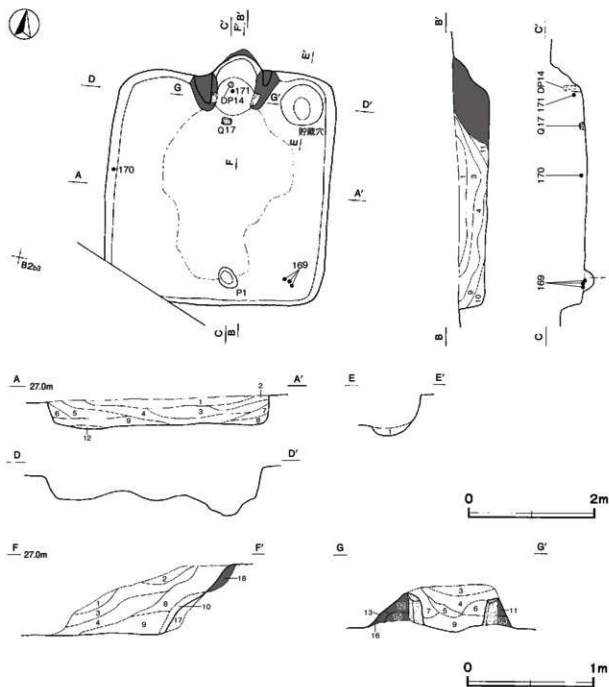
覆土 12 層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

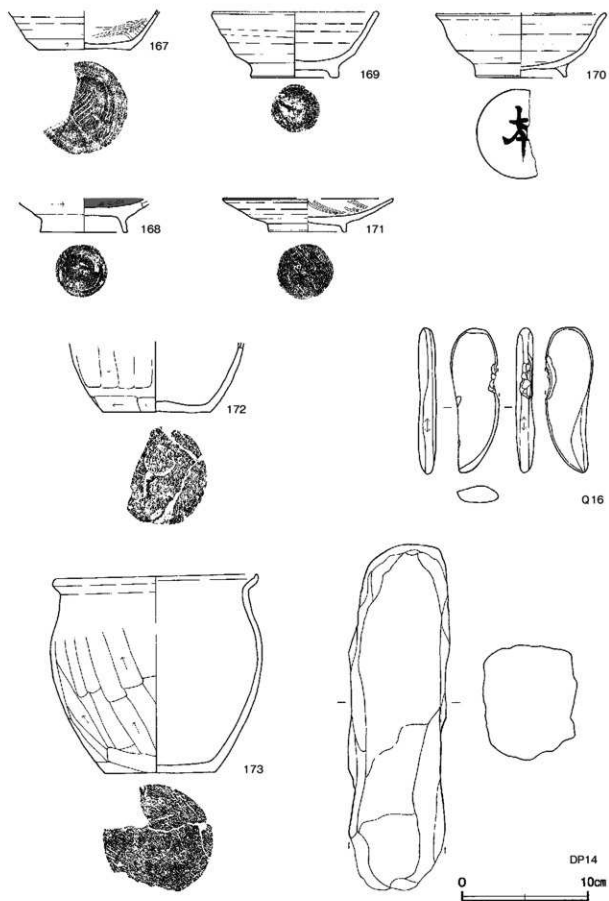
1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック微量	8 灰褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	9 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・凝灰岩・焼土粒子少量	10 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
5 暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量	11 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量
6 暗褐色	ローム粒子中量	12 灰褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片 210 点 (坏 39, 高台付坏 2, 蓋 2, 高台付皿 1, 甕 164, 小形甕 2), 須恵器片 52 点 (坏 37, 高台付坏 3, 蓋 2, 盤 2, 高盤 1, 甕 7), 土製品 1 点 (支脚), 粘土塊 5 点 (30.75 g), 石器 2 点 (紙石), 礫 1 点 (瑪瑙), 鉄滓 1 点 (12.88 g) が, 全域の覆土中層から下層にかけて出土している。169 は南東コーナー部, 170 は西壁際, それぞれ覆土下層から出土していることから, 埋め戻す過程で廃棄されたものである。

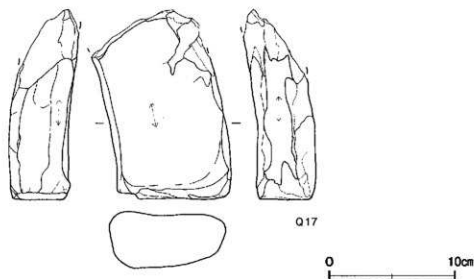
所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。



第 61 図 第 32 号竪穴建物跡実測図



第 62 図 第 32 号堅穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第 63 図 第 32 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 32 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 62・63 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
167	土師器	環	-	(3.1)	7.4	長石・石英	橙	普通	体部下端回転へう張り 内面へう磨き 底部糸切り長へう張り	甕塚土中	50%
168	土師器	高台付環	-	(2.7)	[7.0]	長石・石英	橙	普通	体部下端回転へう張り 内面へう磨き 底部回転へう張り後高台貼付	甕土上層	10%
169	須恵器	高台付環	130	5.3	7.0	長石・石英・ 野灰物質	灰白	普通	体部下端ナデ 底部高台貼付後ナデ	甕土下層	90% PL 8
170	須恵器	高台付環	[13.4]	5.1	[7.0]	長石・石英	灰白	普通	体部下端へう張り 底部回転へう張り後高台貼付 磨き「本。」	甕土下層	40% PL 7
171	土師器	高台付環	[13.4]	2.7	4.2	長石・石英	橙	普通	体部内面へう磨き 底部一方向のへう張り後高台貼付	甕塚土下層	60%
172	土師器	小形壺	-	(5.6)	[8.6]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面碗位のへう張り 下端横位のへう張り 内面ナデ 底部摩耗	甕塚土中	10%
173	土師器	小形壺	160	15.8	8.7	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位のへう張り 内面ナデ	甕塚土中	60% PL 9

番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP14	支脚	(27.5)	8.1	9.1	(1121.9)	長石・石英	にぶい橙	断面長方形 欠損 へうナデ	火床前	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 16	砥石	11.5	3.8	1.4	(87.4)	粘板岩	砥面2面 磨打痕	甕土中	
Q 17	砥石	(15.0)	(11.2)	4.5	(1057.6)	砂岩	砥面3面	甕土下層	

第 33 号竪穴建物跡 (第 64 図)

位置 調査区西部の B 2 c5 区、標高 27m ほどの平坦な台地上に位置している。

確認状況 竈の煙道部のみを確認した。

重複関係 第 4 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 竈の煙道部のみを確認で、主軸方向は N - 24° - E と推定できる。

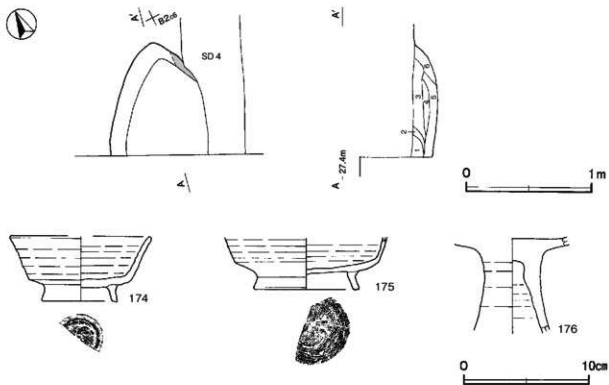
竈 南部の大半が調査区域外へ延びているため、規模は焚口部から煙道部まで 90cm、燃焼部幅 62cm しか確認できなかった。煙道部は、火床部から外傾していると推定できる。

覆土层解説

- | | | | |
|---------|-----------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 赤褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 にいみ褐色 | 焼土ブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 須恵器片3点（高台付坏2、高盤1）が、覆覆土中から出土している。土器は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第64図 第33号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第33号竪穴建物跡出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
174	須恵器	高台付坏	[1.0]	5.1	[6.0]	長石・石英	灰	普通 体部下端ナデ 底部回転ヘタ割り後高台貼付	覆土中	50%
175	須恵器	高台付坏	-	(4.2)	(8.4)	長石・石英	灰	普通 体部下端ナデ 底部回転ヘタ割り後高台貼付 ヘタ記号「二」	覆土上層	30%
176	須恵器	高盤	-	(7.6)	-	長石・石英・ 雲母・黒色粒子	褐灰	普通 脚部ロクロナデ	覆土上層	30%

第34号竪穴建物跡（第65図）

位置 調査区西部のA 2g4区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号掘立柱建物、第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西軸は3.96mで、南北軸は2.80mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-2°-Eと推定できる。壁は高さ33~44cmで、外傾している。

床 平坦で、西部を除いて踏み固められている。

ピット P1は深さ32cmで、南壁側の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

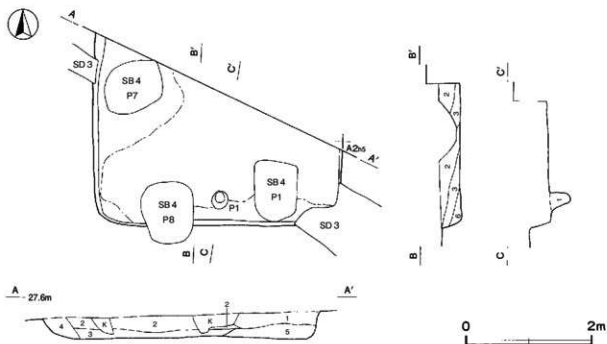
覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|---------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 3 灰褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片6点(坏1, 甕5), 須恵器片1点(甕)が、全域の覆土中から出土している。土器は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器から8世紀代と考えられる。



第65図 第34号竪穴建物跡実測図

第35号竪穴建物跡 (第66図)

位置 調査区中央部のB3f5区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

確認状況 壁及び竈は削平を受けており、床面のみを確認した。

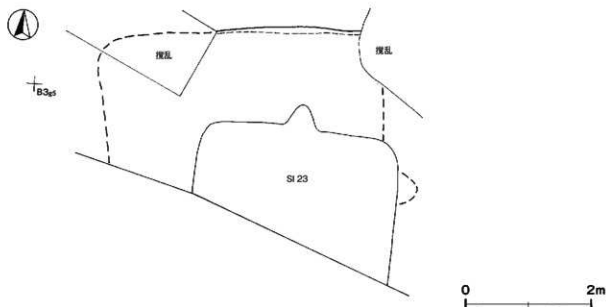
重複関係 第23号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸は4.45mで、南北軸は3.80mしか確認できなかった。

平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-85°-Eと推定できる。

床 平坦である。硬化面は確認できなかった。

所見 時期は、本跡の規模と形状及び第23号竪穴建物跡との重複関係から、8世紀代と考えられる。



第66図 第35号竪穴建物跡実測図

第36号竪穴建物跡 (第67図)

位置 調査区東部のB46区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外へ延び、西部が攪乱を受けているため、南北軸は3.22mで、東西軸は2.70mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-13°-Eである。壁は高さ20cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。南壁下には幅6cm、深さ6cmの壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで68cmで、燃焼部幅は40cmである。袖部は粘土粒子を含む暗褐色土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は、壁外へ34cm掘り込み、火床部から外傾している。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック微量 | | |

ピット P1は深さ22cmで、南壁側の中央部に位置していると推定できることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、長径58cm、短径42cmの楕円形で、深さは12cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

覆土 5層に分层できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

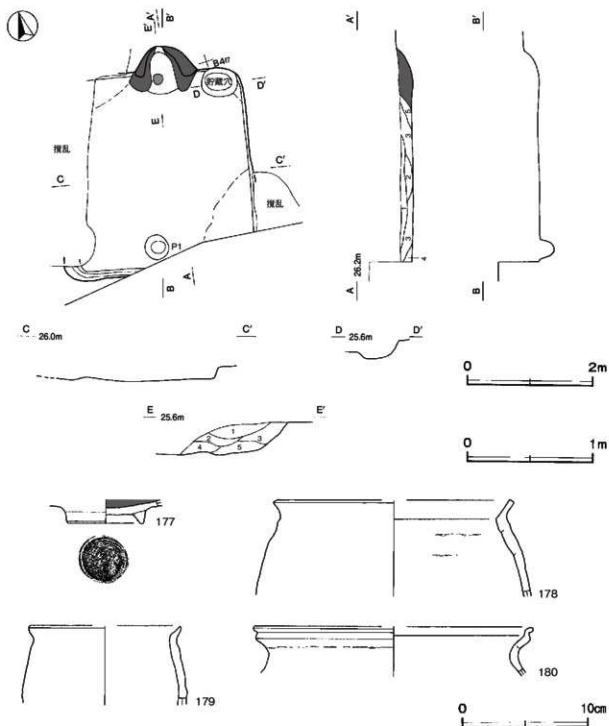
土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|--------|--------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 極暗褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片23点(坏13、高台付坏1、高台付皿1、甕8)、須恵器片57点(坏3、高台付坏2、蓋2、甕50)、鉄滓1点(6.55g)が、覆土中から出土している。178は竈右袖部の構築土中から出土していることから、

袖部の補強を意図したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第67図 第36号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第36号竪穴建物跡出土遺物観察表（第67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
177	土師器	高台付皿	-	(1.8)	5.9	長石・石英	にぶい橙	普通	内面へラ磨き 底部高台貼付後ナデ	竪土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
178	土師器	甕	184	(7.7)	-	長石・石英・ 赤色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 内面輪襷模	体部外表面位のナテ	甕構築土中	5%
180	土師器	甕	219	(3.9)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ		甕構築土中	5%
179	土師器	小形甕	120	(6.3)	-	長石・石英・雲母	いぶくろ	普通	口縁部外・内面横ナテ	体部外・内面磨耗	甕構築土中	5%

表2 奈良・平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形状	規模		壁高 (cm)	床面	壁塗	内部施設						瓦土	主な出土遺物	時期	備考	
				長軸×短軸 (m)	面積 (㎡)				土柱	土口	ヒヤ	竪穴	石	土					瓦
1	B 5g2	N-20'-E	方	3.0 × 3.26	24-35	平壇	-	-	-	-	-	-	-	-	人為	土師器 須恵器 石器	9世紀中葉		
2	B 5g1	N-18'-E	方	4.58 × 1.96	18-20	平壇	一部	1	1	2	-	-	-	-	人為	土師器 須恵器 土製品	9世紀中葉		
3	B 5h3	N-22'-E	長方形	3.54 × 3.00	30-40	平壇	凹凹	-	1	-	北壁	1	人為	土師器 須恵器 土製品 石器 鉄製品	9世紀前半	SI 4 → 本跡			
4	B 5h2	N-28'-W	方	3.52 × 5.42	18	平壇	凹凹	4	-	-	北西壁	-	人為	土師器 須恵器	8世紀代	本跡 → SI 3			
5	B 4j6	N-11'-E	方	3.97 × 2.35	35	平壇	一部	-	-	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 鉄製品	9世紀中葉				
6	B 4h5	N-8'-E	方	4.05 × 4.27	5-15	平壇	一部	2	1	3	-	-	人為	土師器 須恵器	8世紀中葉				
7	C 5a2	N-15'-E	方	4.00 × 1.40	8-80	平壇	-	2	-	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 石器 鉄製品	8世紀前半	本跡 → SI 8			
8	C 5a3	N-8'-E	方	3.85 × 3.75	24-38	平壇	全周	-	1	-	北壁	1	人為	土師器 須恵器 石器	9世紀中葉	SI 7・9・15 → 本跡			
9	C 5a1	N-12'-E	方	4.68 × 3.70	38-54	平壇	一部	-	-	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 鉄製品 青銅製品	9世紀前半	本跡 → SI 8・21			
10	B 4i6	N-73'-W	長方形	3.98 × 3.25	10-27	平壇	全周	-	1	-	西壁 少1	-	人為	土師器 須恵器 鉄製品	9世紀前半	SI11 → 本跡			
11	B 4j9	N-43'-E	方	3.71 × 3.68	8-25	平壇	一部	-	1	1	-	-	人為	土師器 須恵器 石器	8世紀中葉	本跡 → SI05K 5			
12	B 5j5	N-30'-W	方	4.89 × 4.85	30-50	平壇	一部	4	1	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 土製品 石器	9世紀前半	本跡 → SI13SK 2			
13	B 5j1	N-6'-E	方	3.97 × 3.70	35-53	平壇	凹凹	-	1	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 土製品 石器	9世紀前半	SI12 → 本跡			
14	C 4a0	N-20'-E	方	3.78 × 2.90	48-55	平壇	一部	-	-	-	北壁	1	人為	土師器 須恵器 石器	9世紀前半				
15	B 5j2	N-20'-E	方	3.07 × 4.20	30	平壇	凹凹	2	1	5	北壁	1	人為	土師器 須恵器 土製品 石器	9世紀前半	本跡 → SI 8 SK 6 SD 1 → SK13			
16	B 4j9	N-16'-E	方	3.22 × 3.20	20-36	平壇	-	-	-	-	北壁	-	自然	土師器 須恵器 石器 鉄製品	9世紀前半	SI17・18 → 本跡 → SK13			
17	B 4j9	N-71'-W	方	2.88 × 1.80	36	平壇	-	-	-	-	西壁	-	人為	土師器 須恵器 土製品	8世紀後半	本跡 → SI16・18			
18	B 4j9	N-75'-E	長方形	3.98 × 3.45	32	平壇	-	-	-	-	東壁	-	人為	土師器 須恵器 石器 鉄製品	9世紀前半	SI17 → 本跡 → SI16SK13			
19	C 5a5	N-7'-E	長方形	3.50 × 3.10	46	平壇	-	-	1	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 土製品	8世紀後半	本跡 → SD 1			
20	B 4i1	N-2'-E	方	3.14 × 2.92	50-54	平壇	-	-	1	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 土製品 石器	9世紀前半				
21	C 5b4	N-27'-E	方	1.02 × 0.98	36-44	平壇	-	-	1	-	-	-	人為	土師器	平安時代	SI 9 → 本跡			
22	B 3f1	N-5'-E	方	3.85 × 3.77	7-17	平壇	一部	-	-	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器	9世紀前半				
23	B 3g5	N-3'-E	方	3.21 × 2.30	3-8	平壇	-	-	-	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 土製品	9世紀前半	SE35 → 本跡			
24	B 3i5	N-35'-W	方	3.60 × 3.10	2-6	平壇	-	4	1	-	北西壁	-	-	土師器 須恵器	8世紀代				
25	B 3i6	N-3'-E	方	3.20 × 1.40	23-29	平壇	一部	-	-	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 土製品	9世紀中葉				
26	B 2c0	N-3'-E	方	3.78 × 3.66	38-47	平壇	-	-	1	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 石器	8世紀中葉	SI 1 → 本跡			
27	A 2j8	N-4'-E	方	3.00 × 3.15	54-62	平壇	凹凹	4	-	-	北壁	-	人為	土師器 須恵器 土製品 鉄製品	9世紀前半	SI28 → 本跡 → SD 3・4			
28	A 2i8	-	方	3.00 × 3.80	54	平壇	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土師器 須恵器	9世紀前半	本跡 → SI27SD 4	
29	A 2j7	N-10'-E	方	4.00 × 1.70	45-47	平壇	-	1	-	1	-	-	人為	土師器 須恵器	8世紀中葉	本跡 → SD 3			
30	A 2j1	N-1'-W	方	4.77 × 4.60	45-60	平壇	凹凹	4	1	2	北壁	-	人為	土師器 須恵器 石製品	8世紀中葉				
31	B 3i1	N-88'-E	方	3.05 × 2.52	30-38	平壇	-	1	-	-	-	-	人為	土師器 須恵器	8世紀代				
32	B 2a3	N-7'-W	方	3.70 × 3.56	36-45	平壇	-	-	1	-	北壁	1	人為	土師器 須恵器 土製品 石器	9世紀中葉				
33	B 2c5	N-24'-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	須恵器	9世紀前半	本跡 → SD 4	
34	A 2i4	N-2'-E	方	3.96 × 2.80	33-44	平壇	-	-	1	-	-	-	人為	土師器 須恵器	8世紀代	本跡 → SI 4 SD 3			
35	B 3i5	N-85'-E	方	4.45 × 3.80	-	平壇	-	-	-	-	東壁	-	-	-	-	-	8世紀代	本跡 → SI23	
36	B 4i6	N-13'-E	方	3.22 × 2.70	20	平壇	一部	-	1	-	北壁	1	人為	土師器 須恵器	9世紀中葉				

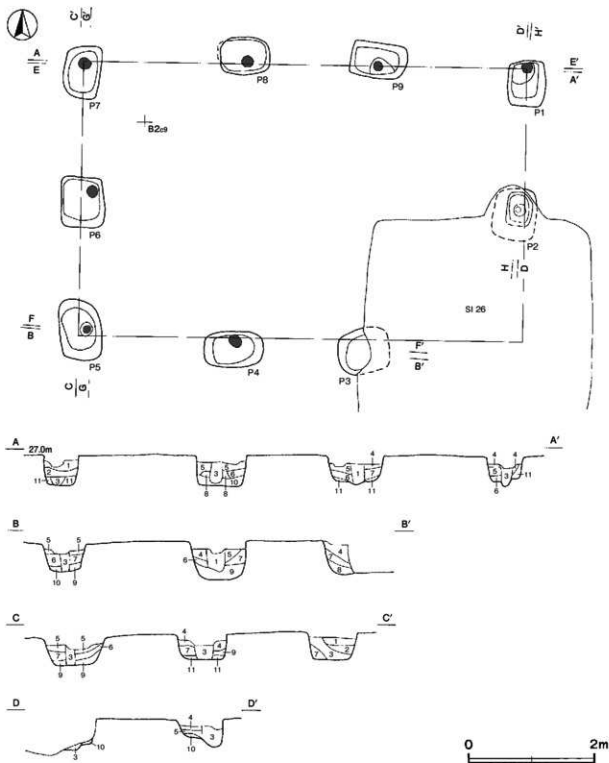
(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第68・69図)

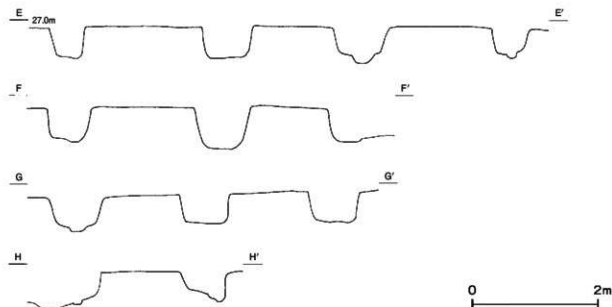
位置 調査区西部のB2c9区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第26号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と構造 南東コーナー部の柱穴が確認できなかったが、他の柱穴の配置から桁行3間、梁行2間の竪柱



第68図 第1号掘立柱建物跡実測図(1)



第69図 第1号掘立柱建物跡実測図(2)

建物跡と推定できる。桁行方向がN-87°-Wの東西棟である。規模は、桁行7.0m、梁行4.3mで、面積は30.10㎡である。柱間寸法は、桁行が西妻から2.6m(8.7尺)、2.1m(7尺)、2.3m(7.7尺)、梁行が北平から2.0m(6.7尺)、2.3m(7.7尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9か所。平面形は長方形で、長軸52～94cm、短軸38～66cmである。深さは46～67cmである。第1～3層は柱抜き取り後の覆土、第4～11層は掘方への埋土である。P2・P3を除いた柱穴の底面で、柱の当たりが確認できた。

土層解説(各柱穴共通)

- | | | | |
|--------|-----------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 8 灰褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | 10 にぶい褐色 | ローム粒子多量 |
| 5 黒暗褐色 | ローム粒子微量 | 11 灰褐色 | ローム粒子中量 |
| 6 黒暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片6点(坏1、甕5)のほか、縄文土器片1点(深鉢)が、P2・P4・P6・P7の覆土中から出土している。土器は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器及び第26号竪穴建物跡との重複関係から、8世紀中葉以前に廃絶したと考えられる。

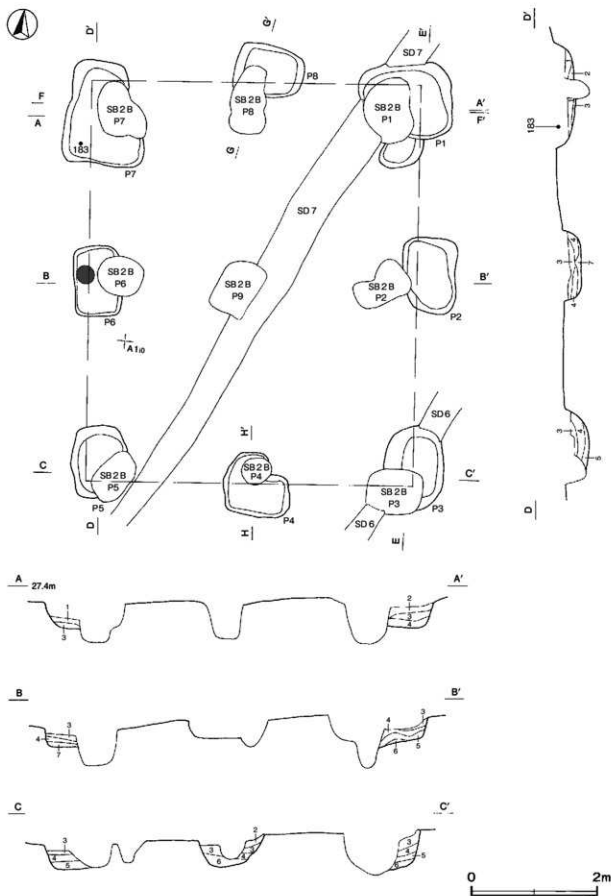
第2A号掘立柱建物跡(第70・71図)

位置 調査区西部のA1h0区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

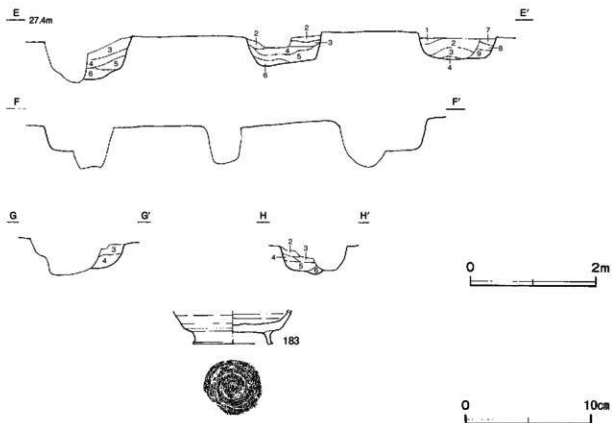
重複関係 第2B号掘立柱建物、第6・7号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行、梁行ともに2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-5°-Wの南北棟である。規模は、桁行6.4m、梁行5.2mで、面積は33.28㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から3.2m(10.7尺)、梁行が西平から2.6m(8.7尺)の等間隔で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は不整楕円形または長方形で、長径(軸)90～100cm、短径(軸)60～100cmである。深さは32～66cmである。第1～9層は掘方への埋土である。P6の底面で、柱の当たりが確認できた。



第70图 第2A号掘立柱建物跡実測图



第71図 第2A号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 6 黄褐色 ロームブロック多量 |
| 2 にふい黄褐色 ロームブロック少量 | 7 暗褐色 黒褐色ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子微量 | 8 にふい黄褐色 ロームブロック中量 |
| 4 褐色 ロームブロック中量 | 9 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 5 褐灰色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片2点（甕）、須恵器片2点（高台付坏、蓋）が、P4・P5・P7の覆土中から出土している。183はP7の埋土上層から出土していることから、埋土に混入したものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉以降に建てられたと考えられる。重複関係から判断して、本跡から第2B号掘立柱建物跡へ建て替えられている。

第2A号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第71図）

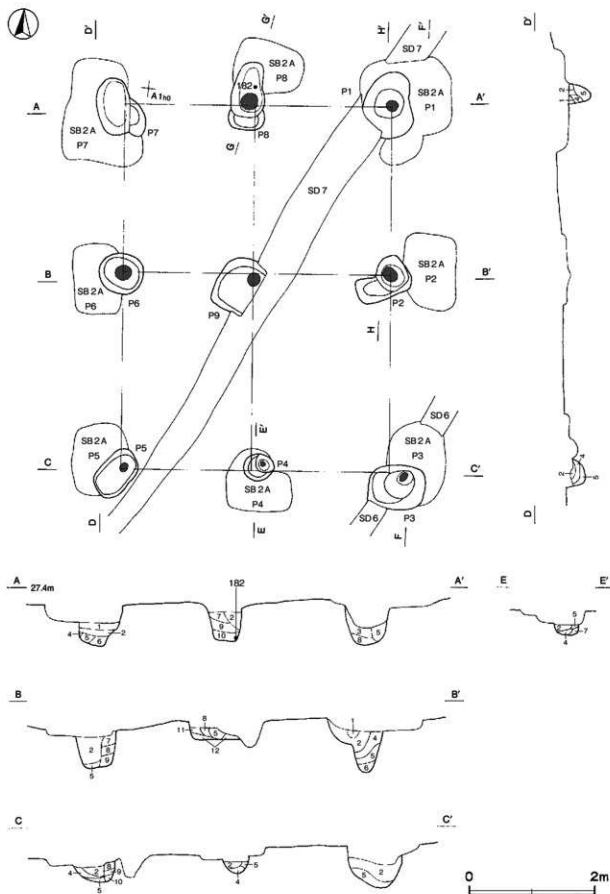
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
183	須恵器	高台付坏	—	(27)	64	長石・石英・斜状物質	灰	普通	体部下端ナデ	P7埋土上層	30%

第2B号掘立柱建物跡（第72・73図）

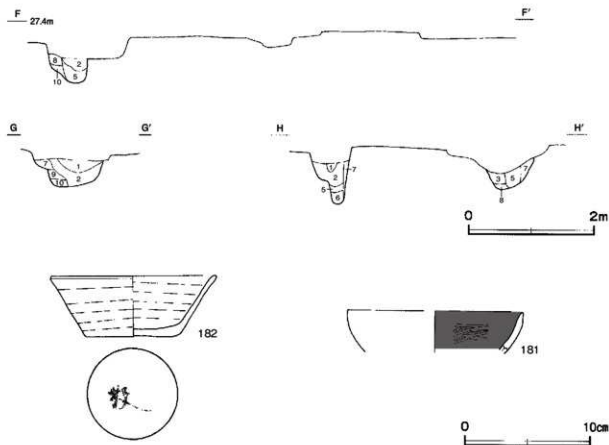
位置 調査区西部のA1h0区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2A号掘立柱建物跡を掘り込み、第6・7号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行、梁行ともに2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-5°-Wの南北棟である。規模は、桁行



第 72 图 第 2 B 号掘立柱建物迹实测图



第73図 第2B号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

5.8 m、梁行4.3 mで、面積は24.94㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から27 m（9尺）、3.1 m（10.1尺）、梁行が西平から2.1 m（7尺）、2.2 m（7.3尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9か所。平面形は不整楕円形または長方形で、長径（軸）48～100cm、短径（軸）40～80cmである。深さは38～90cmである。第1～6層は柱抜き取り後の覆土、第7～12層は掘方への埋土である。P7を除いた柱穴の底面で、柱の当たりが確認できた。

土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| 1 じい漬褐色 ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量 | 7 灰褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 8 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 9 にい漬褐色 ロームブロック中量 |
| 4 褐色 ロームブロック中量、暗褐色ブロック少量 | 10 黒褐色 粘土ブロック中量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック微量 | 11 褐色 ロームブロック中量 |
| 6 灰黄褐色 ロームブロック少量 | 12 褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片36点（坏5、甕31）、須恵器片18点（坏7、高台付坏5、蓋2、甕4）が、柱穴の覆土中から出土している。182はP8の覆土下層から逆位で出土していることから、柱抜き取り後に廃棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉には廃絶されたと考えられる。建て替え前は側柱建物であるのに対し、本跡はほぼ同規模ながら、総柱建物へと構造を変えている。

第2 B号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第73図)

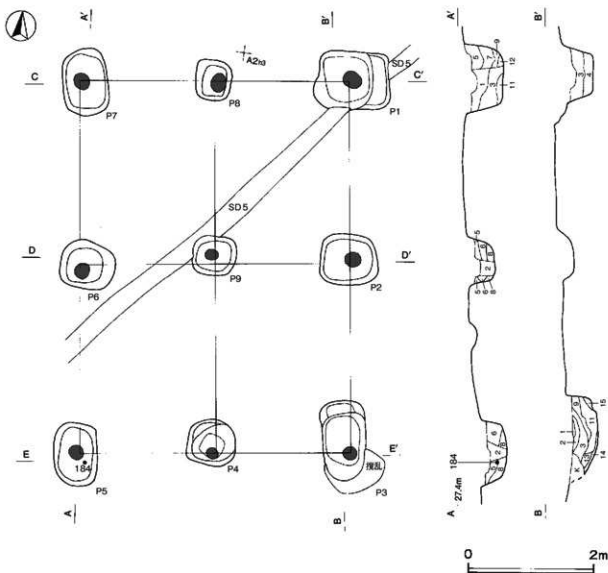
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
181	土師器	坏	[140]	(3.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ナデ 内面へう磨き	P 2 覆土中	5%
182	須恵器	坏	130	4.8	7.3	長石・石英・針状物質	灰黄	普通	底部ナデ 底部に墨書「牧」	P 8 覆土下層	70% PL 7 木葉下遺層

第3号掘立柱建物跡 (第74・75図)

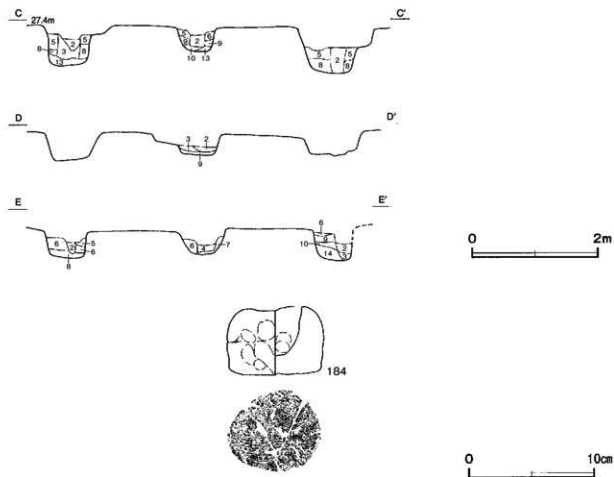
位置 調査区西部のA 2h2区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第5号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行、梁行ともに2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-9°-Wの南北棟である。規模は、桁行5.9m、梁行4.2mで、面積は24.78㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.9m(9.7尺)、3m(10尺)、梁



第74図 第3号掘立柱建物跡実測図



第75図 第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

行が21m（7尺）の等間隔で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9か所。平面形は方形または長方形で、長軸66～120cm、短軸56～88cmである。深さは30～60cmである。第1～4層は柱抜き取り後の覆土、第5～15層は掘方への埋土である。各柱穴の底面で、柱の当たりが確認できた。

土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|---------|------------------|---------|----------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 10 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 灰褐色 | ロームブロック少量 | 12 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量 | 13 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 灰褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 14 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 7 に近い褐色 | ロームブロック少量 | 15 極暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 8 灰褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土器器片19点（坏4、甕14、手捏1）、須恵器片8点（坏2、高台付坏2、蓋2、甕2）のほか、縄文土器片1点（深鉢）が、柱穴の覆土中から出土している。184はP5の埋土とP7の覆土中から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、近接する第2B号掘立柱建物跡と規模と構造、桁行方向がほぼ同じであることから同時期に機能していたと考えられ、9世紀前葉には廃絶したと考えられる。

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
184	土師器	手拭土器	4.7	3.4	7.2	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	体部外面指跡圧痕 内面ナデ 底部ナデ	F5層土 P7層土中	90%

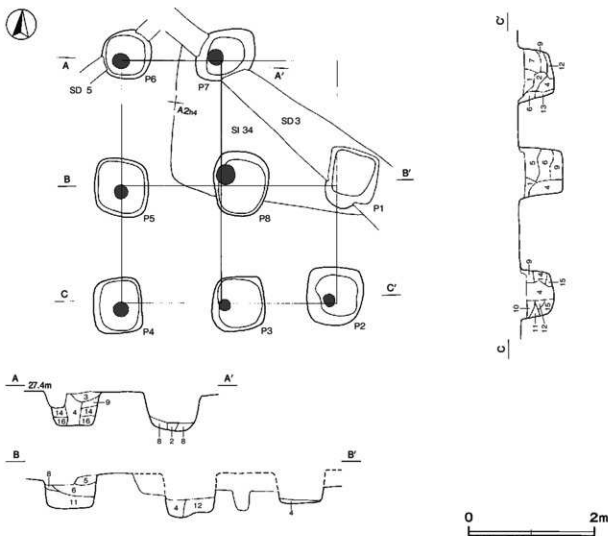
第4号掘立柱建物跡 (第76図)

位置 調査区西部のA2g3区、標高27mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第34号竪穴建物跡を掘り込み、第3・5号溝に掘り込まれている。

規模と構造 北東部が調査区域外に延びているが、柱穴の配置から桁行、梁行ともに2間の総柱建物跡と推定できる。桁行方向がN-8°-Wの南北棟である。規模は、桁行3.9m、梁行3.4mで、面積は13.26㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.1m(7尺)、1.8m(6尺)、梁行が南側の西平から1.6m(5.7尺)、1.8m(6尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は方形または長方形で、長軸80~100cm、短軸72~90cmである。深さは52~90cmである。第1~4層は柱抜き取り後の覆土、第5~16層は掘方への埋土である。P1を除いた柱穴の底面で、柱の当



第76図 第4号掘立柱建物跡実測図

たりが確認できた。

土層解説 (各柱穴共通)

1 暗褐色	ローム粒子少量	9 灰褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	10 褐色	ローム粒子少量
3 褐色	ロームブロック微量	11 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック微量	12 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量
5 にぶい褐色	ロームブロック少量	13 にぶい褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 灰褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	14 灰褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
7 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	15 褐色	ロームブロック少量
8 暗褐色	ロームブロック少量	16 灰黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片6点(甕5, 手捏1), 須恵器片1点(蓋)が, 柱穴の覆土中から出土している。土器は細片のため, 図示できなかった。

所見 時期は, 出土土器及び第34号堅穴建物跡との重複関係, 近接する第3号掘立柱建物跡とは同時期に並び建てるのが困難であることから, 8世紀後葉には廃絶したと考えられる。

表3 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	前行方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法			柱穴	主な出土遺物	時期	備考	
						桁間(m)	梁間(m)	構造					
1	B 2e9	N-87°-W	3×2	7.0×4.3	30.10	2.1~2.6	2.0~2.3	欄柱	9 長方形	46~67	土師器	8世紀中葉	本跡→SD26
2A	A 1b0	N-5°-W	2×2	6.4×5.2	33.28	3.2	2.6	欄柱	8 不整形円形長方形	32~66	土師器 須恵器	8世紀後葉	本跡→SD 2 HSD 6・7 SD 2A→本跡 →SD 6・7
2B	A 1b0	N-5°-W	2×2	5.8×4.3	24.94	2.7~3.1	2.1~2.2	総柱	9 不整形円形長方形	38~90	土師器 須恵器	9世紀前半	SD 2A→本跡 →SD 6・7
3	A 2d2	N-9°-W	2×2	5.9×4.2	24.78	2.9~3.0	2.1	総柱	9 長方形	30~60	土師器 須恵器	9世紀前半	本跡→SD 5
4	A 2d5	N-8°-W	2×2	3.9×3.4	13.26	1.8~2.1	1.6~1.8	総柱	8 方形長方形	52~90	土師器 須恵器	8世紀後半	SDH→本跡 →SD 3・5

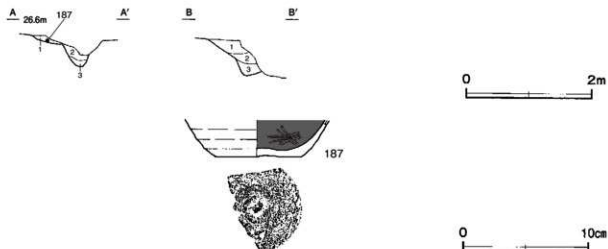
(3) 溝跡

第2A号溝跡 (第77図・付図)

位置 調査区中央部のB 4e4~B 4h3区, 標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2B号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南及び北端部が調査区域外へ延びているため, 長さは12.40mしか確認できなかった。溝はB 4



第77図 第2A号溝跡・出土遺物実測図

g3区から北方向(N-10°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅72~88cm、下幅10~32cmで、深さは55cmである。断面はU字状で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 3層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | |

遺物出土状況 土師器片12点(坏2, 甕10)、須恵器片10点(坏8, 蓋1, 甕1)が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器及び第2B号溝跡との重複関係から、9世紀以降には廃絶したと考えられる。性格は不明である。

第2A号溝跡出土遺物観察表(第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
187	土師器	坏	-	(29)	(6.8)	長石・石英	にぶい橙	普通	内面へラ磨き 底部ナデ	覆土中層	30%

第2B号溝跡(第78図・付図)

位置 調査区中央部のB4e4~B4h3区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

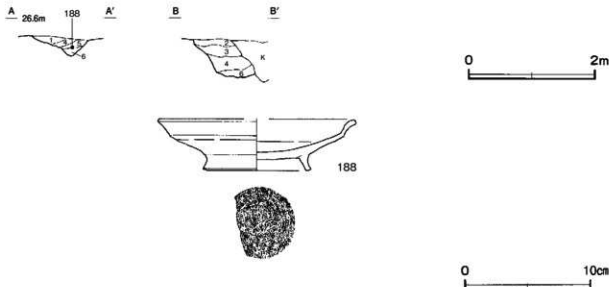
重複関係 第2A号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南及び北端部が調査区域外へ延びているため、長さは12.10mしか確認できなかった。溝はB4g3区から北方向(N-10°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅40~122cm、下幅8~20cmで、深さは57cmである。断面は逆台形で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 黒暗褐色 ロームブロック少量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒暗褐色 ローム粒子少量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒暗褐色 ロームブロック微量 | 6 暗褐色 ロームブロック多量 |



第78図 第2B号溝跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 36 点 (坏 8、甕 28)、須恵器片 31 点 (坏 13、高台付坏 3、蓋 7、甕 8) が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀以降には廃絶したと考えられ、土層から第 2 A 号溝を埋め戻してから、本溝を掘り込んだと考えられる。性格は不明である。

第 2 B 号溝跡出土遺物観察表 (第 78 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
188	須恵器	甕	[154]	4.1	[86]	長石・石英	黄灰	普通	高台付後ナテ 底部にヘラ記号「×」	覆土中層	40% PL 8

表 4 奈良・平安時代の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規 模			断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考	
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)						深さ (m)
2 A	B 4 e1 ~ B 4 h 3	N - 10° - E	直線状	(12.40)	0.72 ~ 0.88	0.10 ~ 0.32	55	U 字状	縦斜	人為	土師器 須恵器	本跡 → SD 2 B
2 B	B 4 e1 ~ B 4 h 3	N - 10° - E	直線状	(12.10)	0.40 ~ 1.22	0.08 ~ 0.20	57	浅台形	縦斜	人為	土師器 須恵器	SD 2 A → 本跡

(4) 土坑

第 14 号土坑 (第 79 ~ 81 図)

位置 調査区東部の C 5 a9 区、標高 22m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外へ延びているため、短径は 1.60 m で、長径は 1.96 m しかなかった。平面形は楕円形で、長径方向は N - 90° - E と推定できる。底面は、ほぼ平坦である。壁は外傾している。

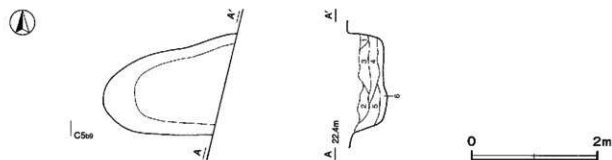
覆土 6 層に分層できる。不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

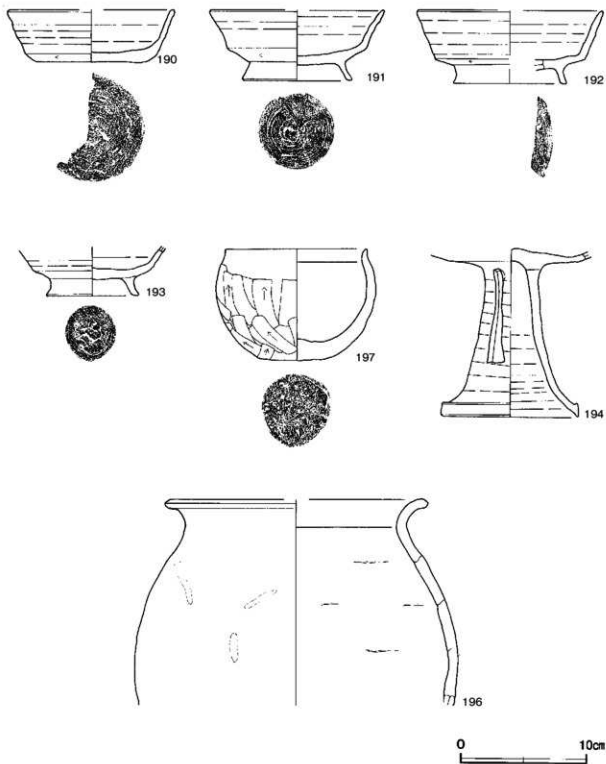
- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1 暗褐色 鹿沼バミスブロック中量、礫少量 | 4 黒褐色 鹿沼バミスブロック微量 |
| 2 黒色 ロームブロック微量 | 5 黒色 鹿沼バミスブロック微量 |
| 3 黒褐色 礫少量、ローム粒子微量 | 6 黒色 鹿沼バミスブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片 28 点 (坏 3、蓋 1、甕 23、小形甕 1)、須恵器片 6 点 (坏 2、高台付坏 3、高盤 1、長頸壺 1) のほか、陶器片 1 点 (植木鉢) が、覆土中から出土している。

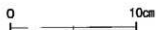
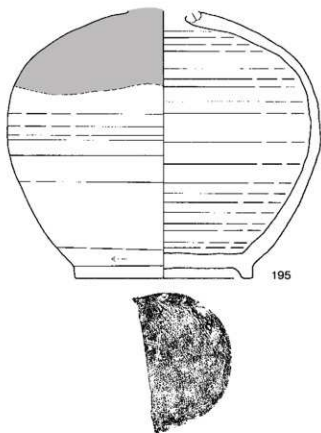
所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第 79 図 第 14 号土坑実測図



第 80 图 第 14 号土坑出土遗物实测图 (1)



第 81 図 第 14 号土坑出土遺物実測図 (2)

第 14 号土坑出土遺物観察表 (第 80・81 図)

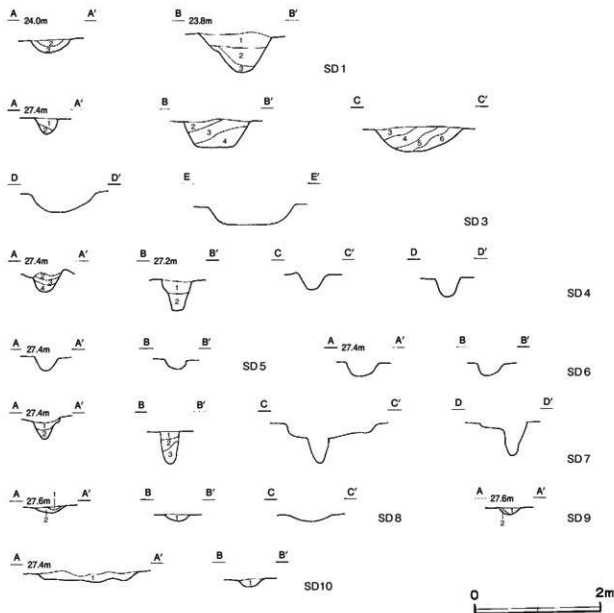
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
190	瓶蓋器	平	[13.0]	4.2	[8.6]	長石・石英	黄灰	普通	体部下端回転へう割り 底部回転へう割り	覆土中	30%
191	瓶蓋器	高台付平	13.8	5.6	8.6	長石・石英・ 針状物質	灰白	普通	体部下端回転へう割り 底部高台貼付後ナテ	覆土中	50%
192	瓶蓋器	高台付平	[14.6]	5.8	[4.5]	長石・石英・ 針状物質	黄灰	普通	体部下端回転へう割り 底部高台貼付後ナテ	覆土中	20%
193	瓶蓋器	高台付平	-	(3.9)	7.3	長石・石英・ 葉片・針状物質	黄灰	普通	体部下端回転ナテ 底部高台貼付後ナテ	覆土中	50%
194	瓶蓋器	高盤	-	(13.3)	10.8	長石・石英	灰黄緑	普通	環脚部外・内面口コロナテ後三方透かし 通かし孔	覆土中	60% PL 9
195	瓶蓋器	長頸密	-	(20.1)	[14.2]	長石・石英・ 黒色粘土・針状物質	黄灰	普通	口縁・肩部欠損 体部外面上部に軸 底部にへう割り(※)	覆土中	40% PL10 木葉下基座
196	土師器	壺	[20.0]	(16.3)	-	長石・石英	にじい色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面へう割り 内面横ナテ	覆土中	20%
197	土師器	小形壺	11.3	8.8	3.6	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面上部縦位のへう割り 下部斜位のへう割り 内面ナテ	覆土中	20% PL 9

2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明らかでない溝跡 9 条、土坑 11 基を確認した。

(1) 溝跡 (第 82 図)

今回の調査で、時期や性格が不明な溝跡を 9 条を確認した。ここでは、土層断面図を掲載し、平面図は遺構全体図に示す。



第 82 図 その他の溝跡実測図

第 1 号溝跡土層解説

- 1 黒暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

第 3 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 5 黒暗褐色 炭化粒子中量・ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

第 4 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒暗褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第 7 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第 8 号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 灰褐色 ロームブロック少量

第 9 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第 10 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

表5 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規 模			断面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)						深さ(cm)
1	B 4d-C 5a5	N-70°-W	直線状	(22.60)	0.41-1.08	0.18-0.40	60	U字状	紙葺	人為	土師器 須恵器 銅器	SH15・19 → 本跡 → SK 6
3	A 2g2-B 3c2	N-61°-W	直線状	(47.60)	0.35-1.24	0.10-0.59	27	U字状	紙葺	人為	土師器 須恵器 陶器	SD2・29・34, SB 4, SD 1 → 本跡 → SD 4
4	B 2a6-B 2c5	N-28°-E	直線状	(17.30)	0.40-0.54	0.12-0.28	44	U字状	紙葺	人為	土師器 須恵器	SD2・28・33SD 3 → 本跡
5	A 2g3-A 212	N-43°-E	直線状	(9.80)	0.24-0.36	0.08-0.18	21	赤巾状	紙葺	人為		SB 3・4 → 本跡 → SD 3
6	A 2d2-A 1f	N-38°-E	直線状	(16.52)	0.24-0.64	0.12-0.36	22	赤巾状	紙葺	人為		SB 2A・2B → 本跡
7	A 2f1-A 1f	N-36°-E	直線状	(16.56)	0.36-0.50	0.10-0.14	48	U字状	外組	人為	縄文土師 土師器	SB 2A・2B → 本跡
8	A 1a6-A 1f7	N-4°-W	直線状	9.88	0.35-0.75	0.16-0.40	10	赤巾状	紙葺	人為		
9	A 1a6-A 1g5	N-4°-W	直線状	13.24	0.22-0.40	0.14-0.22	18	赤巾状	紙葺	人為		
10	A 1e4-A 1g5	N-49°-W	曲線状	(10.40)	0.62-1.32	0.10-0.36	16	赤巾状	紙葺	人為	土師器 須恵器	

(2) 土坑 (第83図)

今回の調査で、時期や性格が不明な土坑を11基を確認した。これらの土坑の規模や形状等について、実測図、土層解説と一覧表を掲載する。

第2号土坑土層解説

- 1 灰 褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 4 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 5 極暗褐色 ロームブロック微量

第3号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量
- 3 黒 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐色 ローム粒子中量
- 5 暗 褐色 ローム粒子多量
- 6 黒 褐色 ロームブロック中量
- 7 黒 褐色 ローム粒子少量

第4号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 ローム粒子中量
- 4 黒 褐色 ロームブロック中量
- 5 極暗褐色 ロームブロック中量

第5号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量

第6号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量

第7号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量
- 3 灰 褐色 ロームブロック少量

第9号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック多量

第10号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第11号土坑土層解説

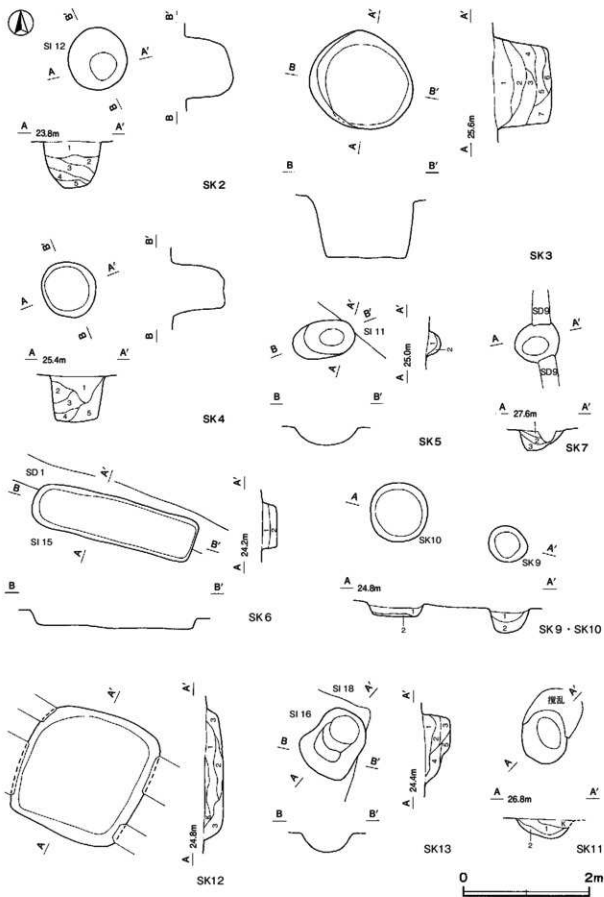
- 1 暗 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第12号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量

第13号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量
- 4 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 5 暗 褐色 ローム粒子多量



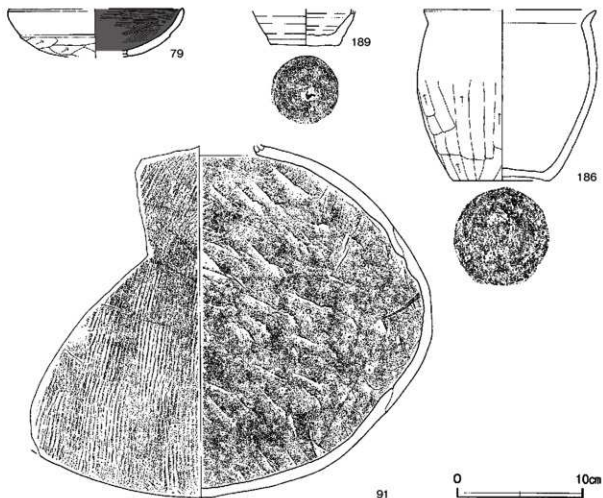
第 83 図 その他の土坑実測図

表6 その他の土坑一覧表

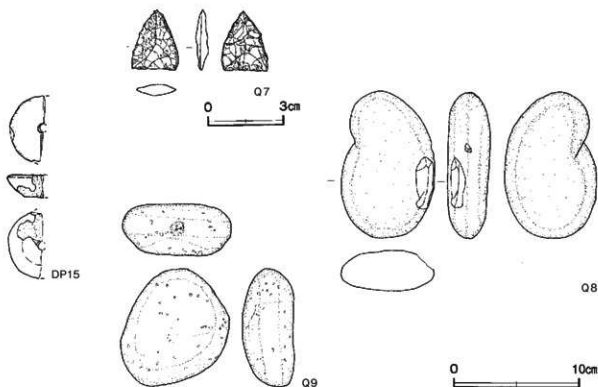
番号	位置	長径方向	平面形	縦 横		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	B 5j5	-	円形	0.99 × 0.95	76	皿状	直立	人為	土師器	SI12 → 本跡
3	B 4g7	N-61°-W	楕円形	1.65 × 1.50	94	平坦	直立	人為	土師器 須恵器 磁器	
4	B 4i6	-	円形	0.91 × 0.83	84	平坦	直立	人為	土師器	
5	B 4i9	N-28°-E	楕円形	0.99 × 0.58	26	皿状	傾斜	人為		SI11 → 本跡
6	B 5j2	N-74°-W	長方形	2.63 × 0.74	22	平坦	外傾	自然	土師器 須恵器	SI15, SD 1 → 本跡
7	A 1e6	N-79°-E	楕円形	0.71 × 0.62	32	皿状	外傾	自然		本跡 → SD 9
9	B 4j0	N-78°-W	楕円形	0.63 × 0.56	37	皿状	外傾	自然		
10	B 4j0	-	円形	0.95 × 0.93	18	平坦	傾斜	人為	須恵器	
11	B 4i1	N-10°-W	楕円形	(0.96) × 0.75	30	皿状	傾斜	自然	土師器 須恵器	
12	B 5g1	N-28°-E	方形	2.06 × 2.02	28	皿状	傾斜	人為	土師器	
13	B 4j9	N-40°-E	楕円形	1.08 × 0.90	42	皿状	傾斜	人為	土師器 須恵器	S56-18 → 本跡

(3) 遺構外出土遺物 (第84・85図)

遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び観察表で掲載する。



第84図 遺構外出土遺物実測図(1)



第 85 図 遺構外出土遺物実測図 (2)

遺構外出土遺物観察表 (第 84・85 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
79	土師器	坏	[140]	(38)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外面積ナデ 外部外面へう割り 内面へう割り	SI2 覆土上層	30% 築円式
91	須恵器	横瓶	-	27.8	-	長石・石英	灰	普通	体部外面積位の平行向き 内面当て具痕 横面内面修整	SI3 覆土下層	50% PL.10
189	須恵器	瓶	-	(29)	5.4	長石・石英	灰	普通	体部外面下部積位のへう割り 内面口クラナデ 底部部へう割り後ナデ	SD 3 覆土中	5%
196	土師器	小形甕	[146]	13.6	7.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面積ナデ 外部外面積位のナデ 体部外面積位のへう割り 内面ナデ	SK3 覆土上層	60% PL.9

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP15	紡錘車	[54]	(1.9)	0.7	(2377)	長石・石英	赤褐	一部欠損 全面研磨	確認面	PL.11

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	鏡	2.4	1.8	0.5	1.66	ホルンフェリス	両面押圧調整調整 平基無平鏡	SI 9 覆土下層	PL.11
Q8	磨石	11.6	7.4	3.5	4269	花崗岩	全面磨り面	SI2 覆土下層	
Q9	磨石	9.4	8.7	4.1	4748	花崗岩	上端部に疤痕状の敲打痕	SI12 覆土中	

第4節 ま と め

1 はじめに

中道南遺跡は、今回の調査で奈良時代から平安時代にかけての集落跡であることが明らかとなった。今回の調査結果に基づいて、遺構と遺物について概観し、まとめたい。

2 出土遺物について

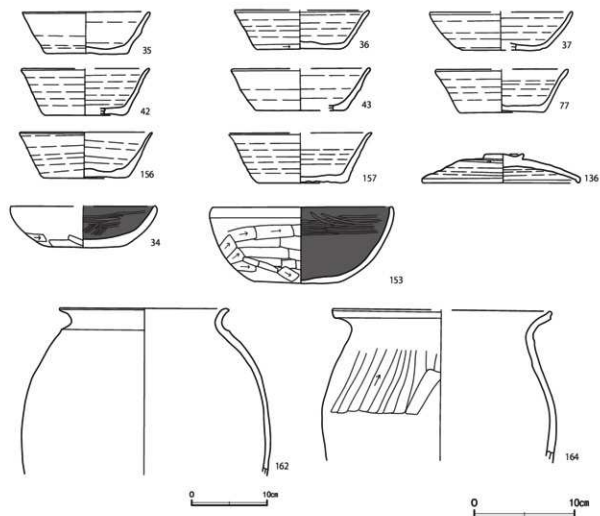
(1) 土器の様相 (第86～89図)

出土土器については、これまでの研究論文や報告書などに掲載された土器編年研究¹⁾を参考とし、県北地域での発掘調査資料を加味しながら、4期に分類した。

第I期 (8世紀中葉) (第86図)

第6・7・11・26・29・30号竪穴建物跡の土器が該当する。

出土遺物は、土師器 (坏・鉢・甕・瓶・手捏)、須恵器 (坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・甕)、石器 (砥石)。



第86図 第I期 (8世紀中葉) の土器

鉄製品（刀子・釘）である。出土土器のうち、土師器片と須恵器片の比率は、6対1となる。そのうち供膳具は、土師器片と須恵器片の比率が5対6で、須恵器片の比率がわずかに高い。

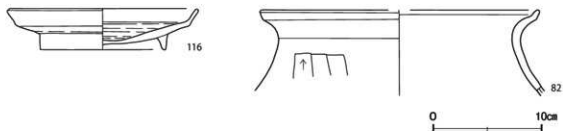
遺構の廃絶時期に伴う出土土器は、須恵器の坏8点（35・37・42・43・77・156・157）、蓋1点（136）、土師器の坏2点（34・153）、甕2点（162・164）である。須恵器の坏1点（36）は、体部外面下端にヘラ削り調整が施されている。他1点（156）は、胎土と調整技法から木葉下窯産のものである。蓋は、ボタン状のつまみが付き、端部に返りは付いていない。土師器の坏は、体部外面にヘラ削り、内面にヘラ磨き調整が施されている。甕1点（164）は、口縁端部をつまみ上げられており、いわゆる「常総型甕」の技法の影響を受けたものと考えられる。他1点（162）は、単純口縁で、体部との境に段を有しているものである。162・164は同じ第30号堅穴建物跡から出土していることから、これらが同時期に共存していたことが確認できる。

第Ⅱ期（8世紀後葉）（第87図）

第12・17・19・28号堅穴建物跡の土器が該当する。

出土遺物は、土師器（坏・高台付坏・甕・手捏）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・甕）、土製品（支脚）、鉄製品（釘）である。出土土器のうち、土師器片と須恵器片の比率は、5対1となる。そのうち供膳具は、土師器片と須恵器片の比率が4対7で、須恵器片の比率が高い。

遺構の廃絶時期に伴う出土土器は、須恵器の盤1点（116）、土師器の甕1点（82）である。甕は、第Ⅰ期と同様に、口縁端部をつまみ上げられており、「常総型甕」技法のものである。



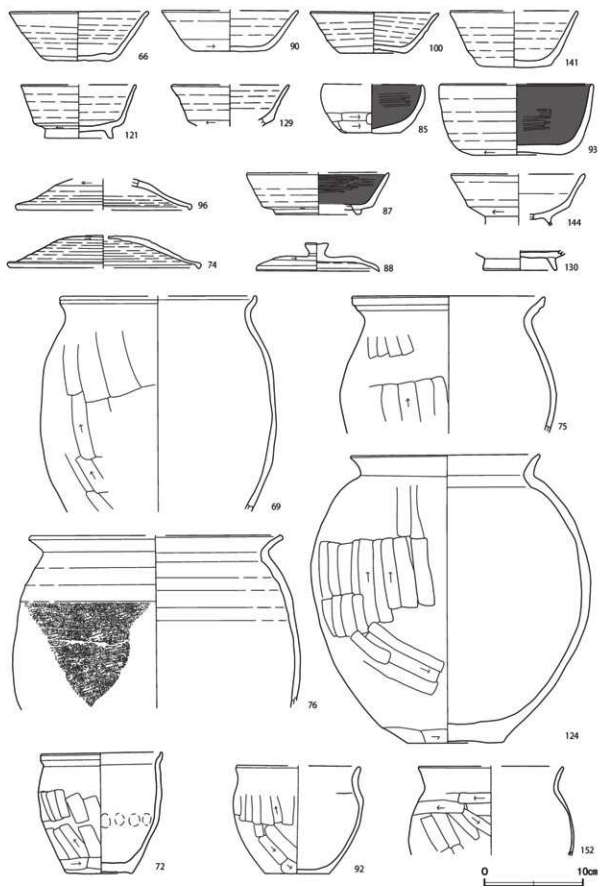
第87図 第Ⅱ期（8世紀後葉）の土器

第Ⅲ期（9世紀前葉）（第88図）

第3・9・10・13～16・18・20・22・23・27・33号堅穴建物跡の土器が該当する。

出土遺物は、土師器（坏・碗・高台付坏・蓋・高台付皿・鉢・甕・小形甕・手捏）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・皿・盤・高盤・短頸壺・甕）、土製品（支脚）、石器（砥石・紡錘車）、鉄製品（刀子・鎌・鎌・火打金）、青銅製品（刀飾金具）である。出土土器のうち、土師器片と須恵器片の比率は、5対1となる。そのうち供膳具は、土師器片と須恵器片の比率が4対5で、須恵器片の比率がわずかに高い。

遺構の廃絶時期に伴う出土土器は、須恵器の坏4点（66・90・100・141）、高台付坏2点（121・129）、蓋2点（74・96）、土師器の坏1点（93）、碗1点（85）、高台付坏3点（87・130・144）、蓋1点（88）、甕4点（69・75・76・124）、小形甕3点（72・92・152）である。須恵器の坏2点（66・141）は、胎土や調整技法から木葉下窯産のものであり、他1点（90）は、胎土や調整技法から新治窯産のものである。高台付坏は、体部下端に段を有している。土師器の高台付坏は、体部外面にロクロナテ、下端に回転ヘラ削り、内面にヘラ磨き調整が施されている。土師器の甕4点のうち、「常総型甕」技法のものが2点（69・75）、



第88図 第三期（9世紀前葉）の土器

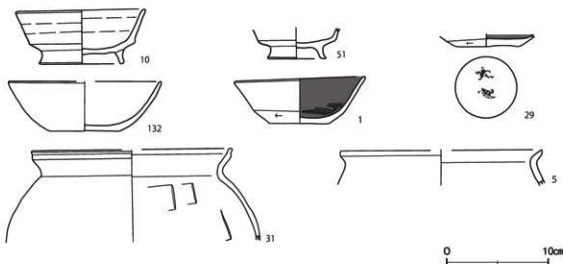
単純口縁で古墳時代からの系譜をもつ在地の甕と考えられるものが1点(124)、ロクロ成形されて外面に平行叩きが施されているものが1点(76)である。小形甕は、「常総型甕」技法のもの(72)、在地のもの(92)、体部外面にヘラ削りして器壁を薄く仕上げているもの(152)の3点である。

第Ⅳ期(9世紀中葉)(第89図)

第1・2・5・8・25・32・36号竪穴建物跡の土器が該当する。

出土遺物は、土師器(坏・碗・高台付坏・蓋・高台付皿・甕・小形甕)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・高台付皿・盤・高盤・短頸壺・甕)、土製品(支脚)、石器(砥石)、鉄製品(鐵)である。出土土器のうち、土師器片と須恵器片の比率は、4対1となる。そのうち供養具は、土師器片と須恵器片の比率が6対5で、土師器片の比率がわずかに高くなり、第Ⅰ～Ⅲ期の状況が逆転する。

遺構の廃絶時期に伴う出土土器は、須恵器の高台付坏2点(10・51)、土師器の坏3点(1・29・132)、甕2点(5・31)である。高台付坏は、体部下端に稜を有している。坏2点(1・29)は、体部外面下端に回転ヘラ削り、内面にヘラ磨き調整が施されている。甕は、「常総型甕」技法のものである。



第89図 第Ⅳ期(9世紀中葉)の土器

(2) 第10・19号竪穴建物跡出土の特徴的な土師器の甕(第25・41図)

出土した土師器で、焼成と調整に特徴的な甕が2点確認できた。76は口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は単純口縁で、頸部から体部上部外・内面にロクロナデ、体部中部外面に横位の平行叩きが施されている。119は口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は須恵器の甕に類似し、頸部外・内面にロクロナデ、体部外面に横位の平行叩きが施されている。2点とも体部中部に最大径があると推測される。2点ともに叩きが施されていることから、須恵器工人在製作に関わった可能性があり、当遺跡周辺に未確認の須恵器窯が存在する可能性²⁾がある。

(3) 胎土や調整技法が特徴的な須恵器

当遺跡から出土した須恵器のうち、木葉下窟産や新治窟産の胎土や調整技法とは異なるものが確認できたことから、胎土や調整技法についての肉眼観察による生産地ごとの分類を行った³⁾。その特徴は以下の

通りである⁴¹。なお本稿では、便宜上、「(仮称)多珂窯産」という呼称を用いる。

・「(仮称)多珂窯産A類」(以下、A類)は、長石、石英、鉄分が噴き出したものと思われる黑色粒子、白色粒子が胎土に含まれ、器面が礫によりざらざらと細かい凹凸があるもの。

・「(仮称)多珂窯産B類」(以下、B類)は、長石、石英、針状物質が胎土に含まれ、「A類」ほど器面が礫によりざらざらとしていないもので、ナデ調整が施されていることにより胎土が大理石模様になっているもの。

時期別の出土点数は、以下の通りである。

第1期(8世紀中葉)では、木葉下窯産が3点(78・156・161)である。

第2期(8世紀後葉)では、確認できなかった。

第3期(9世紀前葉)では、A類が1点(67)、B類が1点(101・191～194)、木葉下窯産が5点(66・89・141・182・195)、新治窯産が1点(90)である。

第4期(9世紀中葉)では、A類が1点(3)、B類が4点(10・51・169・170)、木葉下窯産が1点(30)である。

今回の調査で、「(仮称)多珂窯産A類」「同B類」の特徴をもつ須恵器は、9世紀以降に出現している。前述の当遺跡周辺に未確認の須恵器窯が存在する可能性について補完するものと言える。

(4) 墨書土器

今回の調査で墨書土器が18点確認できた。そのうち判読できた文字は、「小里」2点(84・86)、「貞」1点(112)、「大□」(29)、「牧」(182)、「本_々」(170)、「人_々」(98)、「×_々」(105)、「久_々」(64)、「得_々」(65)である。

墨書土器の器種別点数は、須恵器の坏2点(77・182)、高台付坏2点(170・175)、土師器の坏10点(29・50・59・60・61・62・63・98・105・112)、椀1点(84)、高台付坏2点(64・86)、高台付皿1点(65)である。時期及び遺構毎の出土点数は、8世紀中葉が1棟から1点、9世紀前葉が7棟から14点、9世紀中葉が3棟から3点である。

文字の意味について「集落の場合、一字の墨書土器が圧倒的に多く、個々の墨書を取り出して、意味内容を推定することは難しく、前掲のような分類作業はあまり有効とはいえない⁵¹」こともあるが、「本_々」については「奉」の字形変化と捉えた場合⁶¹、当遺跡の集落において、神への供献、饗食行為が行われていた可能性を示している⁷¹。

「小里」「貞」について、地名や人名の可能性がうかがえるが、当遺跡周辺に関連する地名及び人物についての伝承・記録からは確認できなかった。

「牧」については、御牧や諸国牧に関連する可能性がある。常陸国における官宮の「牧」は、信太郡の信太馬牧が挙げられる⁸¹。しかし、当遺跡から出土した「牧」と御牧や諸国牧を結び付けることはできないが、葦島駅家に近い立地条件から、当集落の周辺において、馬を飼育していた可能性はある⁹¹。「牧」の墨書土器は、第2B号掘立柱建物跡のP8の覆土下層から、残存状況が良好な状態で出土している。その出土状況から、第2B号掘立柱建物跡の性格は、馬の飼育に関わる施設の可能性がある。

3 集落について

当遺跡は標高24～27mのほぼ平坦な台地上に、東西約300m、南北約200mの範囲で確認されている。

今回の調査区域は、遺跡の南端部にあたる東西約180m、南北約100mの範囲で、奈良時代から平安時代までの竪穴建物跡36棟、掘立柱建物跡5棟、溝跡2条、土坑1基が確認できた。時期は、出土土器から8世紀中葉から9世紀中葉にかけて4期に分類した。

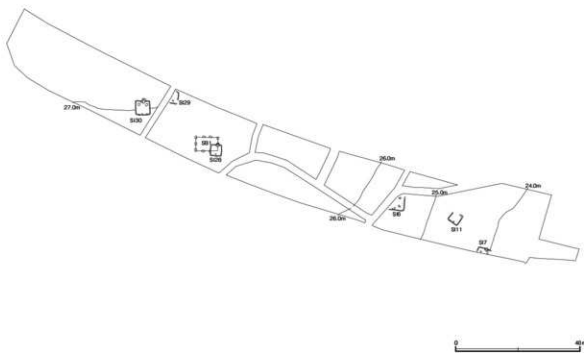
なお、竪穴建物跡については、小型・中型・大型に区別する。最大規模の竪穴建物跡（長軸5.60m）と最小規模の竪穴建物跡（長軸3.14m）の長軸の差から、それぞれ長軸4.00m未満、4.00m以上4.80m未満、4.80m以上とした^{10）}。また、掘立柱建物跡も小型・中型・大型に区別し、それぞれ面積20㎡未満、20㎡以上30㎡未満、30㎡以上とした。

(1) 集落の変遷（第90～94図）

第I期（8世紀中葉）（第90図）

当期は、第6・7・11・26・29・30号竪穴建物跡の6棟、第1号掘立柱建物跡の1棟が該当する。その内訳は、大型竪穴建物跡1棟（第30号竪穴建物跡）、中型竪穴建物跡3棟（第6・7・29号竪穴建物跡）、小型竪穴建物跡2棟（第11・26号竪穴建物跡）、大型掘立柱建物跡1棟（第1号掘立柱建物跡）である。

竪穴建物跡は、東部の標高25mほどの台地平坦面に3棟、西部の標高27mほどの台地平坦面に3棟確認できた。平面形は方形が3棟で、他3棟は調査区域外に延びていることから、方形または長方形と推定できる。確認できた規模は一辺（長軸）3.71～4.77mである。主軸方向は、第11号竪穴建物跡を除き、ほぼ北方向である。竈の内部構造では、竈が遺存している3棟のうち、第7・26号竪穴建物跡は、煙道部の壁外への掘り込みが25～30cmと短く、第30号竪穴建物跡は80cmと長い。第30号竪穴建物跡の竈の袖部には、凝灰岩の切石が補強材として使用されている。当期の切石使用率は17%である。第6・7・



第90図 第I期（8世紀中葉）

29・30号竪穴建物跡は、主柱穴が確認できた。特に第6号竪穴建物跡の柱穴は、土層から粘床が構築される前に、柱が立てられていることが確認できた。

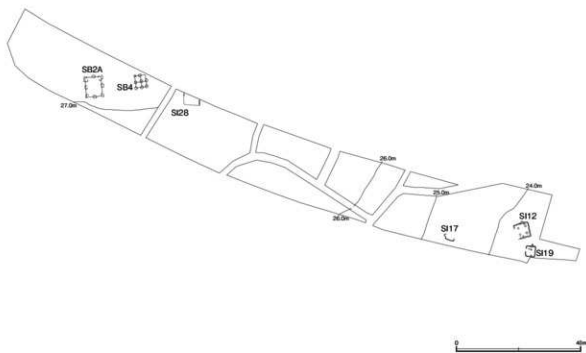
掘立柱建物跡は、東部に1棟確認できた。第1号竪穴建物跡は3×2間の側柱建物跡で屋としての機能が想定されている。本跡は土層から、同時期の第26号竪穴建物跡に掘り込まれている。このことから、本跡廃絶後にはどなく、第26号竪穴建物跡が建てられたと推測できる。

第Ⅱ期（8世紀後葉）（第91図）

当期は、第12・17・19・28号竪穴建物跡の4棟、第2A・4号掘立柱建物跡の2棟が該当する。その内訳は、大型竪穴建物跡2棟（第12・28号竪穴建物跡）、小型竪穴建物跡2棟（第17・19号竪穴建物跡）、大型掘立柱建物跡1棟（第2A号掘立柱建物跡）、小型掘立柱建物跡1棟（第4号掘立柱建物跡）である。

竪穴建物跡は、第Ⅰ期と同様に東部と西部の二つに分かれて確認できた。平面形は方形、長方形が各1棟で、他2棟は調査区域外へ延びているため、方形または長方形と推定できる。規模は、第12・28号竪穴建物跡を除き、一辺（長軸）288m・350mである。第12・28号竪穴建物跡の規模は一辺489m・500mで、当期の東部と西部それぞれにおいて最大規模である。確認できた主軸方向は、第17号竪穴建物跡が西を向いている以外、ほぼ同じ北方向である。竪の内部構造では、竪が遺存している第12・17・19号竪穴建物跡では、煙道部の壁外への掘り込みが54～60cmと長い。第12号竪穴建物跡は、主柱穴が確認できた。

掘立柱建物跡は、西部に2棟確認でき、第28号竪穴建物跡の西約10mに第4号掘立柱建物跡、西約24mに第2A号掘立柱建物跡が配されている。第2A号掘立柱建物跡は2×2間の側柱建物跡で屋として、第4号掘立柱建物跡は2×2間の総柱建物跡で集落共有の倉庫¹¹⁾としての機能が想定される。



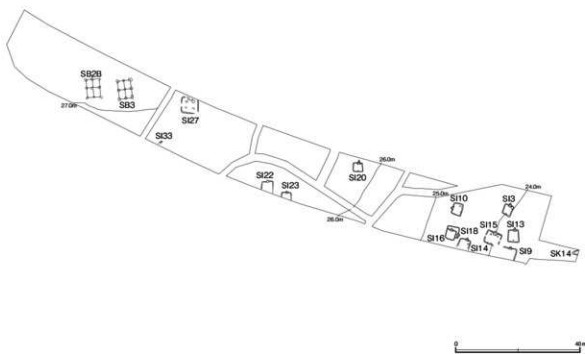
第91図 第Ⅱ期（8世紀後葉）

第Ⅲ期（9世紀前葉）（第92図）

当期は、第3・9・10・13～16・18・20・22・23・27・33号竪穴建物跡の13棟、第2B・3号掘立柱建物跡の2棟、第14号土坑が該当する。その内訳は、大型竪穴建物跡2棟（第15・27号竪穴建物跡）、中型竪穴建物跡1棟（第9号竪穴建物跡）、小型竪穴建物跡9棟（第3・10・13・14・16・18・20・22・23号竪穴建物跡）、規模不明な竪穴建物跡1棟（第33号竪穴建物跡）、中型掘立柱建物跡2棟（第2B・3号掘立柱建物跡）である。第Ⅰ・Ⅱ期に比べて、小型竪穴建物跡が増加している。

竪穴建物跡は、全域で確認でき、東部に集中している。平面形は方形が4棟、長方形が3棟で、他5棟は調査区域外へ延びているため、方形または長方形と推定できる。規模は、第15・27号竪穴建物跡を除き、一辺（長軸）3.14～4.68mである。第15・27号竪穴建物跡の規模は一辺（長軸）5.07m・5.60mで、当期の西部と東部のそれぞれにおいて最大規模であり、中心的な建物と考えられる。主軸方向は第10・18号竪穴建物跡を除き、ほぼ北方向である。第10号竪穴建物跡の主軸方向は西向きで、第18号竪穴建物跡の主軸方向は東向きである。竪の内部構造では、煙道部の壁外への掘り込みが40～70cmで長い。第3・9・16・18・20・27号竪穴建物跡の竪の袖部には、凝灰岩の切石が芯材または補強材として使用されている。当期の切石使用率は46%である。第3・13・15号竪穴建物跡の火床部には、支脚が横並びで2か所掘え付けられている。第15・27号竪穴建物跡は、主柱穴が確認できた。

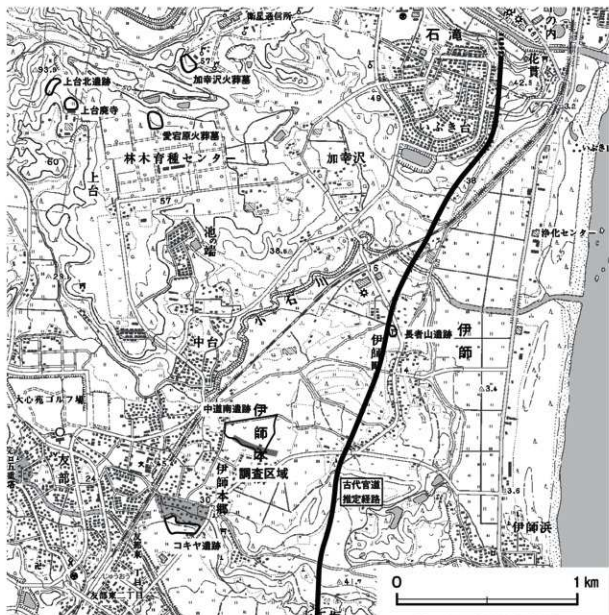
掘立柱建物跡は、西部に2棟確認でき、第27号竪穴建物跡の西約16mに第3号掘立柱建物跡、西約24mに第2B号掘立柱建物跡が配されている。第2B・3号掘立柱建物跡はそれぞれ、2×2間の総柱建物跡である。第2B号掘立柱建物跡は、「牧」の黒書土器の出土状況から、馬の飼育に関わる施設と考えられる。また第3号掘立柱建物跡は、集落共有の倉庫¹²⁾としての機能が想定される。



第92図 第Ⅲ期（9世紀前葉）

南北に走ると推定されている古代官道¹⁵⁾がある(第94図¹⁶⁾)。また、北東約0.9kmには官道の駅家として深島駅家に比定される長者山遺跡があり、北西約2.1kmには多珂郡の郡衙候補地とされる上台北遺跡や上台廃寺がある¹⁷⁾。それらが中道南遺跡の集落の変遷に大きく関わったと考えられる。

8世紀前葉に古代官道や深島駅家が整備されたことが、当地に集落が形成された要因と考えられる。当調査区域の西部では、8世紀中葉に第1号掘立柱建物跡が確認され、続く8世紀後葉から9世紀前葉にかけても、掘立柱建物跡が配されていることから、継続して集落が営まれたと考えられる。8世紀中葉に、東部には第6号竪穴建物跡、西部には第30号竪穴建物跡が配されており、経営の中心的な建物と考えられる。8世紀後葉には、西部では第28号竪穴建物跡、第2A・4号掘立柱建物跡が近接して配されていることから「側建物+総柱建物+竪穴建物」という組み合わせが想定され、取獲物を収納する場と位置づけることができる。9世紀前葉には、第27号竪穴建物跡、第2B・3号掘立柱建物跡が近接して配さ



第94図 古代官道推定経路図

れていることから、「総柱建物+総柱建物+堅穴建物」という組み合わせが想定される。第2B号掘立柱建物跡の性格が馬の飼育に関わる施設であれば、この組み合わせは西部に馬の飼育施設が存在したと捉えられる。

9世紀前葉になると、当遺跡周辺において圃期を迎える。弘仁3(812)年に葦島駅家が廃止されることである。葦島駅家に比定される長者山遺跡では、8世紀前葉に造営された第15号掘立柱建物跡をはじめとして、10世紀前葉に廃絶となる礎石建物跡まで、コの字に配置される建物群が確認されている¹⁸⁾。当調査区域で掘立柱建物跡が確認できる8世紀中葉から9世紀前葉までは、葦島駅家が古代官道の駅家として機能していたとされる時期と合致する。

9世紀中葉になると、当調査区域の全域で遺構数が前期に比べて減少する。特に西部で掘立柱建物跡が確認できなかったことは、集落に変容が見られ、施設が当調査区域外へ移動したためと考えられる。弘仁3(812)年に葦島駅家が廃止され、本跡の東側を通過していた古代官道が付け替えられたことが、集落の新しい様相へ移行する要因と考えられる¹⁹⁾。

4 おわりに

中道南遺跡は、堅穴建物跡や掘立柱建物跡が確認でき、「小里」「貞・廣」「大□」「牧」「本。」などの墨書土器が18点出土し、木葉下窟産や新治窟産の須恵器の流通が見られること、東北地方南部の土師器が流入していること²⁰⁾などから、人や物の流通の拠点となる駅家近くに存在する集落と考えられる。今回の調査地点は、中道南遺跡の南端部にあたり、集落の全容を捉えるところまでは至らなかったが、奈良時代から平安時代にかけての集落の様相の一端を確認することができた。調査結果から、日立海岸台地とそれを取り巻く河川や海、多賀山地や海岸低地に挟まれた地形的環境と、同時期の葦島駅家や多珂部衙との関連を視野に入れながら遺跡の様相に迫ることに努めた。今回の調査報告が地域の歴史の解明の一資料となるとともに、奈良時代から平安時代にかけての遺構や遺物の研究の一助となれば幸いである。

註

- 1) a 土生朗治「常陸地方出土のI期の須恵器の性格について(中)」『年報』第10号 茨城県教育財団 1990年3月
b 浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(1)」『研究ノート』創刊号 茨城県教育財団 1992年7月
c 佐々木義則「木葉下窟跡群産A1の変化について—消費地における形態と調整技法の様相—」『奈良岐考古』第17号 奈良岐考古同人会 1995年5月
d 川井正一「長者山遺跡出土土器の編年の位置について」『長者山遺跡—平成20～24年度発掘調査報告書』『日立市文化財調査報告』第96集 日立市教育委員会 2013年3月
- 2) 菅原祥夫氏より、陸奥類の例として、明きのある土師器ロクロ要が須恵器生産地に近い遺跡で、9世紀以降の遺構から数発的に確認されるとご教示頂いた。
- 3) 肉眼による産地同定の方法については、赤井博之氏及び佐々木義則氏が「茨城県北東部産A類」及び「茨城県北東部産B類」を提示しているが、今回の調査では、この2種類にあってはまる胎土の特徴を示す須恵器を確認できなかった。赤井博之 佐々木義則「茨城県における須恵器の流通—供膳器を中心とした須恵器の内眼観察による産地同定と今後の課題—」『奈良岐考古』第28号 奈良岐考古同人会 2006年5月
- 4) 早川麗司氏よりご教示頂いた。
- 5) 平川南『墨書土器の研究』吉川弘文館 2000年11月

- 6) 註5と同じ
山形県寒河江市三条遺跡において、「本」が「奉」の各種の字形変化を示した事例として紹介している。
- 7) 猪狩俊哉 小林佳南子「長者山遺跡 藩島駅家推定遺跡平成25年度発掘調査概報」『日上市文化財調査報告』第99集 日上市教育委員会 2014年3月
長者山遺跡において、須恵器環の底部に「□本」(□は木偏に傍が不明)が出土している。
- 8) 安田初雄「古代における日本の放牧に関する歴史的考察」『福島大学芸学部論集 社会科学』第10号 福島大学芸学部 1959年3月
「延喜式」によると、律令体制下において、各国には御牧・諸国牧・近都牧があった。常陸国においては兵部省の所轄に属し、国司が管理する諸国牧が信太馬牧が信太郡にあったとされる。
- 9) 猪狩俊哉「常陸国藩島駅家推定地の調査 -茨城県日上市長者山遺跡の調査を通じて-」『国士館考古学』第6号 国士館大学考古学会 2014年5月
猪狩俊哉氏は、「駅家はそれだけで存在し得たものではなく、その背後には「駅戸」集落が存在する。」と述べ、当遺跡には藩島駅家を支えた集落としての可能性がある。
- 10) 文化庁文化財部記念物課監修「発掘調査のつぎへ-集落遺跡発掘編-」同成社 2010年5月
「竪穴部の床面積は、平均すると(中略)8世紀に入ると20㎡弱。9世紀には14㎡以下となり、10世紀には10㎡前後の小型のものが中心となる。」とあるが、調査区域における建物規模の傾向を確認するため、基準を示した。
- 11) 今回の調査では、手掘土器片が3点出土している。1点は第30号竪穴建物跡から、他2点は第3・4号掘立柱建物跡である。手掘土器が祭祀的な意味をもつのであれば、廃絶する際に祭祀的な行為を行った建物と考えられる。これらの建物は、集落で共同利用する倉庫などの施設として捉えられる。
- 根山林継「祭祀具」『古墳時代の研究 3生活と祭祀』雄山閣 1991年3月
- 12) 註11と同じ
- 13) 今回の調査では、8世紀後半の遺構から凝灰岩の切石を袖部の芯材または補強材に使用した壘を確認できなかった。廃絶時期が、8世紀代と考えられる第4・24号竪穴建物跡の壘には、凝灰岩の切石が芯材または補強材に使用された痕跡が確認できた。このことから、集落では途絶えることなく、凝灰岩の切石を芯材または補強材として壘の袖部に使用していたと推測できる。
- 14) a 早川麗司 渡邊浩実「仁井谷遺跡 神岡上遺跡 古屋敷遺跡 叶南前A遺跡 一般県道里根神岡上線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第275集 2007年3月
当遺跡の遺構外出土遺物として掲載されている79は、第12号竪穴建物跡の覆土層から出土している東北地方南部の土器「栗岡式土器」の形態及び製作・器面調整技法の特徴を有している。「栗岡式土器は古墳時代後期後半に成立し、その下限は、8世紀前半と考えられている。」ことから、当遺跡から出土した79は、調査区域外に8世紀中葉～9世紀中葉に該当しない時期の遺構の存在の可能性を示している。
- b 宮本久子「コキヤ遺跡 友部・伊部浜線(市道10096号線)道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」『日上市埋蔵文化財調査報告書』第90集 有限会社毛野考古学研究所 2011年11月
- 15) 志田諱一「蝦夷征討と海道駅路」『十王町の歴史と民俗』第12号 十王町編集委員会 2003年3月
多珂郡を通る東海道について、志田諱一氏は「常陸国府までの駅路と国府北の駅路は同じ規模の駅路ではないと思っている。国府北から石城国の海道の駅路は、突貫工事で作られた軍用道路なのである。「大道」に対する「特別道」あるいは「支道」の性格があったのではなかろうか」と述べている。
- 16) 第94図「古代官道推定経路図」については、次を参考に推定経路を作成した。
- a 木下良「常陸の古代交通路に関する二、三の問題」『常陸の歴史』第16号 巖書房 1995年11月
- b 川井正一「常陸国」『日本古代道路事典』八木書店 2004年5月
- c 片平雅俊「駅路が存在 -日上市域における復元路線の提示と若干の問題提起-」『茨城県考古学協会誌』第25号 茨城県考古学協会 2013年5月
- d 片平雅俊「続・駅路が存在 -旧日公園を考古学研究に活用する-」『茨城県考古学協会誌』第26号 茨城県考古学協会 2014年5月

- e 註9と同じ
- 17) a 註16 aと同じ
- b 浅井哲也「十王町愛宕原火葬墓出土遺物について」『十王町民俗資料館紀要』第6号 十王町民俗資料館 1997年3月
浅井哲也氏は多珂郡衙が、北茨城市大津庵寺から上台北道跡付近に移転した時期を、愛宕原火葬墓で1回目の埋葬が行われた9世紀前葉ではないかと述べている。東国での火葬の隆盛を8世紀終わりから9世紀代とし、本跡で火葬が行われたことを、郡司層にとって、地方における先進文化の体現者という主張、地方における優位性や差異性を示す十分な行為であったこととしている。
- 18) a 註7と同じ
- b 註9と同じ
- 猪狩俊哉氏は、長者山道跡で確認された掘立柱建物跡群の時期を8世紀中葉から9世紀中葉としている。
- 19) 註9と同じ
- 猪狩俊哉氏は、長者山道跡において掘立柱建物群の廃絶後に、礎石建物群が造営され、正倉別院の可能性を指摘していることから、集落は衰退したのではなく、次の様相への変容を遂げたと考えられる。
- 20) 註14と同じ

参考文献

- 佐々木義樹「常陸国河内郡における掘立柱建物跡群の展開～8・9世紀の様相～」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会 2005年5月
- 吉川明宏「一般国道6号（日立バイパス）改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 金木場遺跡 向畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第59集 1990年3月
- 阿久津久「古代における村の構造的研究（2-1）」『日立史苑』第4号 日立市郷土博物館 1991年3月
- 阿久津久「古代における村の構造的研究（2-2）」『日立史苑』第5号 日立市郷土博物館 1992年3月

写 真 图 版



第19号竖穴建物跡 出土遺物

第3号竖穴建物跡
竈支脚出土状況



第3号竖穴建物跡
完掘状況



第3・4号竖穴建物跡
完掘状況



PL2



第15号竖穴建物跡
竈支脚出土状況



第15号竖穴建物跡
第1号溝跡
完掘状況



第20号竖穴建物跡
竈支脚出土状況

第20号竖穴建物跡
完掘状況



第27号竖穴建物跡
完掘状況



第30号竖穴建物跡
完掘状況



PL4



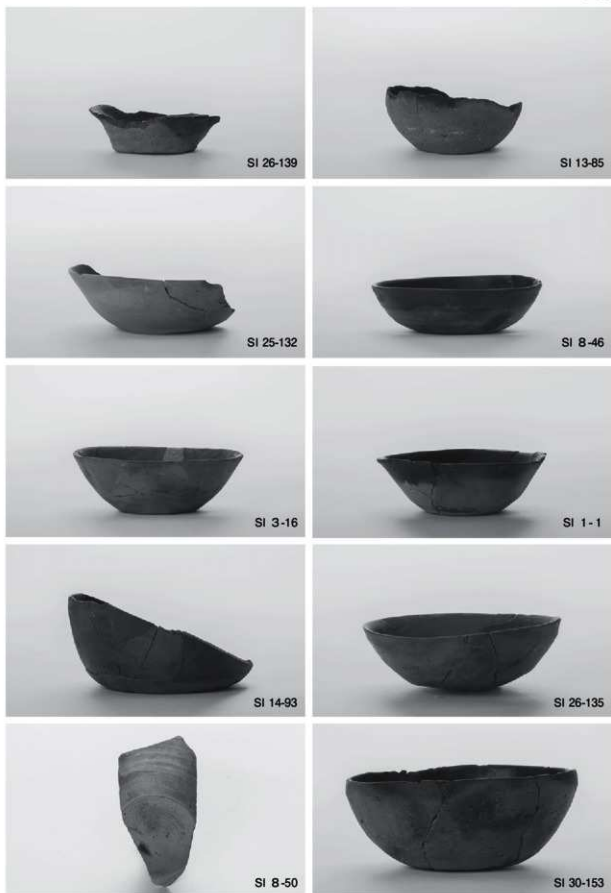
第26号竖穴建物跡
第1号掘立柱建物跡
完掘狀況



第2A・B号掘立柱建物跡
第6・7号溝跡
完掘狀況

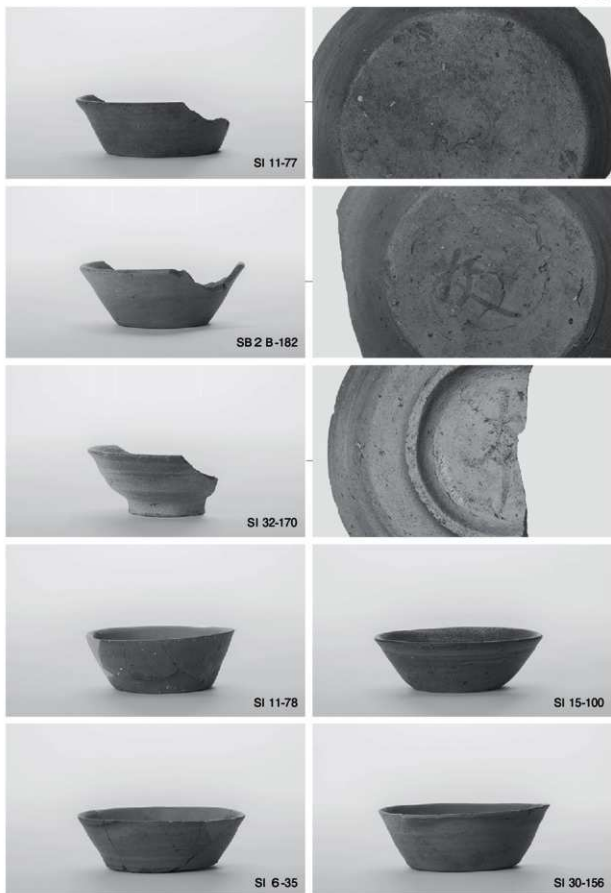


第34号竖穴建物跡
第4号掘立柱建物跡
第3号溝跡
完掘狀況



第 1・3・8・13・14・25・26・30号竖穴建物跡出土土器





第6・11・15・30・32号竖穴建物跡，第2B号掘立柱建物跡出土土器



第 2 · 13 · 15 · 19 · 20 · 26 · 27 · 32号竖穴建物跡, 第 2 B号溝跡出土土器



第1・9・13・32号竖穴建物跡，第14号土坑，遺構外出土土器

PL10

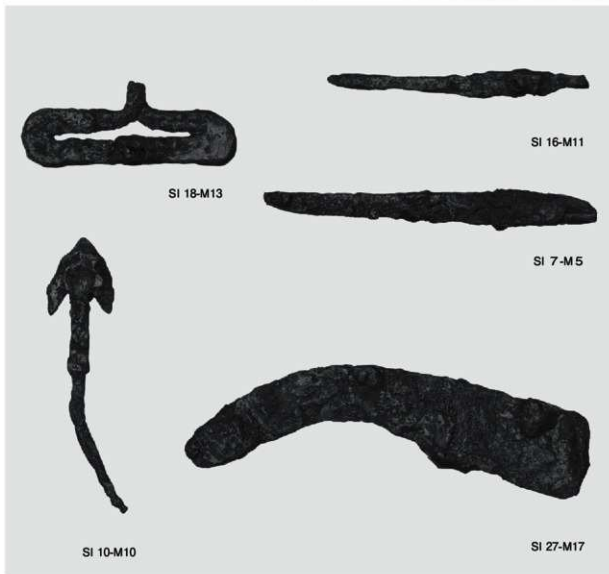


第20・30号竖穴建物跡，第14号土坑，遺構外出土土器



第1・4・5・8・9・15・18・20・26号竪穴建物跡，遺構外出土遺物

PL12



第 1 · 3 · 7 · 9 · 10 · 16 · 18 · 26 · 27号竖穴建物跡出土遺物

抄 録

ふりがな	なかみちみなみいせき							
書名	中道南遺跡							
副書名	都市計画道路十王北通り線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第400集							
著者名	木村光輝							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2015(平成27)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
中道南遺跡	茨城県日立市十王町伊師本郷字中道南958の一部他	08381 - 026	36度 40分 39秒	140度 41分 45秒	24 ~ 27m	20130701 ~ 20130930	3,309 m ²	都市計画道路十王北通り線整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中道南遺跡	集落跡	奈良・平安	堅穴建物跡	36軒	土師器(坏・碗・高台付坏・蓋・高台付皿・鉢・甕・小形甕・瓶・手捏)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・皿・盤・高盤・短頸壺・甕)、墨書土器、土製品(支脚)、石器(砥石・砥石・紡錘車)、鉄製品(刀子・鎌・釘・鎌・火打金)、青銅製品(刀飾金具)			
		時期不明	溝跡	9条				
			土坑	1基				
			土坑	11基	縄文土器(深鉢)、土師器(坏・鉢・甕)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・壺・甕)、磁器(不明)、土製品(紡錘車)			
要約	奈良時代から平安時代にかけての集落跡である。8世紀中葉から9世紀前葉までの掘立柱建物跡が多く、瀧島駅を支える集落として繁栄していたと考えられる。「牧」「本」 「小里」と墨書された土器が出土していることから、当集落に識字者の存在がうかがえる。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack 1
	編集	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS5
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000 図面類 EPSON ES-G11000
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第400集

中道南遺跡

都市計画道路十王北通り線整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成27(2015)年 3月13日 印刷

平成27(2015)年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

〒311-0114 那珂市東本倉280-3
TEL 029-295-2272